

源氏物語評釈

夕顔

四

第四帖

夕顔 評釈

旧注 これも豎の并なり。以^テ歌并詞^ニ為^リ卷名^ト。詞には「かの白くさけるをなん夕顔と申侍る」とあり。歌は「心あてにそれかとぞ見る白露のひかりそへたるゆふがほの花、へよりてこそそれかとも見めたそかれにほのぼのみつる花の夕がほ、などあり」。

釈井の巻の事は空蟬巻のはじめにいへるがごとし。しひてかかはりなづむべからず。ただ帚木巻の末より空蟬巻までの事と同じ比の事なるを、事のすぢを分たんために別に書分ちたるものとのみ見るべし。但此巻までは帚木巻より一つらにつづきたる文なることも、上にいへるがごとし。評此巻は、もはら夕顔事をかたるをむねとして、さて玉葛君の事をのこしおく伏案を立たり。其中に、六条御息所の事をはじめてほのめかし出て、つひに葵巻、榊巻にいたりて其事どもを詳にすべき伏線を挿めり。そのよしは上にも下にも委くいへれば、ここには省きつ。さて又惟光朝臣の事、大式乳母の事など、此巻よりはじめてあらはされたり。それも何となく物語の中に挟みて、おのづからしらるるやうにかかれたるは例の法にて、事をきははしくせぬ筆つかひなるべし。又空蟬の事を所々挿みてあらはしたるは、夕顔と同じほどに対へ出たる人なるに、かつ兩夜の物語のなごり、源氏君のかかるくまぐままでものし給ふ事をあへなく絶しめじが為にとり出られしものなるべし。軒端萩は、ただかのもぬけの夜のかたしろばかりなるを、なほさておかんがあへなくて、とりそへてあらはされたる也。さて、つひに夕顔の四十九日のわざはてたる所に、伊予介、空蟬をぬて国へ下りゆく事を引合せて、「過にしもけふわかるるも二道に云々」といふ歌をもて此巻をとちめられたるは、帚木巻

春田正輅ノ年立ノ説、江談抄ノ河原院ノ事ハ、共ニ余釈ニ準タルヲ見ルベシ。

とも、事がらさばかりはあらぬものなれば也。されば、猶今すこし引はへて闇のよごろの事とせられたらばと、いとあたらしくおぼゆるは、なほかいなでのひが心にやあらん。案に、これは旧注に引れたる江談抄の河原院にて、京極御息所を融公の霊のおびやかしたる古物語をしたに思ひてかかれたるが、かの「入^テ夜月明^ニ」とあるなどを思はれたるにも有べからんか。さらば、あなたがちに作者の思ひおとされたるにもあらざめれど、猶事がらのけしきはあかぬこちぞする。されど、今はたかかゝる事をあなぐりいでていはんは、あまりにこちごちしきわざなれば、しひていふべき事はあらず。ただそのくだりのいみじきをのみめでくつがへるべし。

○五条の宿のくだり、いとめでたし。さて巻首にもいへりしごとく、夕顔上は、浮船君に相照し対へたる書ざまなり。されば、この五条の宿は東屋巻なる三条の家に対へたる也。東屋巻にいはく、「かやうの方がへ所と思ひて、ちひさき家まうけたりけり。三条わたりに、ざればみたるが、まだつくりさしたる所なれば、はかばかしきしつらひもせでなん有ける云々」。又云、「たびのやどり^{三条の家也}はつれづれにて、庭の草もいふせきこちするに、いやしきあづま声したるものどもばかりのみ出入なぐさめに見るべき前栽の花もなし云々」。又いはく、「ほどもなうあけぬるこちするに、鳥などはなかで、おほちちかき所におほだれたるこゑして、いかにとか聞もしらぬなのりをして、打われてゆくなどぞ聞ゆる。かやうの朝ぼらけに見れば、物いただきたるもののおにのやうなるぞかしときき給ふも、かかるよもぎのまろねにならひ給はぬこちに、をかしうも有けり云々。九月にも有けるを云々。けふは十三日なりけり云々」とあるなどを引合せておもふべし。正しく五条の八月十五夜に、三条の九月十三日をむかへたる書ざまなるに、正身を車にかきのせてに

より打つづきたる事の末を結びたるものにて、いといと心ふかくたくみなる物なり。其末に「かやうのくだくだしき事は云々」といふよりは、かの帚木の発端の語をむすびたる物なること、そこに委しくいへるがごとし。葵上の事、藤壺宮の事などにほはせたるは、上下の事の脈のおしとほりたるを見せたるのみにて、さして論なし。されど、遠く其線の貫きとほれる事をしたどめおくべし。

○此巻は、なにがしの院のへんぐゑの段を主としてかけるものなる故に、夕顔の事のみは始より終までいとあやしくゆくりかにめづらかなるさまにとりなされたり。されば、はじめに「いかなる物のつどへるならんと、やうかはりておぼさる」と書はじめたるより、所々に鬼物また狐また変化などの語を挿み、また「あやし」といふ語を眼目としてあやなされたるなど、いとちからありてめでたく聞えたり。されば、文づらをもそこはかとなくまぎらはして、かの段にかかる所まではさまざま打あはぬさまなるを、夕顔上のうせて後、右近にたたらせてさることと思ひ合さるるやうに書ほどかれたる、いといとめでたし。されど、あまりにあやしく書かすめられたる故にや、なほうちあはぬことどももある事、かの惟光がけさうを思ひゆづりたる事がらのきはやかにしられぬ事、また春田正輅が難じたる六条御息所の紀年の打あはぬこと、鈴木朗が咎めたるずゐじんの顔を見ては忽源氏君としらるべき事、又旧注にもいはれたる、夕顔の花をのせたるあふぎに歌かきたるは、夕顔上のおほどかに物はちする本上にてはかなひがたきよしの事など、すべてたどしきあざやかならず。それが中にも、何がしの院の変化の事は、八月十五夜のまたの夜なれば、正しく八月十六夜也。然るに、かしこのけうとくものおそろしきけしき、月夜の事としてはいささかあへなく聞ゆべし。さるは、月の夜はいかばかりあればたる所にて、かつ雨風の物すごさを添たり

はかに出給へるなども、いとおく似たり。さて又浮船君の身をなげんとして物にけどられていざなひ出られたるも、此巻の何がしの院の変化に対へたる物なり。右近といふ女房の名を同じさまに作られたるなどは、此すぢを示せんとしてわざと構へられたるものに似たり。猶かしこにいふを見てしるべし。

○へんぐゑのくだりは此巻のむねとある所なれば、めでたき事いふもさならねど、なほいとやはらびたる文の詞もて、たとしへなく物すごくむくむくしきさまをあくまにかかれたる、いといみじともいみじといふべし。すべて作り物語は、いかさまにも作りなさるべき事なれば、へんぐゑのさまもいとおどろおどろしき物のかたちをあらはしいで、またそのあやしびの結びには観音の仏力など引出て、首尾をととのへ書のがるるが大かたのならひなるを、さらにさるこつじたる筆の跡をあらはさず、ただ一ふしものすごきけしきをとりあつめたる夢の中にをかしげなる女のあらはれたる事のみをかかれたる、いはんかたなくめづらしくめでたし。しかして其事のすぢをいひもてゆく時は、皆ただこなたの心からあらはれたるさまに書かすめられたるなど、ものことわりをいとおく思ひさとられけん心しらひ見えて、作者のさえのほど、かへすがへすもいみじく聞えたり。大かた今の世にも出くるあやしき物語どもも、その本のすぢをせめていひもてゆけば、皆かかるさまの事なるぞおほかる。浮船君のけどられぬるくだりなどは、殊にさる心してかかれたりと見えて、いみじき事どもいと多かり。そこにいふを相照して見るべし。さて此夕顔上も浮舟君も、あまりに大どき過て立たる心なくただよはしき人なるからに、さるへんぐゑどもにもけどられたるなるべし。詞のうへにさる事どもは見えねども、さる心してかかれたりと見ゆる事どもいと多し。心をつけて見るべき也。

六条わたりの御忍びありき

〔細〕六条御息所の事、はじめて書出たり。帚木巻に、「忍び忍びの御かたがへ所は、あまたありぬべけれど」と有。此語より出たり。

〔評〕細流の御説のごとく、帚木巻の脈なるべし。さて此御息所の事は、ここにはじめて伏線のはしをあらはしたれど、未だ誰ともしられぬさまにかきかすめ、次々にも其脈をほめかしながら、猶かくし置いて、葵巻にいたりて前坊の北方なるよしをほころばしたる筆づかひ、妙なりとも妙なるもの也。此事は上にもいへり。猶下にいふべし。

大貳のめのと

〔花〕源氏のめのと、皇子の例ならば二人たるべき歟。親王のつらならは三人たるべし。下の詞に「はぐくむ人あまたあるやうなりしかど」との給へり。大貳のさしつぎに左衛門のめのととてあり。末摘花巻に見えたり。五条わたりなる家

〔釈〕「わたり」三字、余滴に引る異本によりて加へつ。

惟光

〔新〕大貳のめとの子なる故に、源氏の家令の如くて在しが、後には民部大輔といへり。

はじとみ

〔新〕部は、一間を皆ふたぐべく作りたるを挙おくをいふ。半部は、下の方を板してかためて、半上の方のみひらきあぐるやうにしたるをいふ。此所は宿の前に長屋をたてて、半部して物みる料としたれば、二階めきて高きなるべし。故に、其内に立てゐる人は、たけ高きやうに外より見ゆるなり云々。

御車もいたうやつし給へり

〔箋〕網代車也。前に「御忍びありきの比」と有。網代車は、女などものるものなれば、誰ともしらせじとて乗用する也。仍て、路次にて人に対して礼などもなき也。

さきもおはせ給はず

〔新〕三位已上の人は、必さきおはする也。枕冊子に「大さき・小さき」などいへり。

〔湖〕警蹕にて、往来の人をとどめいましむる也。これは忍び給ふ故、さきをも追せ給はぬ也。

かどはしとみのやうなるを

*六条わたりの御しのびありきの比、うちよりまかで給ふなかやどり源氏君 内裏 中宿

に、大貳のめとのいたくわづらひて、あまになりにける、とぶら湖命のため尼になりたるべし 乳母 尼 △ヲ 訪

はんとて、五条わたりなる家たづねておはしたり。御車いるべき門*イ 五条なる家 △御トモ 令召 待 ウチ ミム

はさしたりければ、人して惟光めさせて、またせ給ひけるほど、むねは大門をはさしたるべし △御トモ 令召 待 ウチ ミム

つかしげなるおほぢのさまを見わたし給へるに、此家のかたはらに、シヤクシヤトシタ 大 路 乳母ノ家

ひがきといふものあたらしうして、かみははじとみ四五けんばかりグアルシイ 新 上 半 部 間 ホド

あげわたして、すだれなどもいとしろうすずしげなるに、をかしき蘆 白 涼

ひたひつきのすきかげ、あまた見えてのぞく。たちさまよふらんし湖夕顔の家の女ども也 透 影 覗 物見ントテ立サワクサマ也

もつかた思ひやるに、あながちにたけたかきこちぞする。いかな下 方 メ ツ タ ニ セイ

るもののつどへるならん、とやうかはりておぼさる。御車もいたう集 在 様

やつし給へり、さきもおはせ給はず、誰とかしらんとうちとけ給ひ+ ヤ ツ シ 給 へ り 前 驅 手ガルクシ

て、すこしさしのぞき給へれば、かどはしとみのやうなるをおしあ△車ノ物見ヨリ イ を ナシ 押

けたる、見いれのほどなく物はかなきすまひを、あはれにいつこ開 見 コ ミ 間 *

かさしてとおもほしなせば、玉のうてなもおなじ事なり。きりか玉 台 * ◆

けだつ物に、いと青やかなるかづらの、こちよげにはひかかれるメ ク 葛 蔓

に、白き花ぞおのれひとりゑみのまゆひらけたる、をちかた人に己 独 咲 眉 開 *

物まうす、とひとりごち給ふを、みずゐじんついゐて、かの白くさ独 言 御 身 艶 詞

をちかた人に

〔河〕打わたすをちかた人に物申すわれそのそこに白く咲るはなにの花ぞも古今集旋頭歌

御隨身

〔湖〕品はさふらひ分際の者也。六位までなる也。

〔箋〕源氏当官中将也。小隨身たるべき也。

花の名は人めきて

〔釈〕「顔」といふにつきて、「人めきて」とはいへる也。「おのれひとり」といへるより、縁の詞あぢはふべし。

あやしきかきねに

〔評〕此巻は、下の変化の段を主としてかける物なる故に、上に「いかなる物のつどへるならん、とやうかはりておぼさる」といへるを初にて、ここに「あやしきかきね」といひ、次に「あやしう打よろぼひ」といへる、すべてその脈にて、「あやし」といふを眼目の語として畳みかけてつかひたる物也。かれ、右旁に◎点を物して、其しるしとす。心をつけてあぢはへ見るべし。

むねむねしからぬ

〔玉〕たしかにそれともなきさまにて、はかなきをいふ。俗言に「しかともせぬ」といふ意也。

このおしあけたるかどに

〔細〕前に「門は薜のやうなるを、おしあけたる」といひしこと也。

〔釈〕「この」はかのといふべきをいへる例の詞也。さて、上なるを押上たるとしては、この語勢にかなはず。何れも「開」也。

ざれたるやり戸口に

〔釈〕かくあやしき所ながら、さすがに戸口はしやれて心あるさま也。「やり戸」は、今いふ引戸也。門よりは内の戸口と聞ゆ。

枝もなさけなげなめる花を

〔玉〕夕顔の枝は蔓にて、おほどれはびこりたる物なれば、手よりただには奉りにくかるべきほどに、此扇にすゑて奉れ、といふ也。

かどあけて云々

〔細〕此御隨身、花を直に参らすべき事をいかがと思ふ所へ、惟光門をあけて参りたるして奉る也。かやうの書さま、えもいはれぬ所あるにや。

〔釈〕此御説よろし。

惟光があにのあざり

〔余〕釈氏要覽「菩提資糧論云、阿遮梨夜、隋言正行」。南山抄云、能糾正弟子行故」。

〔釈〕阿闍梨は比叡山の僧なるよし、末に見えたり。

〔評〕惟光が伝をなにとなくあらはされたる、例のめでたし。上に「惟光めさせて」といひ出て、次に「惟光の朝臣の出きたるして」といひ、ここに至りて「惟光が兄の」といへるにて、やうやう惟光は御めのどの子なるよししられたり。心をつけて見るべし。さて此人は、源氏の家令めきたる人にあげなる名をまうけてつけたる也。もじも光る君の光るによせたるなるべし。

たゆたひしかど

〔釈〕御覽ぜらるることのかはらん事をくちをしく思ひて、死がたくありしといふ意を、「たゆたひ」といへる也。

いむことのしるしに

〔釈〕尼になりて戒を授りたる功德に、甦生して再び源氏君にあひ奉れば、今は快く身まかるべし、といふ意也。「いむこと」は「いみこと」にて、五戒の事也。

けるをなん夕がほと申侍る。花の名は人めきて、かうあやしきかき＊◎◎◎へ＊ンナ垣

ねになんさき侍りける、とまうす。げにいと小家がちにむつかしげ根ムサクロシゲ

なるわたりの、+このもかのもあやしう打ヨロボフよろ拾ぼ徒ひ倚て、むねむねしか＊+アチラコチラヒヨロツキ

らぬ軒のつまごとに、はひまつはれたるを、くちをしの花のちぎりイなどシアハセ

や。一ふさをりてまぬれ、とのたまへば、＊このおしあけたる門にい英折開

りてをる。さすがに＊ざれたるやり戸ぐちに、きなるすすしのひとへ入折シヤレヒキド黄生細單

ばかま、ながくきなしたるわらはのをかしげなるいできてうちまね袴着女童ウツクシゲ△カ△隨身ヲ

く。しろきあふぎのいたうこがしたるを、これにおきてまぬらせよ。細たき物の匂ひにかしたるなるべし△出シテ置サシアゲ

えだもなさけなげなめる花を、ととらせたれば、かどあけて惟光＊△情枝門開

の朝臣のいできたるして奉らす。かぎをおきまどはし侍りて、いと惟光詞論置ワスレ

ふびん不便なるわざなりや。もの+あやめ見給へわくべき人も侍らぬわワカチ分

たりなれど、+らうがはしきおほぢにたちおはしまして、とかしこまラチモナイ大路△恐多キコトニ侍リオコ

り申す。ひきいれており給ふ◎これみつがあにのあざり、むこのみトワリヲ△車ヲ下阿闍梨婿三

かはのかみ、むすめなどわたりつどひたるほどにて、かくおはしま河守米集ジフン△源ノ

したる+よろこびを、またなき事にかしこまる。尼君もおきあがりて、オレイ再アリガタガル大式乳母也

をし尼君詞げなき身なれど、すてがたく思ひ給へつることは、ただかくお惜氣御

まへにさぶらひ御覽ぜらるることのかはり侍りなん事を、くちをし前△源二変ザンネン

う思ひ給へたゆたひしかど、いむことのしるしに、よみがへりてなニ猶予△中験甦

ん、かくわたりおはしますを見給へ侍りぬれば、今なんあみだ仏△我方◎コッホトケ弥陀

御ひかりも、心ぎよくまたれ侍るべきなど聞えて、よわげになく。ノ来迎ナリスツハリト心ヨク待

かく世をはなるるさまに

〔**釈**〕尼になりたるは、世を遁れ離るる也。

なほ位たかく

〔**細**〕吾昇進などをきはめ給ふべき御末をも見給へ、と也。

ここの品のかみにも

〔**細**〕九品上品上生なり。「今こそあみだ仏の御光も心清く」といひし返答に奇特の詞也。

うらみのこるは

〔**湖**〕一念にても臨終に思ひのこす事ありて此世に執着のとどまるは、後世の障となる心也。

〔**玉**〕かやうの「うらみ」は、俗にざんねんなるといふ意なり。

つきじろひめくはす

〔**玉**〕詞にはいはで、肩膝などを衝て目くはしをする也、と或抄にいへるがごとし。

〔**拾史記**〕項羽伝「胸」。離騷「目成」。

思ふべき人々の打すてて云々

〔**細**〕三歳にて更衣にはなれ、六歳にて祖母に離れ給ふ也。はぐくむ人あまたあるやうなりしかど

〔**細**〕左衛門の乳母におくること、未摘花巻に見えたり。

かぎりあれば

〔**余**〕此詞は「所せき御身」などいへると同くて、やことなき人の、御身の自由ならで、心やすく出させ給ふことをまかせ給はぬをいへる也云々。

さらぬわかれは

〔**河**〕世中にさらぬわかれのなくもがな千代もといのる人の子のためいせ物語

げに世におもへば

〔**釈**〕世にといふ詞なき本は、おちたる也。さて、本は「げに思へば、世におしなべたらぬ人の」と有しを、乱れてうつしひがめたるか。例の転倒の語としても、猶少し穩ならず。

〔**玉**〕かくまでよにすぐれ給へる源氏君の御乳母となれることは、なみなみならぬ宿業ぞといふ也。

打しほたれけり

〔**評**〕尼君の歎きたるを、上に子どもの笑ひしを、ここにいたりて「打しほたれ」といへる、抑揚あひかなひて、いとめでたし。

源詞
日ころおこたりがたく物せらるるを、やすからずなげきわたりつる
平 愈

に、かく世をはなるるさまにものし給へば、いとあはれにくちをし
ザンネン

うなん。命ながくてなほくらゐたかくなども見なし給へ。さてこそ
ニ マダ 位 高

△**モ**
このしなのかみにも、さはりなく生れ給はめ。この世にすこしう
九 上 障 碍

らみのこるは、わろきわざとなんきくなど、涙ぐみてのたまふ。か
ロク

たほなるをだに、めのとなどやうの思ふべき人は、あさましうまほ
デモナイ主人ヲサヘノ意也 乳 母 ヒイキニスル人 マッスグ

にみなすものを、ましていとおもたたしう、なづさひつかうまつり
見 成 △コノ尼ハ 面 起 ナレナジミ

けん、身もいたはしく、かたじけなくおもほゆべかめれば、すずろ
タデアラウカラハ 勞 アリ ガ タ ク 不 覺

に涙がちなり。子どもはいと見ぐるしと思ひて、そむきぬる世のさ
惟光アサリニ河守ムスメナド也 ステニ尼ニナリテステタル世トイフ義也

りがたきやうに、みづからひそみ御らんぜられ給ふ、とつきじろひ
去 嘸 ツキアヒテ

△**+**
めくはす。君はいとあはれとおもほして、いはけなかりけるほどに、
メクバセラスル 幼 ウチ

△*****
思ふべき人々の、うちすてて物し給ひにけるなごり、はぐくむ人あ
ミマカリ ソダテル 数

またあるやうなりしかど、したしく思ひむつぶるすぢは、またなく
多 睦

△*****
なんおもほえし。人となりて後は、かぎりあれば、朝夕にしもえみ
長 成 限 得 見

奉らず、心のままにとぶらひまうづる事はなけれど、猶ひさしうた
参 出 ヤハリ 対

いめんせぬ時は、心ぼそくおぼゆるを、さらぬわかれはなくもが
面 △*****

などなんなど、こまやかにかたらひ給ひて、おしのごひ給へる御袖
△思ヲ 細 △ナミタヲ

のにほひも、いと所せきまでかをりみちたるに、げに世におもへば、
香 狭 薫 満 ナルホド

おしなべたらぬ人の御すぐせぞかし、と尼君をもどかしと見つる子
ツウレイナラヌ シアハセ

どもも、みな打しほたれけり。ずほうなど、またまたはじむべき事
余斎宮式に哭称塩垂と有 修 法 細 祈りをはじめらる

しそくめして

〔余紙燭也。紙束ともいふ。和名抄云「紙燭。雜題有紙燭詩」。紙燭、俗韻之曾致。〕

〔明物語などし給ふうちに、日もくれにければ也。〕

うつり香

〔新うつりがといふも、たき物のうつり香なるべし云々。〕

〔評さきに扇は御覧すべきを、惟光出来り案内して入るに、さわがれて止給ひし故に、今取出て見給ふ也。さて、初は尼君を訪給ふかた主なりしを、ここに至りて夕顔のかた主となり、尼君の方客となりたる法也。いとめでたし。〕

心あてに云々

〔玉源氏君を夕顔の花にたとへて、今夕露に色も光もそひていとめでたく見ゆる夕顔の花は、なみなみの人とは見えず、心あてに源氏君かと思ふなりぬ、と也。三四の句は、白露の、夕顔の花の光をそへたる也。露の光にはあらず云々。〕

〔釈末句は古写本によりぬ。花の顔を心あてに云々、といふ語路なれば也。〕

にくしとこそ思ひたれな

〔箋折節つきなき好色と思ふか、と也。〕

る事也

などおきての給はせて、出給ふとて◎これみつにしそくめして、あ

〔掟〕

〔△尼君ノ家ヲ〕

〔△ヲ〕

りつるあふぎ御覧ずれば、もてならしたるうつりが、いとしみふか

〔扇〕

〔持 馴〕

〔移 香〕

〔染 深〕

うなつかしうて、をかしうすさびかきたり。

〔湖おもしろくちらし書などにせしなり〕

心[＊]あてにそれかとぞみるしら露のひかりそへたる花の夕顔。そこ

オシアテ

ドコ

はかとなくかきまぎらはしたるも、あてはかにゆゑづきたれば、い

トモナウ

上ヒンニ

ヨシメキ

と思ひのほかにかしうおぼえ給ふ。惟光に、このにしなる家には

オモシロウ

此 西

なに人のすむぞ、とどひききたりや、との給へば、れいのうるさき

〔住〕

問 問

惟光心

好色ノ方ニハウルサキ

御心とは思へども、さはえ申さで、この五六日ここに侍れど、ばう

トイフ意也

サウハ

此 所

ざの事をおもひ給へあつかひ侍るほどに、となりのことはえきき侍

者

看 病

隣

らずなど、はしたなげに聞ゆれば、にくしとこそ思ひたれな。され

フツガフサウニ

＊源詞

やうめいのすけなりける人の

〔拾名くる心を思ふに、只名のみをあげて、まことの介のごとく国務をつかさどる事もなく、権官のごとく禄を得ることもなき故なるべし。〕

〔釈揚名の義、此説のごとくなるべし。「ゐなかにまかりて」とあれば、任国へ下りたるやうにも聞ゆれど、猶さにはあらず、異事にて田舎へはゆきしなるべし。又案に、なりけるとあるは過去の辞なれば、さきに揚名なりし人の、まことの介になりて国へ下りたるにもあらんか。考ふべし。諸説は別にいへり。〕

〔玉これより惟光が源氏君に申す語にて、「きかよふ」といふまでは、やどもりが惟光にかたりしさまにて、「と申す」は、やどもりがかやうにまうせるといふ也。〕

女なんわかく事このみて

〔釈「事このむ」は、ざれたる事を好む意にや。さて案に、上に「この宿もりなる男をよびて」とあるを、旧説に揚名介が家の宿もりと見られたれど、もしくは惟光が家の宿もりにはあらじかとぞ思ふ。さるは入てこのといふも、隣の家の人をいふやうに聞えぬうへに、ここに「事好みて」とあるも、おのがしうの事をいふ語とは聞えねば也。猶考ふべし。〕

たたうがみに

〔花たたう紙に歌かくこと、後撰十九卷の詞にあり。〕

どこの扇のたづぬべきゆゑありて見ゆるを、なほこのわたりの心し

イ ねまほしき

△本下ノヨシ

ヘン

案内

れらんものをめしてとへ、との給へば、入てこのやどもりなるをの

召 問

惟光

カノ

下

こをよびてとひきく。やうめいのすけなりける人の家になん侍りけ

男

問

介

る。男はゐなかにまかりて、女なんわかく事このみて、はらからな

田 舎

＊

細揚名介の妻也色めかしきなるべし 湖かの妻の兄弟也

ど宮づかへ人にてきかよふ、と申す。くはしき事はしも人のえしり

ホウコウニン

来 通

下

侍らぬにやあらんと聞ゆ。さらばその宮づかへ人なり。したりが

源心

デカシガ

ほに物なれていへるかな、とめざましかるべききはにやあらんと

ホ

イ いひつる

〔衍ナルベシ〕

興ノサメサウナ

分 際

おぼせど、さして聞えかかれる心の、にくからずすがたきぞ、

草子地

サンツケテイヒ

ステオカレヌ

れいの此かたにはおもからぬ御心なめりかし。御たたうがみに、い

好色ノ方也 重

＊

置

紙

たうあらぬさまにかきかへ給ひて、

我御手下シレヌヤウニ也

よりてこそ云々

〔釈〕近くよりてこそ、たしかに其人とも見るべけれ。たそかれ時のくら
きにほのぼの見つる夕顔を、よそめに定めてそれかとはいかに、との心
也。細流に、一本に初句「をりてこそ」とある本もありとしるされたり。
それも又あしからず。古写本、此末句を「夕かほの花」とせり。これは
いづれにてもあるべし。諸抄の論は、べちにいふべし。「たそかれ」は、
誰ぞかれはとたどらるるほどの夕ぐれ時をいふ。
まだみぬ御さまなりけれど
〔新〕いまだ見奉らねども、やがて源としるかりければ、えただに過かね
て也。

あまへていかに聞えんなど云々

〔釈〕この所、少しまぎらはし。案に、御いらへも給はでほど経たるがは
したなきに、又かくわざとがましく御歌を返し給はば、女どものあまへ
あなづりて、「いかに聞えん」など隨身に相談するやうにいひさわがん
かと、隨身は心外におもひながら行たり、といふ意にやあらん。さて、
めれどのどは、ばの誤か、もしくはなどの下にこそこの係辞ありてめれど
結びたるをどと受たるを、写しおとせるか。いづれにしても此俣にては
いかが也。旧説に「御返事にあまへて、又歌を参らせんと言しろふ也」
といひ、又「参りぬ」と有を「いそぎかへる也」といへるなどは、共に
ひがこと也。

蛩よりけに

〔余〕古今恋二友則〔夕〕さればほたるよりけにもゆれどもひかりみねばや人
のつれなき

〔新〕「けに」は、万葉に「勝」「異」などの字を書り。この文には、蛩よ
り少しきかたに打かへしてとる也。

御心ざしの所には云々

〔拾〕六条御息所はいつ比いかにして思ひそめ給へるよし、右に見えず。
かやうに打まじへたる文章也。「御心ざしの所」といふにて、浅からず
思ひ給へる事見えたり。

〔玉〕拾遺に、此詞にて「あさからず思ひ給へること見えたり」といへる
はいかが。これは、かの御息所の御方へと心ざしておはしますに、その
道の間にて大貳の乳母、又夕がほなどの所の事をいへる故に「御心ざし
の所」とはいへるにこそあれ。

〔釈〕拾遺の説、小櫛に弁へられたるがごとし。但し、文章に心をどめら
れたるはよし。上にもいへることく、こは誰ともなく書もてゆく中に、
御息所の事と後にするべくほのめかしたる法なるが、ここに至りて貴き
女とはしるるさまにかれたり。心を付べし。

うちとけぬ御ありさまの

〔釈〕御やす所の本性をはじめて顕はしたり。此心、終まで貫きて、つゆ
もかはることなし。したとめおくべし。諸抄の説はひがこと也。

あさけの御すがた

〔孟〕わがせこが旦開容よく見ずてけふのあひだをこひくらすかも
〔拾〕万葉の歌、引歌のごとし。第十二の最初に有。又同巻に、〔朝〕がらす
はやくなきそ我せこがあさけのすがたみればかなしも。又「朝戸出の
すがた」「夜戸出の姿」とも有。

ただはかなき一ふしに

〔細〕かの夕顔の歌を参らせしより御目とまるとなり。
これみつひろありて

〔細〕惟光は毎日さふらふべきを、病者ゆゑの懈怠なり。

＊源
よりてこそそれかともみめたそかれにほのぼの見つる夕がほ
イ花の夕がほ
黄 昏

花。ありつる御ずぬじんしてつかはす。＊未見
＊隨身心

いとしるく思ひあてられ給へる御そばめを見すぐさで、さしおどろ
湖かたはらめ也源氏のむき顔をいふ也
側 目 △夕顔ノ宿ヨリ

かしけるを、御いらへ給はでほど過ければ、なまはしたなきに、か
イ御いらへもなく
いらへ給はで
間 経 フツガフナル △マタ

くわざとめかしければ、＊あまへていかに聞えんなどいひしろふべか
ガマシ ホタエ ドノヤウニイハウゾ △タガヒアヒサワダ

めれど、＊めざましと思ひてずぬじんは参りぬ。御さきのまつほのか
ばカ シンダワイナ △夕顔ノ宿△ 先 駆 松 明

にて、いとしのびて出給ふ。はじとみはおろしてけり。ひまびまよ
△尼君ノ家△ △夕顔ノヤド△ 下 スキマスキマ

り見ゆる火のひかり、＊蛩よりけにほのかにあはれなり◎御心ざし
異

の所には、木だち前栽など、なべてのところに似ず、いとのだかに
一トホリノ ヒロヤカニ

心にくくすみなし給へり。＊うちとけぬ御ありさまなどの、けしきこ
オクユカシウ 住 △女ノ 異

となるに、ありつるかきねおもほし出らるべくもあらずかし。つと
△夕顔△ 翌

めてすこしねすごし給ひて、日さしいづるほどに出給ふ。＊朝けの
朝 少 寝 過

御すがたは、げに人のめで聞えんも、ことわりなる御さまなりけり
モ ヲ ト モ

◎けふもこのしとみの前わたりし給ふ。きしかたもすぎ給ひけんわ
カノ 部 已 然 トホリ

たりなれど、＊ただはかなき一ふしに御心とどまりて、いかなる人の
チヨットシタ 夕顔ノ歌ノコト也

すみかならんとは、ゆききに御めとまり給ひけり『これみつ日ごろ
住 所 往 来 惟 光

ありてまぬれり。わづらひ侍る人、なほよわげに侍れば、とかく見
尼君 ヤハリ

給へあつかひてなん、など聞えて、ちかくまぬりよりて聞ゆ。おほ
△エ参ラザリシ△ 惟光詞

せられし後なん、となりの事しりて侍るものよびて、とはせ侍りし
隣

かど、はかばかしくもまうし侍らず。いとしのびて、さつきのこと
シカシカトモ 五 月

げにわかき女どもの

〔玉〕「げに」は、「かしづくひと侍るめり」といふへかかれり。上に「さ月のころほひより物し給ふ人なん有」といへるをうけて、「げに」とはいへる也云々。

しびらだつ物かごとはかり

〔新〕こは褶也。褶は令義解に「枚帯也」といへば、裳の腰に又うはもとてひらめなる絹をまどふを、こは裳を略してその枚帯のみ引かけて在也。故に「託言ばかり引かけて」とはいふ也。催馬樂に、「上ものすそぬれ下ものすそぬれ」などいへり。

〔細〕裳など引かけたるは、人をうやまふさまにて、同僚計あるとは見えぬさま也云々。

きのふ夕日のなごりなく

〔細〕西むきなる所と見えたり。南むきの西かげたるべし。

〔釈〕案に、上に「この西なる家」とあれば、惟光が家の西隣と聞えたり。されば、女の奥ふかく居たるを、隣家の西より夕日のさし入たる光にて、東隣よりあきらかに見たるさまなるべし。

しるく見え侍る

〔釈〕これは「見え侍りし」とありしを、写し誤れるなるべし。尤しかいではえあらぬ所なり。

おぼえこそおもかるべき

〔釈〕「こそ」の辞、一本になきは脱たる也。此こそは、なれにて結びたるを、どうけてつづけたる也。

ほひよりものし給ふ人なんあるべけれど、その人とは、さらに家の

うちの人にだにしらせず、となん申す。時々中垣のかいまみし侍る

に、げにわかき女どものすきかげみえ侍り。しびらだつ物かごとは

かりひきかけて、かしづく人侍るなめり。きのふ夕日のなごりなく

さし入て侍しに、ふみかくとてゐて侍し人の、かほこそいとよく侍

しか。物思へるけはひして、ある人々もしのびて打なくさまなどな

ん、しるく見え侍る。ときこゆ。君うちゑみ給ひて、しらばやとお

もほしたり。おぼえこそおもかるべき御身のほどなれど、御よはひ

のほど、人のなびきめで聞えたるさまなど思ふには、すき給はざら

んも、なさけなくさうさうしかるべしかし。人のうけひかぬほどに

てだに、なほさりぬべきあたりのことは、このましうおぼゆるもの

を、と思ひをり。もし見給へうることもや侍る、とはかなきついで

つくり出て、せうそこなどつかはしたりき。かきなれたる手して、

くちとく返事などし侍りき。いとくちをしうはあらぬわか人どもな

ん侍るめる、と聞ゆれば、猶いひよれ。たづねしらではさうさうし

かりなん、とのたまふ。かのしもがしもと、人の思ひおとしします

ひなれど、その中にも、思ひのほかにくちをしからぬを見つけたら

んは、とめづらしうおもほすなりけり』さてかのうつせみのあさま

しうつれなきを、この世の人にはたがひておぼすに、おいらかなら

ましかば。心ぐるしきあやまちにてもやみぬべきを、いとねたく、

まけてやみなんを

〔玉〕これは「まけてやみなん」と有けんを、やを一つおとし、とををに誤れるなるべし。本のままにては語とどのはず。

〔釈〕負てやむとは、空蟬のつれなきと、源氏君の思ひ給ふとの心くらべに負てなり。「心」の上に御字ありしなるべし。

かやうのなみなみまでは

〔評〕ここにいたりて、品定の照応のすぢをたしかにあらはされたり。心をつくべし。

いふかしくおもほしなる

〔湖〕中の品下の品にもゆかしくおぼしめす所いできて、弥好色の心くまなくなりしと也。

くまなく

〔釈〕いたらぬ所もなく心をかけてもとめ給ふを云。

伊与介のほりぬ

〔新〕まだ任の中に斗帳などの事にて上り参りしなるべし。此下に、空蟬をゐて下ることあり。

ゆげたはいくつと

〔湖〕伊与の湯桁の事、空蟬巻に出たり。

〔玉〕これはただ伊与国の事どもをとほんとおぼすよし也。必湯げたの事にはあらず。さて、まばゆくおぼすは、空蟬の事ある故なり云々。

物まめやかなるおとなを

〔玉〕実体なる年ねびたる人を、といふこと也云々。わかく風流なる人などならばこそまばゆくも思ふべきことなれ、伊与介がやうなる翁をかくまばゆくはづかしく思ふはをこがましきこと、とみづからおぼす也云々。

けにこれぞなのめならぬかたはなるべかりけると云々

〔釈〕此段、諸注説得られたりとおおぼえず。今案ふに、「なのめならぬ」といふ語は、一転して「ナミ大体デハナク、ヒトトホリデハナクなどいふ意に用ひたるが多ければ、細流に「なべてならぬ也」とある意に近かるべし。さて、馬頭がいさめは、花鳥のごとく、帚木に「なにがしがいやしきいさめにて、すきたわめらん女には心おかせ給へ。あやまちして、みんなのためかたくななる名をも、たてつべき物なり、といましむ」とある段の事也。「これぞ」とは伊与介をさしたるにて、妻の密事をもしらであるはなべてならぬ片羽なるべかりけり、と源氏君のおもほすにつけて、かの馬頭が「あやまちして、見ん人のため云々」といひしをおぼし出て、伊与介をいとほしとおぼすにつけては、空蟬のつれなき心はねたけれど、此伊与介がためにはあはれる志也とおぼしなさる、といふ意也。

〔拾〕「なのめならぬ」は、大形ならぬ意也。「なべてならぬ」とは、すこしかはれり。

〔釈〕この拾遺の説よろしかるべし。

ましてにげなきことに思ひて

〔釈〕「にげなき」は、源氏君の御分際と受領の妻の分際と、似合しからぬ意也。人の妻たる故の事にはあらず。或抄、こころより空蟬の心と云り。今更にみぐるしかるべしと

〔釈〕「見ぐるし」は、一たびかけはなれてつれなくもてなしたるものを、今更に従はんが見ぐるしき也。

*まけてやみなんを心にかからぬをりなし◎かやうのなみなみまでは＊地

御ノ字脱タルカ

並々々

おもほしかからざりつるを、ありし雨夜のしなさだめの後、いふか＊

繫

不審

しくおもほしなるしなじなのあるに、いとどくまなくなりぬる御こ＊

ニ

中下ノ品々也

ヒトシホアカルク

片

方

ころなめりかし◎うらもなくまち聞えがほなるかたつかたの人を、玉此をば

オクソコモ

待

軒端扶也

あはれとおぼさぬにしもあらねど、つれなくてききぬたらんことの、△空セミノ

もの誤なるべし

△空セミノ

居

はづかしければ、まづこなたの心見はててとおぼすほどに、伊与の＊

先 空セミ

△後ノコトヨ

ウチ

すけのぼりぬ。まづいそぎまぬれり。ふなみちのしわざとて、すこ＊

上洛

△源ノ方ノ

船 路

少

しくろみやつれたるたびすがた、いとふつつかに心づきなし。され

黒

ヤセ 旅 姿

イフトヤカニブフウナリ

ど人もいやしからぬすぢに、かたちなどねびたれどきよげにて、た＊

種 姓

容 貌

年タケ

清

一

だならずけしきよしづきてなどぞありける。国の物がたりなど申す

トホリナラズ

モツタイラシク

伊与

に、ゆげたはいくつととはまほしくおぼせど、あいなくまばゆくて、＊

湯 桁

間

ナニトナウ

ハツカシク

ヒヨンナゲデ

御こころのうちにおぼし出ることささまざまなり。ものまめやかな＊

空セミ軒端扶ナドノコト也

＊実

るおとなをかく思ふも、げにをこがましうしろめたきわざなりや。

大 人

△ツカシク

ナルホド アホウラシウキツカハシイ

げにこれぞなのめならぬかたはなるべかりける、と馬のかみのいさ＊

ナルホド

大 テイナラヌ

イなめる

めおぼしいでいとほしきに、つれなき心はねたけれど、人のため

△伊与介ノ

△ツケテ 空セミノ

ザン

ネン

伊与

はあはれとおぼしなさる。むすめをばさるべき人にあづけて、北の

△ニ

△ナリ

軒 端 扶

然

空セ

方をばゐてくだりぬべし、ときき給ふに、ひとかたならず心あわた

ミ

率 △国ノ

空ト軒ト一方ヲヌ意也

忽 忙

たしくて、今一たびはえあるまじきことにや、とこ君をかたらひ給

湖空蟬に連絡やこはなるまじき也

へど、人のこころをあはせたらんことにてだに、かろろかにえしも

合

サヘ

カロガロシク

まぎれ給ふまじきを、ましてにげなきことにおもひて、いまさらに＊

初レ入ルコト也

似 氣

なげの筆つかひに

拾ないがしろは、輕慢の意あればかなはず。物をなげやる心なれば、なほざりの心なるべし。六帖（あはれをばなげのことばといひしながらおもはぬ人にかくる物かは。古今春下そせい法師いざけふは春の山べにまじりなんくれなばなげの花のかけかは。兼盛集こののはをなげなる物と思ひなばなにかは人のつらくしもあらん。曾丹集あればありとなげらのよそに見し人の秋風ふけばそれを恋しき。）

余朗云、「なげ」は「なきけ」にて、輕慢の意にもなり、なほざりの意にもなる也。

ぬしつよくなるとも

釈此語、諸抄に説なし。いかが。案に、「ぬし」は夫の事にて、「ぬしつよくなる」は、夫のしかと定まるといふ意なるべし。右京大夫集に、「ぬしつよくさだまるべしなど聞しころ云々」と有。さて、たとひ夫ありとも、かはらず源氏君に打とけ奉るべく見えしさまなるをたのみて、といふ意也。

とかくき給へど

釈上に「さるべき人にあづけて」といへる事也。旧注に「少將に嫁するさた也」とあるは、ここにては過たるべし。

秋にもなりぬ

湖いとど物思ひのそふ時なり。心づくしに

湖藤壺の御事、空蟬の事、かたがた心づくし也。

余木の間よりもくる月の影みれば心づくしの秋はきにけり 古今秋上 よみ人しらす

六条わたりにも

釈なほ誰ともあらぬ筆つかひに心をつくべし。御息所と注するは、やむ事を得ざるのみなり。

とけがたかりし

釈上に「打とけぬ御ありさまなどの、けしきことなるに」とありし事也。統て心得べし。

おもむけ

釈面向の意にて、背向たる人をこしらへて、こなたへ向しめ従ふる意也。されどよそなりし御心まどひのやうに

玉上に「いとほしかし」といへるも、冊子地よりいへる也。さてそれをうけて、いとほしき事なれども、源氏君はさしもおぼさぬはいかなることにか、と也云々。

あながちなる事はなきも

釈まへつかた、我物とせずよそなりし時、御息所に御心をまどはし給ひしやうに、あながちにおぼしめさぬはいかなる事にかあらんと見えたり、と草子地より評していへる也。

女はいと物を余りなるまで云々

評いまだ誰ともあらはさねども、やうやうにしふねき心ざまを説もて出られたる、いとあやしくめづらし。

御よはひのほどもにけなく

釈源氏君十七、御息所二十四也。さてこの御息所の紀年に論あり。別にいふべし。

ねふたげなるけしきに

玉けしきにといへるに心をつくべし。よもすがら女の御心のとけざりし故に、とけてもね給はぬけしきを中将などにもしらさんために、ことされにねふたげなるけしきをし給ふ也。いたくそそのかされ給ひても、ねふたきよしにもてなし給ふ也。「名残ををしみて」といへる注は、かなはず。さて中将がふるまひは、此源氏君の御けしきをいとほしく思ひ聞えて也。

みぐるしかるべし、と思ひはなれたり。さすがにたえておもほしわ

すれなんことも、いといふかひなく、憂うかるべきことに思ひて、然さ

るべきをりをりの御いらへなど、なつかしくきこえつつ、客なげのふ

でづかひにつけたることのは、あやしうらうたげに、めとまるべき

ふしくはへなどして、あはれとはおぼしぬべき人のけはひなれば、

つれなくねたき物の、わすれがたきにおぼす。いま一かたは、ぬし

つよくなるとも、イかはらず打とけぬべく見えしさまなるをたのみて、

とかくきき給へど、御心もうごかずぞありける＊秋にもなりぬ。人

やりならず心づくしに、おもほしみだること共ありて、おほい殿

にはたえまおきつつ、うらめしうのみ思ひ聞え給へり＊六条わたり

にも、とけがたかりし御けしきを、＊おもむけきこえ給ひて後、ひき

かへしなのめならむは、いとほしかし。＊されどよそなりし御心まど

ひのやうに、＊あながちなることはなきも、いかなることにかと見え

たり。＊女はいと物をあまりなるまでおぼしめたる御ころざまに

て、＊よはひのほどもにげなく、人のもりきかんに、いとどかくつら

き御よがれのねざめねざめ、おぼししをること、いとさまざまな

り。霧のいとふかきあした、いたくそそのかされ給ひて、＊ねふたげ

なるけしきに、うちなげきつつ出給ふを、細御息所の官女也中将のおもと、格みかうし

ひとまあげて、見奉りおくり給へとおぼしく、御几帳ひきやりたれ

ば、御ぐしもたげて見出し給へり。前裁の色々みだれたるを、過が

しをん色のをりにあひたる
〔河〕普通しをん色の裳と心得るは非也。紫苑色のきぬに薄物の裳也。
〔細〕「をりにあひたる」と句を切てよむべし。河海説可然。表すはう、裏萌黄也。
〔釈〕「をりにあひたる」とは、をりふし秋にて、紫苑のをりにあへるをいふ。前裁にも咲たるべし。

打とけたらぬもてなし
〔釈〕主の御前なれば、殊に打とけぬ也。
めざましくもと

〔釈〕打とけずしてきとしたるありさまを、めざましと見給ふ也。「髪のがりば」は、髪の下りたる端のみだれずしてある意にていへるなるべし。さく花に云々

〔釈〕「さく花」は主の女君、「朝がほ」は中将にたとへたり。さて、「さく花にうつるといふ名はつつましけれど」といひて、「女君に外へ心の移るといふことはつつみかくせども」とそへていへり。さて、「をらでは打過がたきけさの朝顔」といひて、朝顔に中将の今朝の顔のうつくしきをそへたる也。さて、「いかががすへき」は、歌よりつづけて、朝顔をいかがすべきといふ意也。

あさぎりの云々

〔釈〕この朝霧のはるる間も待ず出給ふけしきにては、女君に心をとめ給はぬと見奉る、といへるにて、そはなさけなしといふ意をふくめたり。「花」は、上の歌によりて女君をたとへたること論なし。
おほやけことにぞ
〔釈〕私のけさうをばおきて主君の御事にいひなす故に、「おほやけ事」とはいへるなり。

さふらひわらは

〔明〕源氏のめしつれられたる童也。花鳥に女と云、非也云々。
〔釈〕男といふ説よし。小櫛も男をとられたり。女に「さふらひ」といはんもいかが。指貫も男の物也。「ことさらめきたる」とは、殊更につくりたてたるやうなる姿といふ意也。
朝がほをりて参るほど

〔釈〕童の朝顔を折て参るは、「をらで過うき」とある歌を聞ひがめたるさまにとりなしたる余光の文也。

大かたに打見奉る人だに云々

〔釈〕ここよりは、中将に戯れ給ひし事のちなみに、源氏君のめでたきを世の人の感じたることを語る例の文なり。

花のかげには猶やすらはまほしきにや

〔河〕古今序「たきおへる山がつの、花のかげにやすめるがごとし」。
〔釈〕此詞を打かへして猶といへる、いとめでたし。たとへたる意は明らかし。

てにやすらひ給へるさま、げにたぐひなし。らうのかたへおはする
ナルホド 廊 方

に、中将の君も御ともにまゐる。
しをんいろのをりにあひたるうす
〔紫苑 中将也 色 時 羅〕

ものもの、あざやかにひきゆひたるこしつき、たをやかになまめき
〔紫 裳 シヤツキリト 引 結 腰 イさわ シンナリト〕

たり。みかへり給ひて、すみまのこうらんに、しばしひきすゑ給
〔源氏 角 間 引 居〕

へり。うちとけたらぬもてなし、かみのさがりば、めざましくもと
〔髪 下 端 △アル〕

見給ふ。
〔カナ〕

さく花にうつるてふ名はつつめどもをらですぎうきけさの朝顔。

いかがすべき、とて手をとらへ給へれば、いとなれてとく、
〔中将 △中将〕 疾 物ナレ早ク歌ヲヨム也

朝霧のはれまもまたぬけしきにて花に心をとめぬとぞみる。とお
〔上二霧のいとふかきあしたアル也〕

ほやけごとにぞ聞えなす。をかしげなるさふらひわらはの、すがた
〔イヒナス フウリウ 侍 童 姿〕

このましようことさらめきたる、さしぬきのすそ露けげに、花のなか
〔好 △方 指 貫 裾〕

にまじりて、あさがほ折てまゐるほどなど、ゑにかかまほしげなり。
〔絵 糸〕

おほかたにうち見奉る人だに、こころしめ奉らぬはなし。もののな
〔タイテイニ△源乙〕 染 サヘ

さけしらぬ山がつも、花のかげにはなほやすらはまほしきにや。こ
〔ヤハリ 休 息 憊〕

の御光りをみ奉るあたりは、ほどほどにつけて、わがかなしと思ふ
〔△源氏〕 分 々 憊

むすめを、つかうまつらせばやとねがひ、もしはくちをしからずと
〔若 イヒガヒナクハナイ〕

思ふ、いもうとなどもたる人は、いやしきにても、猶この御あたり
〔女 弟 持 有 △奉公〕

にさふらはせん、と思ひよらぬはなかりけり。ましてさりぬべきつ
〔侍 況 シカルベキ〕

いで御ことのはも、なつかしき御けしきを見奉る人の、すこし物
〔△承リ〕 △毛 少

の心をおもひしるは、いかがはおろかに思ひ聞えん。明暮うちとけ
〔ソリヤクニ フタンニ〕

あけくれ打とけてしも

〔玉〕これは、この中将などが然思ふべきものと、冊子地よりいふなり。
〔釈〕案に、「ましてさりぬべきついで」といふより、中将がうへにあてて、この文を結びたるなり。

惟光があつかりの

〔玉〕夕顔の宿の事は、惟光に仰せつけてまかせおき給へる故に、かくいふ也。俗言に「惟光がうけとりの」といふに同じ。
ながやに

〔孟〕橋の寺の中屋にわがゐねしうなるはなりはわが恋まさる
余万葉には、末句「髪上つらんか」とあり云々。
〔拾〕万葉第十六に「長屋」とかけり。「中屋」は誤れり。
ほのかなれど

〔釈〕ほのかに見たるなれどといふ意なり。
いそぎきて

〔釈〕長屋より来て也。
右近の君こそまづ物見給へ

〔新〕今昔物語に、安部晴明が父に物いふに「ちこそ」といひかけたなど、むかし人をあがめていふ語にて、宇治拾遺に地藏ぼさちを「地藏こそ」、大和物語に「西こそ」と西隣の人をいへり。すべてこそてふ辞は、物の有が中よりとりわきて「是こそ」などいふなれば、おのづから人をたふとむ語ともせるにや。

〔湖〕こそとは、人をよびかくるとていふ詞なり。下の詞にも「北殿こそ」とてあり。

〔釈〕右近は夕顔の乳母のむすめなり。まづは一番にといふに近く、他の女房よりも右近にまづ来て物を見よといふ意也。さるは、頭中将の事には右近ぞ第一にあづかるべければ也。心を付べし。此物語は、未をよみたる後に立かへりて考れば、かかる事其の用意まで知らるる事也。心得べし。

てかくものから

〔釈〕手をふりて制するさまの、物を搔がごとき故に「手かく」とはいへる也。うちはしたつ物を

〔湖師〕かりに打わたしたる廊下也。
いそぎくるものは

急き物見んとてくる物は、といふ意にて、右近の外の女房どものさまなり。諸抄に右近と見られたるはわろし。小櫛の説もここにはかなはず。
※注釈書の印がないが、おそらく〔釈〕であらう。

かつらきの神こそ

〔新〕此橋は嶋岨にあしくしたりといふを、おもしろく書たり。かつらきのくめちの石橋は一夜の間にかけんと神の誓ひ給ひしを、ほどなく夜明てわたしはてずてふ諺の有を、かの中務は歌にもよみたり。此事、金峯山の縁起にありといへど、縁起は皆偽言なれば、引は中々に愚なるわざ也。只諺として有べし。

〔釈〕打橋よりおちたるまけじだましひをいへるさまに戯れて、女どもの物見たるさまをいどよく摸しかかれたり。

なにかしくれがしと

〔釈〕名など書べき所なるをさいはぬは、此物語の例也。

頭中将の

〔釈〕ここに初て頭中将といへり。心をつくべし。

小舎人童

〔河〕小舎人は、童の物名也。

たしかに其車をぞ見まし

〔細〕それとたしかに見どくべき物を、と也。

〔玉〕「ほかの散なん後ぞさかまし」といへると同じ格の詞也。おほくの本にぞもじなきは、落せる也。拾遺に疑ひて、「まし」の下に「を」の字落たるか」といへるは、よき心づき也。されど「見ましを」ととても、猶よろしからず。一本に「ぞ」もじあるにて、いと明らか也。

もしかのあはれに忘れざりし人にや

〔細〕雨夜の物語の時、頭中将のわすがたく申されし女かと、源の推し給ふ也。

わたくしのけさうも

〔湖〕惟光もわかき人のあるにいひよりて、それにかこつけて案内をよく見たるよしを申出る也。

〔新〕此「ながらは、次の」はかられまかりありく」といふへかかる辞也云々。

〔釈〕源氏の御懸想のみならず、惟光おのがけさうをもして、といへる意也。「わたくしの」といへるは、源氏君に奉公する外なればといふ意にていへる也。

てもおはせぬを、心もとなき事に思ふべかめり〔まことや、かの

惟光があづかりのかいまみは、いとよくあない見とりてまうす。そ

の人とはさらにえ思ひより侍らず。人にいみじくかくれしのぶるけ

しきになん見え侍るを、つれづれなるままに、みなみのはじとみあ

るながやにわたりきつつ、車の音すれば、わかきもの共のぞきなど

すべかめるに、このしうとおぼしきも、はひわたる時侍るべかめり。

かたちなんほのかなれど、いとらうたげに侍る。ひと曰さきおひて

わたる車の侍りしを、のぞきて、わらはべのいそぎきて、右近の君

こそまづ物見給へ。中将殿こそこれよりわたり給ひぬれといへば、

又よろしきおとな出きて、あなかまと、てかく物から、いかでさは

しるぞ。いでみん、とてはひわたる。うちはしたつ物をみちにてな

んかよひ侍る。いそぎくるものは、きぬのすそをものにひきかけて、

よろぼひたふれて、はしよりもおちぬべければ、いでこのかつらき

の神こそ、さかしうしおきたれ、とむつがりて、物のぞきの心もさ

めぬめり。君は御なほしすがたにて、御隨身どももありし、なにが

しくれがしとかぞへしは、頭中将のずゐじんそのこどねりわらはを

なん、しるしにいひ侍りし、など聞ゆれば、たしかにその車をぞ見

まし、との給ひて、もしかのあはれにわすれざりし人にやとおもほ

しるも、いとしらまほしげなる御けしきを見て、わたくしのけさ

うもいとよくしおきて、あないものこる所なく見給へおきながら、

ただ我どちとしらせて

〔孟〕「わがどち」は、われどし也。「わかきおも」は、夕顔也。是は女房どものわがどうれいの様に人にしらせて物などいふなり。それをこなたにはよくしりたれど、わざとしらぬよしに空おぼれしてまかりありくと、惟光がかたり申すなり。

〔釈〕「はかられまかりありく」は、謀られたるさまにして行通ふといふ意也。

ことあやまちもしつべきも

〔湖〕童などの何ごころなく夕顔に主あへしらひの詞をつかひさうなるを、はたのおもとながいがいひまぎらはして、みなわが同輩にて又外に主はなきやうにします也。

〔釈〕此説よろし。但し、「はたのおもとなが」といへるは、いかがあらん。これは惟光がものいひよりたる女などなるべし。

これこそかの人のさだめあなづりし云々

〔釈〕品定をとり出られたる脈也。「かの人」とは、馬頭なども。

その中に思ひの外に云々

〔湖〕師 帚木に、「さびしくあばれたらんむぐらのかどに、思ひの外にらうたげならん人の、とぢられるたらんこそ、かぎりなくめづらしくはおぼえぬ」といひしをおぼしあはする也。

たばかりまどひありきつつ

〔釈〕源氏君の夕顔にあひ給はん事を謀りていたつきありく意也。

このほどの事くだしければ

〔評〕前後の事のさまを思ふに、源氏君を此宿におはしそめさせんやうをつぶさにかかはんは、極めてむつかしき事なるうへに、いたくわづらはしかるべければ、此詞にこめて約め省きたる筆づかひ、さらにいどめでたし。「例の」といへるにて、前後に此法ある事を示したる也。心をつくべし。余滴に、「六条御息所・藤壺など、すべて通ひそめ給へることをみなもらしてしるさざれば、ここにも『例の』とは書たる也」といへり。さること也。さて、「女をさして」といふより下は、かよひ給ふ人を源氏君としらせず、女のうへをも誰とも問給はずして、互に疑ひ給へるを始として、やうやうに変化の段におひよせいたる端をおこされたり。よくよく心得おくべし。

おりたち

〔釈〕車にめすべきを、下立てありき給ふ也。辞の「おりたち」と見たる説はわるし。下に「わが馬をば奉りて」とあるを思ふべし。

けさう人の

〔玉〕人にけさうする者は、いかにも我身を物々しく見することなるに、かく歩行にてもいふなきさまを見られんはからきこと、とたはふれて申す也。

夕がほのしるべせし隨身

〔玉補〕前の夕顔の歌の所とあはせ見るに、いたくしらせじとし給ふこのあたりのさまにては、此隨身をめしつれ給ふ事、いといふかし。此隨身を見れば、忽源氏君としらるべき事なり。

〔釈〕此説はことわり也。さまさまに助けて考へみれども、解べきよしなし。作者千慮の一失とやいふべき。

あかつきの道

〔余〕清正集へみじか夜の残りすくなくふけゆけばかねてものうき暁の道〔釈〕これは類例也。

＊
ただ我どちとしらせて、ものなどいふわかきおもとの侍るを、空お

ぼれてなんはかられまかりありく。いとよくかくしたりと思ひて、

ちひさき子どもなどの侍るが、ことあやまちしつべきも、いひまぎ

らはして、また人なきさまを、しひてつくり侍る、などかたりてわ

らふ。尼君のとぶらひにものせんついでに、かいまみせさせよとの

たまひけり。かりにても、やどれるすまひのほどをおもふに、これ

こそかの人のさだめあなづりししものしなならめ。そのなかにおも

ひのほかになをかききこともあらば、などおもほすなりけり。惟光い

ささかのことも、御心にたがはじと思ふに、おのれもくまなきすき

心にて、いみじくたばかりまどひありきつつ、しひておはしまさせ

＊
そめてけり。このほどの事くだしければ、れいのもらしつ◎女

をさしてその人とたづねいで給はねば、われも名のりをし給はで、

いとわりなうやつれ給ひつつ、例ならずおりたちありき給ふ。おろ

かにはおぼされぬなるべしとみれば、わが馬をば奉りて、御ともに

はしりありく。けさう人のいと物げなきあしもとを、見つけられて

侍らん時、からくもあるべきかななどわぶれど、人にしらせ給はぬ

＊
ままに、かの夕がほのしるべせしずゐじんばかり、さてはかほむげ

にせるまじきわらはひとりばかりぞゐておはしける。もし思ひよる

けしきもやとて、となりに中やどりをだにし給はば、女もいとあや

◎
しう心えぬこちのみして、御つかひに人をそへ、あかつきの道を

そこはかとなくまどはして

〔**釈**〕つきしたひて何ふ夕顔がたの人をまどはしてしらせ給はぬ也。

かかるすちはまめ人の

〔**新**〕恋には実人の乱るる事すらあるを、源氏はいと若うおはすれど、よくしづめおはせしに、と也。

けさのほどひるまのへだても

〔**新**〕けさかへりて、夕べはおはすべきそのひるの間のほどだに、おぼつかなくおぼす也。

思ひさまし給ふに

〔**新**〕心にしひて思ひさましてころみ給ふことをまづいふ也。

あさましくやはらかに

〔**玉**〕「あさましく」とは、やはらかにおほごきたることの甚しきを入れる詞也。やはらかにおほごきたるをさしていふにはあらず。世をまだしらぬにもあらず

〔**釈**〕「世」は、男女の道をさしていへり。ひたぶるに若びたる物から、男せぬ女とも見えぬよし也。

やんことなきにはあるまじ

〔**釈**〕「まじ」の下にきをなどの辞脱たるなるべし。少しいかがに聞ゆ。

返々おぼす

〔**湖**〕前にも「さまで心のとまるべきさまにもあらず」とある故、「かへすがへす」といふ也。

さまをかへかほをもほの見せ給はず

〔**湖**〕顔をつつみておはせしにや。

〔**巴抄**〕昔は覆面して人にあひたる也。

〔**玉**〕かくまでわりなく忍びかへし給ふことは、いやしき小家に通ひ給ふ事をふかくつつみ給へば也。

むかし有けん物のへんぐゑめきて

〔**細**〕三輪の明神の本縁にてよく叶へり。

〔**釈**〕河海を初として、諸抄みな三輪の故事を引給へり。准拠をいばさもあるべき事なれど、只さやうの事をひろくさしていへりとのみ見てあるべし。さてこは、「物の変化」とつづけてよむべし。「物」とは、すべて目に見えぬおに神の類をさしていふ語にて、万葉集の借字にはやがて鬼字をモノと訓たり。物怪・化物などいふ「物」も、同じく大物主といふ神の御名も、さる物の主たる意と聞ゆ。もうこしにも史記などに物字を変化の事にいへる所あり。

〔**評**〕ここにはじめて変化といふ事を説出られたり。此脈、下の何がしの院の変化の段まで引とほりて、玉を貫たる緒のごときこちす。いたづらに見過すべからず。かれ伏線のあらはれたる所々に、変化第幾段の脈と注して示しつ。さて又、顔だに知れぬ人をかよはせてあひ逢んことはいとあるまじき事がなるを、いとよく書まぎらはして、さもありげにするされたる作りぬしのいたつきを思ふべし。これ皆、事をあやしくして、後の変化をあらはんさんための結構なりとするべし。

たればかりにかはあらん

〔**湖**〕誰ほどの位の人ならん、と也。

たいふ

〔**釈**〕惟光、時に五位なるべし。

うたがひながら

〔**釈**〕此「ながら」の詞は、下の「いかなる事なり」といふへ係る意なるを、其間に惟光がありさまを挟みていへる、例の法也。甲乙の点のごとし。やうたがひたる

〔**釈**〕よのつねのけさうとは事がらの違ひたるにつけて、物思ひするをいふ。

うかがはせ、御ありか見せんとたづぬれど、そこはかとなくまどは

道也

在所

△ウツガフ人芝
ドコトイフコトナシニ

しつつ、さすがにあはれに、見ではえあるまじく、この人の御心に

ナガラ

アハズシテハキラレヌヤウニ

夕顔ガ△源ノ

かかりたれば、びんなくかるがるしきことも、おもほしかへしわ

フツガフニ

ツラ

びつつ、いとしばしばおはします。かかるすちは、まめ人のみだる

ガリナガラ

タビタビ△夕顔ノ宿△

好色ノスチ也

実

△心ノ

るをりもあるを、いとめやすくしづめ給ひて、人のとがめ聞ゆべき

△源△

咎

ふるまひは、し給はざりつるを、あやしきまで、けさのほどひるま

行

△コレマデ△

フシギナ

⑤

今朝

アヒタ 昼 間

のへだてもおぼつかなくなど、思ひわづらはれ給へば、かつはいと

マチ ドホニ

②

ヒトツニハ

物ぐるほしく、さまで心とどむべき、ことのさまにもあらず、とい

狂

ソレホドマデ

留

事

様

みじく思ひさまし給ふに、人のけはひいとあさましくやはらかにお

夕顔

アンバイ

キモツフレタホド

柔

和

ア

ほどきて、ものふかくおもきかたはおくれて、ひたぶるにわかびた

重

後

一

向

若

るものから、世をまだしらぬにもあらず。いとやんことなきにはあ

コラニ

コヤウニマデ

タ

ツ

ト

キ

人

るまじ、いづくにいかうしもとまる心ぞ、とかへすがへすおぼす。

コラニ

コヤウニマデ

ト

カ

ヘ

ス

ガ

ヘ

いとことさらめきて、御さうぞくをも、やつれたるかりの御そを奉

ワザトガマシウ

装束

フケイキナ

狩

衣

り、さまをかへかほをもほのみせ給はず、夜ふかきほどに人をしづ

顔

チットモ

ネシツマ

めて、出入などし給へば、むかしありけん、もののへんぐゑめきて、

ラセテ

昔

物

変

化

イ

ゲ

うたて思ひなげかるれど、人の御けはひはた、手さぐりにもしるき

キミワルク

源

ゲアヒハマタ

テ

ザ

ハ

リ

著

わざなりければ、たればかりにかはあらん、猶このすきもののしい

グ

ラ

キ

△ノ

△

好

色

人

為

でつるわざなめり、とたいふをうたがひながら、せめてつれなくし

出

惟

光

也

疑

④

△惟光△シヒテナニゲナク

らずがほにて、かけて思ひよらぬさまに、たゆまずあざれありけば、

カリニモ

フウ

アヒカハラズシヤレ

いかなることにかとこころえがたく、女がたもあやしうやうたがひ

①

△アラン△

夕

顔

フ

シ

ギ

ニ

造

うらなくたゆめて

〔秘細〕打向ひてはさらにそむくべきやうには見えざれども、自然ふといづくへも行ては、と思ひ給ふ也。「たゆめて」は、由断させて也。

はひかくれなば

〔釈〕「はひ」は、ひそかにものするをいふ詞なり。いづくをはかりとか

〔新〕「はかり」は許量也。物の度量より出たる辞なり。

〔余〕後撰秋下・源わたすへあからば見るべき物をかりがねのいつこばかりに鳴てゆくらん

おひまどはして

〔拾〕「おひ」は、跡をおひたづめる也。「まどはし」は、尋ねまどふ也。なのめと思ひなしつべくは

〔湖〕たとひゆくへなくなりたりとも、大かたにおぼされぬべくは、と也。

へだておき給ふ

〔釈〕「へだて」は、体言なるべし。とだえをおくといふに同じ。

さるべきにこそは

〔玉〕或抄に「宿業にてこそあらめ也」といへり。これも然るべき宿縁なるべければ、便なかるべき事なりとも、よしやいかがはせん、といふ意をこめたる也。

いとかく人にしむことはなきを

〔釈〕「人にしむ」とは、深く思ひの染意也。我御心ながら考へ見給ふるに、かやうに人に思ひしむことはなきに、いかなる前世の宿縁にや、此夕顔にはいたく思ひしみ給ふとおぼすよし也。

いざ

〔釈〕これより源氏君の詞也。「いざ」は、さそひたつる語也。

よづかぬ御もてなしなれば

〔湖〕よのつねならぬ也。ゆくへもしらせ給はず、顔をも見せ給はぬをいふ也。

〔釈〕よのつねのさまに似つかぬ也。さてこは、かくの給へど、なほあやしうよづかぬ、とつづく意也。

わかびていへば

〔釈〕「物おそろし」といへるが、あどなく若びたる也。

いづれか狐ならんな云々

〔釈〕かたみに名のりし給はねば、いづれか人をはかるきつねならんといふ意に戯れてたまふ也。「ただはかられ給へ」とは、我いふままに謀られて共にゆくべき所へ出たち給へ、との意也。「きつねならんな」の「な」は、いひおさふるかたり辞なり。

よになくかたはなる事なりとも

〔玉補〕夕顔の心ざまをいふ也。

〔釈〕たとひ世に又なくかたはなる事なりとも、それをもいとはず、ひたぶるに男に順ふ夕顔の心は、いとあはれげなる人と見給ふ、といふ意也。

頭中将のとこ夏

〔釈〕帚木の品定に、中将のかたられし「うちらはふ袖も露けきとこなつに」とよみたる女にや、とうたがはしく思ひ出られ給ふ也。

しのぶるやうこそはと

〔釈〕身上をつつみてしのぶるには子細あらんとて、あながちにもとひただし給はぬ也。

ふとそむきかくるべき

〔釈〕身上を問ずしてさておきたりとも、けしきばみてにげかくれなどする心ざまなどはなければ、と也。

たる、物おもひをなんしける。君もかくうらなくたゆめて、はひか^{△夕顔カ} ^{△オクソコモナウ} ^{ユダンサセテ} ^{コッソリ}

くれなば、いづくをはかりとかわれもたづねん。かりそめのかくれ^{△コノ所ハ} ^隠

がとはたみゆめれば、いづかたにもうつろひゆかん日を、いつとも^移 ^行

しらじとおぼすに、おひまどはして、なのめにおもひなしつべくは、^{△モシ} ^逐 ^惑 ^大 ^テ ^イ ^ニ

ただかばかりのすさびにても、すぎぬべきことを、さらにさてすぐ^過 ^{追失ヒテ}

してんとおぼされば、ひとめをおぼしてへだておき給ふよなよな^{△ハ} ^人 ^見 ^隔 ^置 ^夜 ^々

どは、いとしのびがたく、くるしきまでおもほえ給へば、猶たれと^{コラ} ^ヘ ^苦 ^{タレト}

なくて二条院にむかへてん。もし聞えありて、びんなかるべきこと^{△世上} ^{フツガフナル}

なりとも、さるべきにこそは。わが心ながら、いとかく人にしむこ^{△アラズ} ^{△思ヒ} ^染

とはなきを、いかなる契にかはありけんなどおもほしよる。[＊] ^{源詞} ^{いざ} ^{サアズ}

と心やすき所にてのどかに聞えんなどかたらひ給へば、^{夕顔詞} [◎] [◎] [◎] ^{マダ}

うかくのたまへど、よづかぬ御もてなしなれば、ものおそろしくこ[◎] ^{源詞} [＊]

そあれ、[＊] ^若 ^{ナルホド} ^含 ^笑 ^{源詞} [＊]

づれかきつねならんな。ただはかられ給へかし、となつかしげにの^チ ^ラ ^狐 ^{デアラウソ} ^{タマサレ}

給へば、女もいみじうなびきて、さもありぬべう思ひたり。[＊] ^源 ^{シタガフ} ^{意也}

くかたはならん事なりとも、ひたぶるにしたがふ心は、いとあはれ^ミ ^グ ^ル ^シ ^キ ^一 ^向 ^順

げなる人と見給ふに、なほかの頭中将のとこなつうたがはしく、か[＊] ^{△中將} ^{△アラズ} ^{ムリ}

たりし心ざままづ思ひ出られ給へど、しのぶるやうこそは、とあな^先 ^{△アラズ} ^{ムリ}

がちにもとひはて給はず。^イ ^い ^で ^給 ^{はず} [＊] ^け ^し ^き ^ば ^み ^て [＊] ^ふ ^と ^そ ^む ^き ^か ^く ^る ^べ ^き ^心

ざまなどはなければ、かれがれにとだえおかんをりこそは、さやう^{△斷} ^{ヨリ}

心ながらも云々

湖師源の心ながらも、此人を置いて、わきへすこしにても心のうつる事あらんは、哀なる事にてあらん、とまで思ひ給ふなり。

ひまおほかるいたや

拾君なくてあれたるやどのいたまより月のもるにも袖はぬれけり六帖

曉ちかくなりけるなるべし

評此一句、下の事どもをいひおこすべきくきはひなるが、身にしみて聞えたり。

なりはひにも

新日本紀に「田家」を「なりどころ」、万葉に「業云々」と書て「なりをしまさね」とあるは、農業をせよといふ事也。

余万葉十八長歌万調まつるつかさどつくりたるその奈理波比を云々。

积「なりはひ」を、諸注共に農業ととられたるは、本の意也。されど、ここは転りたる末の意にて、ただ家業といふほどの事也。次に「田舎のかよひも」とあるを思ふに、小商人のうへと聞ゆれば、「なりはひ」も商賈のわざなるべし。

るなかのかよひも

积京より田舎へゆきて商ひするをいふ。伊勢物語に「ゐなかわたらひ」といへり。

北殿こそき給や

积北隣の人を呼かけて、壁しに物語するさまなり。案に、「きき給へや」とありしを写しひがめたるにや。湖月本には「給や」と、ふもじを略きて書たり。考べし。

えんだちけしきばまん人は

細夕顔の天然大やうなる様を云なり。さかしだちたる人ならば、此けはひを源の間給ふをば、かたはらいたく思ひてきえも入べき物を、と也。

つらきもつきも云々

积或抄に云、「これは今のとなりのありさまを云にはあらず、全体夕顔の性をいふ也云々」といへり。然るべし。

中々はちかがやかんよりは

积隣の物言をはちてかがやかしく思はん人よりは、却てつみなく見ゆ、となり。大どかなる本上をいへる也。

ごほごほとなる神よりも

孟「天のはらふみとどころかしなる神も思ふ中をばさくるものかは。蜻蛉日記にも、「空くらがり松風の音たかくて、神ごほごほとなる」と有。からうすの音

余和名抄、「祝尚兵切韻云、確、和名賀良宇須云々」。

积本居翁云、「柄確の意也。韓確にはあらず」といはれたり。さもやあらん。評このわたり小家がちなる所のさまをいどよくうつしかかれたる中に、源氏のなにのひびきとしらせ給はぬよしをかれたるは、貴人のさまをあらはしたるにて、いと心きたるもの也。

しろたへの衣うつ

細北斗星前横旅雁、南楼月下搗寒衣。

余これは朗詠集に見えて、劉元叔が詩なり。

积「白袴」は、白き袴の事にて、下賤の者の衣にせし也。故に、ことさらにかくいへる也。

に思ひかはることもあらめ。^{△ワカ}心ながらもすこしはうつるふこと

あらんこそ、あはれなるべけれとさへおぼしけり。◎八月十五夜くま^{マデモ}

なき月かげ、^{イに}ひまおほかるいたやのこりなくもりきて、見ならひ給^{間隙}

はぬすまひのさまもめづらしきに、^暁あかつきちかくなりけるなる

べし。となりの家々あやしきしづのをの声々、めさまして、^隣あはれ^{賤詞}

いとさむしや。^{今年}ことしこそなりはひにもたのむところすくなく、^{家業}ゐ^愚

なかのかよひも思ひかけねば、いと心ぼそけれ。^{北殿}こそき給^{へカ}

やなどいひかはすも聞ゆ。いとあはれなるおのがじしのいとなみに、^{メイメイソレンレ}

おき出てそそめきさわぐもほどなきを、女いとはづかく思ひたり。^起

えんだちけしきばまん人は、きえもいりぬべきすまひのさまなめり^{キドリプリスル}

かし。されどのどかに、^{つらきもつきも}かたはらいたきことも、思^{△夕顔△}

ひいれたるさまならで、わがもてなしありさまは、いとあてはかに^{シリ}

こめかしくて、またなくらうがはしきとなりのよいいなさを、いか^用

なる事ともききしりたるさまならねば、^{ヤウス}なかなか^{カヘツテ}はちかがやかんよ^恥

りは、^ナつみゆるされてぞ見えける。^{ごほ}ごほとなる神よりもおどろ^雷

おどろしく、ふみとどころかすからうすのおともまくらがみとおぼゆ。^{イに}

あなみかしがましとこれにぞおぼさるる。なにのひびきとも聞い^{△源△}

れ給はず、いとあやしうめざましきおとなひとのみ聞給ふ。くたく^{△サレト}

だしきことのみおほかり。しろたへの衣うつきぬたのおとも、かす^白

かにこなたかなたききわたされ、空とぶかりのこゑ、とりあつめて^チ

ほどなき庭にざれたるくれ竹

〔**釈**〕「ほどなき」は、間のなく狭き意也。「ざれたる呉竹」は、おもふきあるさまなるをいふ。さて旧注に引れたるには、「くれ竹の」とものじあるあり。もとはしか有しなるべし。

かべの中のきりぎりす

〔**花**詩七月編〕「八月在_レ宇、九月在_レ戸、十月蟋蟀入_レ我床下。」

〔**玉**壁の中になくは、屋の内なれば間近きことなるに、それだに間遠に聞ならひ給へるは、殿の広くてかべもややまどほき故也。然るに、此やどは狭き故に、庭になく虫どもの声も耳にさしあてて鳴やうに間近くおぼす也。

さまかへておぼさるも

〔**湖師**〕珍らかにおもしろくおぼす也。

〔**細**志の切なる故也。

白きあはせうす色のなよやかなるを

〔**花**〕白きあはせのきぬに、うす色のうはぎを着たるべし。

〔**細**紫のうすき色なり。

あな心ぐるしと

〔**釈**〕物いひたるけしきの余りはかなげなる故に、きく人のきのどくげにおぼゆるさまを「心ぐるし」とはいへる也。

心ばみたる

〔**玉**〕俗に氣のあるといふ意と聞ゆ。

此世のみならぬ契り

〔**釈**〕此世のみならず、未来までの契をかはして、夕顔にたのませ給ふ也。「たのめ」は令_レ憑_ヱの意なり。下の弥勒を引出ん結構なりとするべし。

右近をめしいでて

〔**評**〕上に「右近の君こそまづ物見給へ」とのみ有て、ここに「右近をめしいでて」とある、いどくすしき書さまといふべし。かくて、此女の夕顔の乳母の子なるよしは、遙に下に見えたり。心を付て見るべし。このある人々も云々

〔**釈**〕「このある人々」は、夕顔の女房どもなり。かく源氏君の御心ざしのおろかならぬを見知りて、おぼつかなきものから、夕顔の身上によき事なるべしと思ひて、たのみをかけてよろこぶさま也。あけがたちちかう

〔**釈**〕上に「暁ちかくなりにけるなるべし」とありし首尾也。

しのびがたきことおほかり。はしちかきおまし所なりければ、やり端 近 御座 遣

戸をひきあげ給ひて、もろともに見出し給ふ。ほどなき庭にざれた開

るくれ竹、前栽の露は、なほかかる所もおなじごときらめきたり。イの 免 ヤハリ コノヤウナ 如

むしのこゑ虫こゑみだりがはしく、かべ壁の中のきりぎりすだに、まど蟋 蟀 サヘ 間

ほに聞ならひ給へる御みみに、さしあてたるやうになきみだるを、遠 ナレ

なかなかさまかへておぼさるるも、御ころざしひとつのあさからメツランク △夕顔二

ぬに、よろづのつみゆるさるるなめりかし。しろきあはせ、うす色△ヨリ乙 免 白 給

のなよやかなるをかさねてはなやかならぬすがた、いとらうたげに重 ヤハラカ アイランゲ

あゑかなるこちして、そことりたてて、すぐれたることもなけドコ ワキテ

れど、ほそやかにたをたをして、ものうちいひたるけはひ、あな言 アナ

心ぐるしとたたいとらうたくみゆ。ころばみたるかたをすこしそ心 イタイケナ カハユラシク キヲモチ 添

へたらば、と見給ひながら、なほうちとけてみまほしくおぼさるれ△ヨカラン マタモ

ば、いざただ此わたりちかき所に、ころやすくてあかさん。かく源詞 サア ヘン △夜ヲ

てのみはいとくるしかりけり、との給へば、いかでかにはかならん、夕詞 バカリ キウクツナリ ドウシテ セイキフ

といとおいらかにいひてゐたり。この世のみならぬちぎりなどまでジンジャウニ 居

たのめ給ふに、うちとくる心ばへなど、あやしくやうかはりて、よ様 アテニサセ △夕顔△ △並々ノ女下△ 男

なれたる人ともおぼえねば、人のおもはん所もえはばかり給はで、ナレ 憚

右近をめし出て、ずぬじんをめさせ給ひて、御車引いれさせ給ふ。隨身 令 召

このある人々も、かかる御心ざしのおろかならぬを見しれば、おぼ女房たち也 ソリヤク オボ

めかしながらたのみをかけ聞えたり。あけがたちちかうなりにけり。ツカナキ 明

鳥の声などは聞えて

〔玉〕はもじなき本、又てもじを清てよむといへる、皆わろし。下に「ただおきなびたる声にぬかづくぞ聞ゆる」といへるにて、鳥の声は聞えざることしるきをや。

みたけさうじ

〔河〕「みたけ」は金峯山なり云々。

〔湖〕やまとの金峯山に、千日精進してまゐる事也。其おこなひする人にやあらん、と也。

〔細〕枕草子に、「哀なる物。よき男のわかき、みたけしやうじんしたる。定りたる人くしたるも、あはぬよなよなへだつるをばくるしきことにこそ思ふべかめるを、ことの外にきびしくへだてなして、ひとりゐてうち行ひたる暁のぬかのほど、いみじくあはれなり」。

ただおきなびたる声に云々

〔釈〕翁めきたる声にて行法し、ぬかづく音の聞ゆるさま也。さる故に、立居のけはひたへがたげなる也。行法に拝礼の度ありて、立ては居、立ては居する事ある也。

あしたの露に

〔釈〕朝露のはかなきに世の道なきをたとふるは、仏家にいひならへる事也。なもたうらいの導師

〔河〕金剛藏王は、過去釈迦、現在観音、当来弥勒なり。弥勒の出世の時、地にしくべき金を守り給ふ神也。仍て、みたけ精進に弥勒を礼する歟。弥勒は、釈迦の附屬をうけて、一生補処の菩薩とぞ。第一滅劫のはじめに下生し給ひて、成仏して、竜華之樹下にて三会の暁に説法給ふ故に、「当来導師」といふ也。

〔玉〕「此礼する声にて、みたけさうじぞと聞知給ふ也」と云注は、ひがこと也。此名を唱るを聞て来世を祈ることを知給へるにこそあれ。

〔釈〕「当来」は未来といふに同じ。「導師」はみちびく師也。弥勒仏の事也。かれ聞給へこの世とのみは

〔釈〕当来の導師といふを聞給へ、この世のみとは執行者も思はざりけり、来世はかならず有べきなれば、その来世までかはらぬ契をたがへ給ふな、といはんとてあはれがり給ふなり。上に「この世ならぬ契までたのため給ふに」といへる脈なり。

うばそくが云々

＊
とりの声などはきこえてみたけさうじにやあらん、
＊
ただおきなびた

るこゑにぬかづくぞ聞ゆる。たちゐのけはひたへがたげにおこなふ。

いとあはれに、
＊
あしたの露にことならぬ世を、
＊
なにをむさぼる身の

いのりにか、と聞給ふに、
＊
なもたうらいのだうしとぞをがむなる、

かれきき給へ。この世とのみはおもはざりけり、とあはれがり給ひ

て、

うばそくがおこなふ道をしるべにてこん世もふかきちぎりたがふ

な。長生殿のふるきためしはゆゆしくて、はねをかはさんとはひき

かへて、
＊
みろくの世をぞかね給ふ。ゆくさきの御たのめいとこちた

し。

〔河〕「うばそく」は、俗ながら仏弟子に入る人也。四部弟子の一也。涅槃経云、「善男善女受三歸依、是則名為優婆塞」。

〔釈〕「うばそく」は、すなはち行法する翁の事也。そのうばそくが行ふ道をしるべにて来世ある事を知りて、その来世までもふかき夫婦の縁をたがへ給ふな、と云意なり。かくとかざれば「しるべにて」といへる意、詳ならず。諸抄おろそか也。

長生殿のふるきためしは

〔河〕七月七日長生殿、夜半無人私語時、在天願作比翼鳥、在地願為連理枝、長恨歌

〔湖〕玄宗と楊貴妃の契は末とげずなりぬれば、ゆゆしくて、といへり。「はねをかはさんとはひきかへて」とは、かのひよくの鳥といへるにはひきたがへて也。

みろくの世をぞかね給ふ云々

〔河〕從三釈尊入滅、至三慈尊出世、隔五十七俱低六十百千歳云々。弥勒下生經には、将来久遠劫、於此国界成仏云々。

〔釈〕弥勒出世の時までをかねて契り給ふと也。故に、ゆくさきの御たのため、いと言痛しいへる也。「こちたし」は、言の多き意也。

さきのよの云々

〔新〕前世の因縁つたなければ現在かくのごとし、今生如此なれば未来も頼む所なしと、今の身のうさをかへりみてよめり。

〔釈〕「うさ」は、うかれただよ身のうさなるべし。

かやうのすぢなども云々

〔玉〕「かやうのすぢ」とは、歌よむ事をいへり。「心もとなき」は、未熟なるよし也。さてかくいへるは、実に此歌の心もとなきにはあらず、例の紫式部がひげ也。諸抄此意を得ず、ひがこと也。

いさよふ月に

〔玉〕入がたちかけれども、いまだいらで、しばしあるほどの月をいふ。出んとしてしばし出ざるをもいふ。同じ意也。さもじ清言也。さて「女は思ひやすらひ」、一本に「女も」とあるぞまされる。「いさよふ月に」といへれば、女もやすらふといふべければ也。

〔釈〕「いさよふ」は、猶やすらふといはんがごとき意なり。さて「やすらひ」とあるひは誤にて、もとは「やすらふ。」と有しなるべし。さらでは語ととのはず。

にはかに雲隠れて

〔巴〕仏滅をいふ。悪相也。

〔拾〕物にとらるべき前表めてかけるにや。

〔釈〕案に、ここはただけしきのみにて、右の説のごとき意まではあらざるへし。

なにがしの院

〔河〕河原院歟。六条坊門万里小路、坊門、南万里小路、東、彼院、左大臣融公旧宅也。又号「六条院」。後宇多院御領也。

〔釈〕准拠をいはば右のごとくならめど、すべて名をかくしてただ「なにがしの院」といへれば、ただ夕顔の宿ちかきひとつの院と見てあるべし。源氏君の御別荘めきたる所なり。

あれたる門のしのぶ草しげりて

〔釈〕あれたる院のありさまをいとおくうつしかかれたり。語の脈は点のごとき意也。「こぐらし」は、木の枝のたれてくらしき意也。

〔評〕前々より引もてきたる変化の脈、つひに此院に係りてものすごきけしきをまづあらはしたり。変化第二の脈なり。

きりもふかく露けきに

〔評〕この以下は、余光にかかれたり。けしきいとしめやか也。

〔湖〕道すがらのさま思ふべし。

まだかやつたる事を

〔抄〕「まだかやうなる事をも身にはならはぬを、さてもさても心づくしなることにもありけるかな」といふ詞より歌へつづけて、いにしへもかく人のまどふ道か、といへる也。さて夕顔の上は、かやうの心づくしなる道になれ給ひたるか、とのたまふを、女のはぢらひたり、といふにや。いにしへも云々

〔新〕むかし物語に、女をぬすみ出などして、かかる心ぐるしき事多きをふくみたる也。

〔釈〕いにしへの人も、恋の道にはかくのごとくにやまどひありきけん、我はまだかかるしのめごろの道はしらず、との意也。さて歌よりつづけて、そこにはならひ給へりや、いかに、と問かけ給ふ故に、女はぢらひたる也。

ならひ給へりや

〔新〕夕顔の様、世をしらぬにはあらぬに、かくしのびたるすまひにて在からはかかるめにもあひけんかし、とおぼすよりとひ給ふなれば、女ははぢたる也。

山のはの云々

〔玉〕初二句は、源氏君のいかなる心についていづこへあてゆき給ふこともしらで、といふ意のたとへ、「月」は、我身のたとへなり。細流に、「山

きのせ給ふ也
ば、右近ぞのりける。そのわたりちかきなにがしの院におはしましへン

つきて、あづかりめしいづる程、あれたる門のしのぶ草しげりて、着 留守アツカリ アヒタ 荒 垣 衣

見あげられたる、たとしへなくこぐらし。きりもふかく露けきに、イハウヤウモナク 木 間 霧

すだれをさへあげ給へれば、御袖もいたうぬれにけり。まだかやう△車乙 藤 マデ 上 光源詞

なることをならはざりつるを、心づくしなる事にもありけるかな。シナラハナナンダモノヲ シン キナ

いにしへもかくやは人のまどひけんわがまだしらぬしののめの*源

道。ならひ給へりや、との給ふ。女はぢらひて、*タ △ハナハナ

山のはの心もしらでゆく月はうはのそらにてかげやたえなん。こ

ころぼそくとて、ものおそろしうすごげに思ひたれば、かのさしつ* △コソオホ ユレ 凌

どへるすまひのころならひならん、とをかしうおぼす。御車いれ集 有 五条ノ宿 心 習 入

させて、にしのたいにおましなどよそふほど、こうらんに御車ひき* △対 西 御 座 粧 ウチ 勾 欄

かけて立給へり。右近えんなるこちして、きしかたのことなども、艶 既 往

人しれず思ひ出けり。あづかりいみじくけいめいしてありくけしき* 経 営 イテナシ

に、この御有さましりはてぬ。ほのぼのと物見ゆるほどに、おり給* シブン △御座乙

ひぬめり。かりそめなれどきよげにしつらひたり。御ともに人もさ* 細此院の預りの申詞也

ふらはざりけり。ふびんなるわざかなとて、むつましきしもげいし* 不便 フツガフ 下 家 司

にて、殿にもつかうまつるものなりければ、参りよりて、さるべき左大臣 御デイリスル 然

〔評〕上に「人にしらせ給はぬままに、かの夕がほのしるべせし隨身ばかり云々」とありし首尾也。ここに二たびいはせたるは、此院にても人すくなき故をいひ出て、物すこきさまをいふべきしたくみ也。味はふべし。下けいし

〔河〕諸大夫也。此院のあづかりが事也。

御まかなひ打あはず

湖はいぜんなどの人也。

玉「うちあふ」は、もののとどのほりそろひたる事也。おきなが川と

河万葉には鳥のおきなが川はたえぬとも君にかたらふ事つきめやは息長川の事、拾遺に委し。近江国坂田郡にある川なり。いといたくあれて云々

評院中のけしきをあらはしたり。変化第四の脈。釈「はるばると」は、前裁の広きさま也。「木だち云々」は、ここは内より見たるけしき也。上なるは門前のさま也。委しといふべし。秋の野らにて

孟里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなるけうとく

河氣疎

孟人げうとげなる也。

所かな

玉これは、下に源氏君のたまへる詞よりまがひて写し誤れる所あるべし。其故は、同じ語のつたなく重れるうへに、ここは地の詞なれば、「かな」などいふ言あるべき所にあらざればなり。されば、もとは「いとけうとげにあれたり」などぞありけん。

釈この説のごとし。但し、あれたることは上にもあれば、いかが也。しばらくにもじをも削りて、「けうとげなり」としてさしおく。よき本を得て正すべし。

べちなふ

玉河海に「別に建たる屋也。別納にて、大饗おこなはれたる事おほし。小寝殿也」とあり。細流に「雑舎也」とあるはいかが。

釈別納の方にあづかりの居るさま也。さて「はなれたり」といひて、猶人ずくなるさまをあらはされたり。下の段の結構也。

さりともおになども云々

評此語、いと妙なり。変化第五の脈なるが、みづから誇りて招き給へるさまにほのめかされたり。

かはは猶かくし給へれど

細昔はふくめんをたれて面をかくしてありくことある也。

釈上に「顔をもほの見せ給はず」とありし首尾也。夕露に云々

湖師「ひもどく」は、かくしたる顔をあらはしたる也。「えに」は、縁也。源の今かく顔をあらはして夕に見え給ふは、かの夕顔の宿をとほりがけに見しより縁となりし、となり。

釈二句は、覆面の紐をとくを、花の「ひもどく」によせたるなるべし。新釈には、顔をかくし給へるを、扇してかくし給へりといふ旧説をとられたれど、車に相乗し給ふほどにては、扇にてかくしはつべき事のさまならねば、ふくめんといふ方を用ゐたり。さて「玉鐙」は道の枕詞なるを、やがて道の事としていへる例の詞なり。

露の光やいかに

新「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる」と有しをもてとひ給ふ也。

光ありと云々

玉さきに光ありと見しはそらめにてぞ有ける、今よく見れば光はなき物を、とよめるなり。さるは、あくまで光ありと見ながら、ことさらに逆ひてかくそのうらをいふこと、此たぐひ今の世にもよくあること也云々。

釈此説、いとし。諸々抄のごとくにては、「しりめに見おこせて」といへるあざれたるさまにかなはず。さて其あざれたるを、をかくおぼしなす也。

げに打とけ給へる

玉此「げに」は、源氏君の歌に「夕露にひもどく花」とよみ、「露の光やいかに」との給へるなどをうけていへり。

所がらまいて云々

釈かくあれはてたる所がらにては、光る君のすがた似つかはしからずして、いまいましきまでに見え給ふ、と也。まいては、常ぎまの所にても此君のさまに似つきたる所はあらぬを、まいて、と云意也。「ゆゆしき」は「忌々しき」にて、変化の見える事を下にふくめたる書ぎま也。へだて給へるつらさに云々

湖夕顔、源を殊外へだてて名もなのり給はねば、源もあらはさじと思ひけれど、今あらはせしぞ、と也。

人めすべきにやなどまうさすれど、ことさらに人くまじきかくれが源詞

もとめたるなり。さらに心よりほかにもらすな、とくちがためさせ求

給ふ。御かゆなどいそぎまゐらせたれど、とりつぐ御まかなひうち粥

あはず。まだしらぬことなる御たびねに、サツソク

より外のことなし。日たくるほどにおき給ひて、かうし手づからあ未 知

げ給ふ。いといたくあれて、人めもなく、はるばると見わたされて、旅 寝

こだちいとうとましようものふりたり。けぢかき草木などは、ことに起

見所なく、みな秋の野らにて、池もみくさにうづもれたれば、い格 子

とけうとげになり氣 疎にける所かな旧（）べちなふのかたにぞ、ざうし水 草 埋

などして、人すむべかめれど、こなたははなれたり。けうとくもな住

り西対也にけるところかな。さりともおになども、われをば見ゆるしてん△別納ト△

とのたまふ。かははなほかくし給へれど、女のいとつらしと思へれ源詞

ば、げにかばかりにてへだてあらんも、ことのさまにたがひたりと鬼

おぼして、我

ゆふ露にひもどく花は玉ほこのたよりに見えしえにこそありけ緑

れ。露のひかりやいかにとの給へば、しりめに見おこせて、カクバカリ相馴テナリ

ひかりありと見し夕顔のうは露はたそかれ時のそらめなりけり。夕 顔

とほのかにいふ。をかしとおぼしなす。げに打とけ給へるさま世にウハベト云意ラタリ

なく、所がらまいてゆゆしきまで見え給ふ。つきせずへだて給へるオモシロイ

つらさに、あらはさじと思ひつる物を、今だに名のりし給へ。いとナルホド△源ノ

あまのこなれば

〔河〕白波のよするなぎさに世をつくすあまの子なれば宿もさだめず新古今
われからなり

〔新〕或云、「あまのこ」と女のいふにつきて、もにすむ虫をとりよせて、わが今で顕さざれば、なのり給はぬもことわり也、とうらみ、かつは又かたらひ給ふ、と也。

右近がいはんこと

〔釈〕案に、これは此所へたばかりてよびとり給ふ事を、右近が惟光になげきはんことのいとはしければ、といふ意也。さるは、此事のもととは惟光なれば也。下に「うこんたいふのけはひきくに、はじめよりの事、打思ひ出られてなく」と有をも思ふべし。諸抄いささかつたがへり。さもありぬべき有さまにこそは

〔釈〕ずゐぶんによろしきかたちの女ならん、とおしはかる也。
わがいとよく云々

〔潮〕初より惟光がいひよりてわが物にもすべきものを、と思ふなり。

たとしへなくしづかなる云々

〔細〕なにがし院のさま思ひやるべし。

〔評〕院中の夕ぐれのけしきをあらはし出たり。変化第六の脈也。下に「いとかわく、ひるも空をのみ見つる物を」とある所の首尾也。物思ひあるさま也。さて、やうやうにくれゆくにしたがひて、けうとく物すごくなりゆくさま、いはんかたなし。

夕ばえを見かはして

〔釈〕「夕ばえ」は、夕べになりて物のますますめでたく見ゆるをいふ。ここは「見かはして」とあれば、けしきの夕ばえにはあらで、かたみにうつくしき顔の夕ばえを見かはす意也。さる故に、「女もかかるありさまを云々、よろづの歎きわすれて、すこし打とけゆく」とはいへる也。もし諸抄のごとくけしきの事とする時は、上に「たとしへなくしづかなる、夕のそら」とあるに重なるべし。

すこし打とけゆく

〔釈〕今までは打とけざりし故に、「すこし」とはいへる也。
つと御かたはらにそひくらして

〔評〕「つと」の語、俄にてめでたし。院中のけしきやうやう物すごくなるままだに、女のものおちして源氏君に副臥ソトシたる間に日のくれはてたるおもふき、いとよく書なされたり。かくて男君は、それを中々にらうたきものにおぼえ給ひていとほし給へる、又さも有べき情なり。此所変化第七の脈なるが、やうやうにせまりきて人のうへに及びたり。心を付べし。かうしとくおろし給ひて

〔釈〕上に「かうし手づからあげ給ひて」とありし首尾也。ここも手づからなるべし。

なごりなくにたる

〔釈〕心の中に思ひ残す事なき意を、「なごりなく」といへる也。かくむつましくなりて、心のへだてを残すことと名をあらはさぬを、恨み給ふ也。うちにいかにもとめ給ふらん

〔評〕ものすごく打しめりゆく院中のけしきに、源氏君もやうやううらがなしく思ひなり給ひて、帝の御けしきをかしこみ、且六条わたりの事など思ひ出給ふ事、げにさもあるべき人情にて、心もくまぐまを画エガきたるがごとし。

うらみれんもくるしう

〔釈〕かやうの所にしのびありきし給へれば、六条わたりにうらみらるもきのどくに尤なり、との意也。

何心もなきさし向ひを云々

〔釈〕源氏と夕顔とさし向ひといふ意なり。

〔拾〕此めやすきにくらべて、御息所のあまり心ふかく、見るもくるしきまでなるを、とりすてたき、と也。
〔釈〕「とりすてばやとぞ」とありしを、ぞをおとせるなるべし。

むくつけしとの給へど、〔あまのこなればとて、さすがにうちとけ
キミガワルイ

ぬさま、いとあいだれたり。源詞よしこれも〔われからなり、とうら
アマヘタル顔也 ママヨ 我 ユエ

みかつはかたらひくらし給ふ。惟光たづね聞えて、御くだ物など参
幕 △コノ所へ マキリ 菓子

らす。右近がいはんこと、さすがにいとほしければ、ちかくもえさ
* キノドク △アラム 推 量 △御座

ふらひよらず。かくまでたどりありき給ふもをかしう、さもありぬ
寄 カウ △源へサグリ △女へ

べきありさまにこそは、とおしはからるるにも、わがいとよく思ひ
△アラム 推 量 * わがいとよく思ひ

よりぬべかりしことを、ゆづり聞えて、心ひろさよなど、めざまし
△源二 △我ナガラ イカガシウ

うぞ思ひをる。たとしへなくしづかなる、ゆふべの空をながめ給ひ
居 イハンカタナク 静

て、おくのかたはくらうものむつかし、と女の思ひたれば、はしの
奥 闇 イハ

すだれをあげてそひふし給へり。夕ばえを見かはして、女もかかる
上 ネコロビ △互ニカホ △

ありさまを、思ひのほかにあやしきこちはしながら、よろづのな
フシギナ 源ノカタチノ

げきわすれて、すこしうちとけゆくけしき、いとらうたし。つと御
* カハユラシ ヒシト

かたはらにそひくらしで、物をいとおそろしと思ひたるさま、わか
副 暮 幼

う心ぐるし。かうしとくおろし給ひて、おほとなづらまぬらせて、
* 格 子 キノドクナ ハヤク 下 御 殿 油

なごりなくにたる御ありさまにて、なほ心のうちのへだてのこ
* 源詞 マタヤハリ △

し給へるなんつらき、とうらみ給ふ。うちにいかにもとめさせ給ふ
* 源心 内 裏 ドヤウニ タヅネ イ給は

らんをいづこにたづぬらん、とおぼしやりて、かつはあやしのここ
△御使へ タツネユク カタデマニ △我ナガラ

ろや。六条わたりに、いかに思ひみだれ給ふらん。うらみられん
△ヘン ドノヤウニ *

もくるしうことわりなり、といとほしきすぢはまづ思ひ出聞え給
ダウリ キノドクナル 二 パンニ

ふ。何心もなきさしむかひを、あはれとおぼすままだに、あまり心ふ
△タノ △六条へ

此院のあづかりの子の

〔**釈**〕「子」とあるのもじ、一本になきは、おちたる也。さて此「あづかりの子」は、院あづかりの子なること論なし。然るを、細流に「前に『おほい殿にもしたしうつかうまつる』などいひし者也」とあるは、たがへり。

御こたへしておきたれば

〔**釈**〕この「起きる」は、預りの子一人のみなるべし。さらでは「こわづくれ、とおほせよ」とあるにかなはず。下文もすべて預りの子一人と聞えたるをや。

つる打して

〔**湖**〕弓の弦を打ならせ、と也。悪鬼のおそるる故也。

〔**釈**〕いはゆる鳴弦の術也。上に「太刀をぬきて」とありし照応なるべし。

「こわづくる」は、絶ず声をして人ある事を示すなるべし。

惟光の朝臣の

〔**評**〕惟光を省きたるは、殊更にあわてさわぎ給ふ事をいはんとてなるべし。いと巧みなり。

滝口なりければ

〔**新**〕宮中の滝口てふ所に侍らふものふ也。

〔**釈**〕拾芥抄云、「滝口本所、在御所近辺」。清涼殿良、辺歟。寛平、御時、被置衆、若十人若二十人、随時儀云々」。この意は、かく申者は滝口の武士なりければ、弓弦をにつかはしく打ならして、といふ意也。預りがさうしの方へいぬるは、火を取来んためなる事、次の文にてしられたり。火あやふし

〔**河**〕本朝文粹云、「夜行翁、夜々警火旧府中、呼曰火、危彼誰何、誰順」。

〔**釈**〕今世に火用心といひていましめありくことのごとし。

あづかりがさうしのかたへ

〔**釈**〕「かたへ」とある本はわろし。これは預りが曹子にゆきて火を取来べきためにいぬるなれば、傍にゆきて何をかせん。又「いぬる也」とあるも言の格たがへり。「いぬ也」と有に随ふべし。

名だいめん

〔**花**〕亥の一刻に、内賢、時の札を奏す。其後、侍臣のなだいめんあり。なだいめんとは、名謁を云。殿上に御とのゐしたる侍臣、たがひに名をとはれて名のる也。此次に滝口のどのゐ申あり。どのゐ申といふも、名謁と同じき也。滝口二十人あるもの也。いづれも亥の刻の事なれば、「いたくもふけぬにこそは」とかけり。

〔**細**〕此火ともしに行たる間に、禁中の事などおぼしやる也。前に「うちにいかにもとめさせ給ふらんを云々」とあり。此心より、かやうの事にふれても思ひやり給ふ也。

〔**評**〕この御説のごとし。物のわびしきにつきて、いよいよ禁中をおぼし出る情、さもあるべし。

きつねなどやうの物の云々

〔**釈**〕変化第十二段の脈。

けおそろしう

〔**湖**〕けしきおそろしき也。

ひきおこし給ふ

〔**万**〕右近を引起し給ふ也。

わかびたる人にて云々

〔**湖**〕心をさなき人にて、氣をとられぬる、と也。

〔**釈**〕「ものに」は、鬼物に也。

さふらふかぎりみなねたり。この院のあづかりの子の、むつましく

侍

寝

つかひ給ふわかきをのこ、またうへわらはひとり、例のずゐじんば

若

男

上

童

一人

かりぞ有ける。めせば御こたへしておきたれば、しそくさしてまゐ

召

起

源詞

紙燭

トモシテ

れ。隨身もつるうちしてたえずこわづくれ、とおほせよ。人ばなれ

＊
イおと
弦打

声

イヒツケヨ

たる所に、心とけていぬるものか。惟光の朝臣のきたりつらんは、

キヲユルシテ 寝

来

△イ

ととはせ給へば、さふらひつれど、おほせごともなし、あかつきに

カガセシ間

侍

仰

言

暁

御むかへにまゐるべきよし申てなんまかで侍りぬる、と聞ゆ。この

迎

退出

かう申すものは、たきぐちなりければ、ゆづるいときぎきくう

如此

滝口

弓弦

ニツカハシウ打

ちならして、火あやふしといふいふ、あづかりがさうしのかたへい

鳴

危

イヒナガラ

曹子

ヘヤノ方

ぬなり。内をおぼしやりて、なだいめんはすぎぬらん。滝口のどの

イる
源心

＊
対面

過

直

ぬまうし、今こそとおしはかり給ふは、まだいたうふけぬにこそは。

宿奏

更

△アル
ラメ

かへりいりてさぐり給へば、女君はさながらふして、右近はかたは

△モトノ所

探

モトノママニ

臥

らにうつぶしふしたり。こはなぞ。あなものぐるほしのものおぢや。

俯

伏

臥

此

何

アア

狂

オソレ

あれたる所は、きつねなどやうの物の、人おびやかさんとて、けお

荒

＊
狐

＊
氣

そろしう思はするならん。まろあれば、さやうの物にはおどされじ、

怖

オレ

威

とてひきおこし給ふ。いとうたて、みだり心ちのあしう侍れば、う

＊
△右近

起

右近詞

アンマリ

俯

つぶしふして侍るなり。おまへにこそわりなくおぼさるらめ、とい

伏

臥

夕顔也

ナサケナイコトニ

へば、そよ、などかうは、とてかいさぐり給ふに、いきもせず。ひ

源詞

ソレヨ

何如此

△モノオチ

△モノオチ

挿

探

息

きうごかし給へど、なよなよとして、我にもあらぬさまなれば、い

動

グニヤグニヤト

シヤウタイモナキ

といたくわかびたる人にて、ものにけどられぬるなめり、とせんか

＊
幼

鬼物

+

ン

シカタ

近き御几帳をひきよせて

湖源のみづから引よせて、女君をへだてて滝口をめす也。

つつましきになけしにも

〔釈〕「つつましき」は、「慎ましき」といはんがごとし。恐多きに、といふ意也。「長押」は、上段の間のかまち也。

所にしたがひてこそ

湖礼儀をなすも所によるぞ、と也。

おもかげに見えてふときえうせぬ

此語、めでたし。火の光につきて変化の物の立かくれたるさま也。これらすべて、源氏君の御心がなる理を思ひて「おもかげに」といへる、かへすがへすめでたし。心をつくべし。変化第十三段の脈なり。むかし物語などにこそ

〔釈〕旧注に、寛平法皇、京極御息所と河原院にいでましけるに、融公の霊たたりをなしたる事など引れたれど、例のいかが。只昔物語にかやうの事はきけ、今の世にはめづらし、といふ意とのみ見てあるべし。下に「法師などをこそ云々」とあるを、淨蔵が加持したる事にあてられたれど、それもいかが也。されど、其文は余釈に引出て論じつ。

いはんかたなし云々

〔釈〕この段、詞おちたるかと思へど、さしもあらず。例の打かへしたる文法とおぼし、試に甲乙丙丁のしるしをつけたるに随ひて、事の意をさとるべし。

さこそ心づよがり給へど

湖前に「まろあれば、さやうの物にはおどされじ」との給ひし事也。

やるかたなくて

〔釈〕うれひをはらしやるかたなくて也。

けはひものうとくなりゆく

〔釈〕夕顔のけはひの生たる人とはかはりてゆくを、「物うとく」とはいへる也。諸抄に三魂七魄の事などいはれたる、いといと不用なれば略きつ。南殿のおにの云々

湖此おとどは貞信公也。

河世継云、「いずれの御時とは覚え侍らず。思ふに、延喜朱雀院の御ほどにこそは侍りけめ。宣旨うけ給はらせ給ひて、おこなひに陣の座におはします道に、南殿の御帳のうしろのほどとほらせ給に、もののけはひして、御剣の石つきをとらへたりければ、いとあやしくてさぐらせ給ふに、毛はむくむくとおひたる、手の爪ながく刀のはのやうなるに、『鬼なりけり』といとおそろしう思しめしけれど、おくしたるやうに見えじと念ぜさせ給ひて、『おほやけの勅定承りて、さだめに参る人どらふるは、何物ぞ。ゆるさずはあしかりなん』とて、御太刀を引ぬきて、これが手をとらへさせ給へりければ、まどひてうちはなちて、うしとらのすみざまへまかりけり云々」。

さりとて

湖南殿のおにもおとどにけさくなしたれば、源も夕の身くるしからじ、との給ふ也。※「おとどにけさくなしたれば」は不審。湖月抄版本では「おとどにけさ、なしぎ、れは」（＝大臣に祟らなかつたので）と読める。よるの声はおどろおどろしく

〔釈〕夜の泣声は高く聞ゆる物なれば、「おどろおどろし」といへり。いとあわたしきに

湖右近をばいさめ給へども、源氏の、我もあきれ給ふ也。〔釈〕「あわたしき」は、あわてたるさま也。

たなきこちし給ふ。しそくもて参れり。右近もうごくべきさまに
ノナイ △預ノ子 紙燭 動

もあらねば、ちかき御几帳をひきよせて、なほもてまぬれとの給ふ。
近 源詞 マダモ△チカク

れいならぬことにて、おまへちかくもえ参らぬつつましきに、なげ
ツネ ⑩ ②長

しにもえのぼらず。なほもてこや。ところにしたがひてこそ、とて
押 上 源詞 マダモ持 来ヨ 所 △辞退 モセメ

めしよせて見給へば、ただこのまくらがみに、夢に見えつるかたち
召 寄 夕顔ノ 枕 モト

したる女、おもかげに見えてふときえうせぬ。むかしものがたりな
* ⑩ ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

どにこそ、かかる事はきけ、といとめづらかにむくつけけれど、ま
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

づこの人いかになりぬるぞ、とおもほす心さわぎに、身のうへもし
夕顔 イハ △ワカ

られ給はず。そひふして、ややとおどろかし給へど、ただびえにひ
副 臥 コリヤコリヤ エラヒエ

えいりて、いきはとく絶はてにけり。いはんかたなし。たのもしく
息 ハヤク ① ②

いかにといひふれ給ふべき人もなし。ほうしなどをこそは、かかる
言 触 ④ 法師

かたのたのもしきものにはおぼすべけれど、さこそ心づよがり給へ
方 ⑩サウ ゲンキバリ

ど、わかき御心ちにていふかひなくなりぬるを見たまふに、やるか
若 ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

たなくて、つといだきて、あがきみいきいで給へ、いみじきめな見
ヒシト 抱 源詞 吾 君 生 出 カナシキ

せ給ひそ、との給へど、ひえいりにたれば、けはひものうとくなり
冷 入 ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ゆく。右近はただあなむつかし、と思ひけるこちみなさめて、な
アアオソロシ

きまどふさまいといみじ。なんでんのおにの、なにがしのおとどを
泣 惑 ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

おびやかsherためしをおぼしいでて、心づよく、さりとていたづ
先 離 ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

らになりはて給はじ。よるのこゑはおどろおどろし。あなかま、と
也 ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

いさめ給ひて、いとあわたしきに、あきれたるこちし給ふ。こ
禁 ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

いへとおほせよ

〔湖〕惟光にはやくまゐれと云付て、人をつかはせと澹口にのたまふ詞也。なにかしのあざり

〔釈〕惟光が兄の阿闍梨と上に見えし人也。「なにかし」は、例の名をいふ所なるをかくしたる也。「そこに物する」とは、惟光のやどれる所にあらばといふ意也。大式乳母の家なるべし。さてこれは上の「ほうしなどをこそは、かかるかたのたのもしきものにはおぼすべけれ」といへる脈にて、呼来りて加持などせさせんため也。

あま君などのきかんに云々

〔評〕かくあわたしたしき事の中に、尼君の思はん所までつつみ給ふさまにかかれたる、いと委しくいとめでたし。

むくむくし

〔新〕春海考るに、「むくむくし」は「むくつけき」を略して重ねいへる也。「あざやかなる」を略して「あざあざ」といへると同じ。

〔釈〕「略して」といへるはいかが也。「むくつけき」のむくと同語なるが、活きざまのかはりたる也。

夜中も過にけんかし

〔釈〕上に「澹口のとのる申、今こそ」と有し脈にて、やうやう更行たるさま也。変化第十四の脈。

風のややあらあらしう吹たるは

〔釈〕上に「風すこし打ふきたるに」と有し脈にて「あらあらしう」といへり。松のひびきこぶかく聞えて

〔釈〕夜のふけしづまれるに、風のあらく吹て松にあたる音は、げにいと木深くものすく聞ゆべし。故に「まして」とはいへる也。

けしきある鳥のから声に鳴たるも

〔湖〕「けしきある」は、ただならず一けしきある也。「から声」は、聞なれずからびたるなり。

〔河〕余白氏文集第一凶宅詩に、「梟鳴、松桂枝、狐蔵、蘭菊叢、蒼苔黄葉地、日暮多旋風、前主為将相、後主為公卿」。

〔弄〕「山にすむふくろふはこれにや」と河内本に有。面白し云々。

〔釈〕案に、「山にすむ」といふ事ありては、中々に此詩にはかなひがたし。猶考ふべし。詩の語を思ひたるかたにていはば、「かの『梟鳴、松桂枝』など文集にいへる鳥はこれにや」と、始めておぼせるよし也。貴人のさ

ま書得られたりと覚ゆ。さて「おぼす」と有は、「おぼす」を写し誤れるか。源氏君の思ひ給ふ事なれば、必しか有べくおぼゆ。

はかなきやどりは

〔釈〕「はかなき」は、人少くあれたる所なる故にものはかなき也。

わななきしぬべし

〔釈〕「わななき」は、ふるふさま也。ふるひ死るかともみゆるばかりなる意也。

火はほのかにまたたきて

〔評〕「またたき」といへる、めでたしとめでたし。火のあかくくらくきらめくを、変化の段なる故に「またたき」とたとへたる也。この所、変化十五段の脈にて、つひに結びはてたる所也。かれ物凄くおそろしきけしき、いよよますますはなはだし。

屏風のかみ

〔釈〕「上」也。「紙」にあらず。屏風の上のあきたる所、隈ありと見えておそろしげなる也。「くまぐまし」は、しか隈ありと見ゆるさまをいふ。例の形容の辞なり。さてここは見ゆるにどある本をまされりとすべし。「火はほのかにまたたきて」といふ語の末なれば、「見ゆる」といふかたことわり也。

物のあしおとひしひしと

〔拾〕万葉長歌に、「この床のひしとなるまでなげきつるかも」。

〔釈〕これはひしといふ事の類例也。さて物の足音ひしひしとふみならして、うしろの方よりよりくる心ちするは、むくつけき事のかぎりにて、いたくわびしきさまを書はてたる也。

うしろよりよりくるこちす

〔余〕朗云、よりのかさなりたるかたよからん。其有様ひとしほ思ひやらる。とくまゐらなとおぼす

〔釈〕もののわびしくむくつけきにつけて、惟光を待かね給ふさま、げにさもあるべし。

のをどこをめてして、ここにいとあやしう物におそはれたる人の、な預りノ子澹口也 召

やましげなるを、ただ今惟光のあそんのやどれる所にまかりて、い悩 ユキ

そぎまゐるべきよしいへ、とおほせよ。なにかしのあざり、そこにイヒツケヨ 阿闍梨 其所

ものするほどならば、ここにくべきよししのびていへ。かのあまぎヒツカニ 細大式の乳母 尼君

みなどのきかんに、おどろおどろしくいふな。かかるありきゆるさギヤウサンニ シノビアリキ

ぬ人なりなど、物の給ふやうなれど、むねはふたがりて、この人を心 塞 夕顔

むなしくしなしてんことの、いみじくおぼさるるにそへて、おほか為 成 △カナシウ ツケ

たのむくむくしき、たとへんかたなし。夜中もすぎにけんかし。風細いふせくおそろしき也 △カナシウ

のややあらあらしう吹たるは、まして松のひびきこぶかく聞えて、荒 荒 木 深

けしきある鳥のからこ系になきたるも、ふくろふはこれにやとおぼキキナレヌ 梟 鳴 △アラシ

ヒトフシカハツタ

ゆ。うちおもひめぐらすに、こなたかなたけどほくうとましきに、す力 源心 マハス △モ 疎

人声せず。などでかくはかなきやどりはとりつるぞ、とくやしさも△モ ドウシテ 悔

やらんかたなし。右近はものもおぼえず、君につとそひ奉りて、わ△オソロシサニ ヒタトヒツツキ

ななきしぬべし。またこれもいかならん、と心そらにてとらへ給へ戦 慄 死 ドウナラウ 空 △右近ヲ

り。われひとりさかしき人にて、おぼしやるかたぞなきや。火はほ源氏 カシコイ フンベッスル カ

のかにまたたきて、もやのきはにたてたる屏風のかみ、ここかしこスカ ビカビカシテ 母屋 サカヒ 上

のくまぐましく見ゆるに、もののあしおとひしひしとふみならしつ△ナニヤラ 足 音 メキメキ 踏 鳴

つ、うしろよりよりくる心ちす。これみつとくまゐらなとおぼす。イヘリナシ 疾 マキレカシ

ありかさだめぬものにて、ここかしこたづねけるほどに、夜のあく湖しのびありきなるべし 在所 定 ウチ 明

ちよをすぐさん心ちし給ふ

〔**釈**〕後拾遺へくるるまは千歳を過す心ちしてまづはまことの久しかりけり。此歌などをおもひてかかれたるなるべし。されば、ここの「ちよ」は、千代の意なり。湖月本「千夜」とかけるはひがこと也。

からうじて鳥の声聞ゆるに

〔**釈**〕鳥のこゑ聞ゆるにつきて、すこし御心のしづまるにつけて次々の事を思ひ出給ふさま、げにいとことわり也。

〔**評**〕この所、変化の段の終也。そもそも此変化の様、此院中へかかり来て、「あれたる門のしのお草しげりて、見あげられたる、たとしへなくこぐらし」と書出られたるより、次々にそのけしきをあらはし、かつ源氏君のおぼす心などかたみにくはしく書出られたるが、やうやうにあやしくなりまさりて、つひに夢の中よりへんぐゑの女あらはれたる、其なごりますますものすこくして、源氏君のあわて給ふさまのいとせはしきを、つゆのなんなく書とられたるは、いといとめづらかにめでたき筆つきといふべし。よくよく心をつけてよみあちはふべくなん。

いのちをかけて何の契に

〔**釈**〕いかなる前世の宿因ありて、命をまでかけてかくくるしきめを見る事ならん、とおぼすよし也。

おふけなくあるまじき心の

〔**細**〕藤壺に心かけ給ふ事の空おそろしきむくいか、とおぼす也。

しのぶとも世にある事かくれなくて
〔**釈**〕かかるぞげに世中のありさまなる。旧注に中庸を引たるはことごとし。よからぬわらはへのくちずさみ

〔**釈**〕後世にいはゆる京童のくちずさみ也。ふるき諺なりしにこそ。ありありて

〔**湖**〕かやうにうき聞え、ありありてのはてはては、と也。

からうじて惟光のあそん参れり

〔**評**〕惟光を帰らしめたるは、源氏君のあわたたしきをつよくかかん為なること、上にいへるがごとし。ここにいたりて出来らせたるは、末々の事どもを執せんため也。作者の用意、こまやか也。

ふともものいはれ給はず

〔**評**〕源氏君のさま、打見るがごとし。

右近たいふのけはひきくに云々

〔**釈**〕右近、これみつの来りしけはひをききて、その初、惟光がたばかりて、源氏君を夕顔の宿へかよはせそめ参らせし事を思ひ出る也。さてその事どもは、上に「くだくだしければれのもらしつ」とて略きたる中にこもりたる事也。然るを、細流に「惟光がわが懸想人にしてありきし事を思出たる也」とあるは、いささか違へり。

えたへ給はで

〔**釈**〕語脈甲乙のごとし。えたへ給はで、とばかりなき給ふ、といふ落着なる中に、そのさまをいへる也。

此人にいきをのべ給ひてぞ

〔**釈**〕惟光が参りしによりて打くつろぎ給ひて、といふ意をかくいへる也。
〔**評**〕此語、いといとめでたし。今まではとかくしひてさかしがり給ひしを、惟光にゆづらひたるこちして、かなしきをおぼえ給ふさま、人の情をゑがけるがごとし。「とばかり」といひ、「ややためらひて」といへるなど、さらにめでたし。

ず経などをこそすなれ

〔**釈**〕或抄に、「邪氣を退けんために経をよます事也」といへり。かつは、いき出んためのいのりにも有べし。

きのふ山へまかりのぼりにけり

〔**釈**〕「山」とのみいふは、すべて比叡山のことなり。これにて、あざりは比叡山の僧なることしられたり。

かねて例ならず

〔**細**〕夕顔の上は、自然かねて違例などせし事の有か、と也。

るほどのひさしさ、^{イハ}ちよをすぐさんこちし給ふ。^{*}からうじてとり

アビダ

久

千

世

ヤウヤウノコトデ

鶏

の声はるかに聞ゆるに、^{*}いのちをかけてなにのちぎりにかかるめを

命

繫

宿

縁

△クルキ

見るらん。わが心ながら、かかるすぢにおふけなくあるまじきこ

好色ノスヂ也

モツタイナク

ろのむくいに、かくきしかたゆくさきのためしとなりぬべきことは

報

アトサキニナイ

例

成

あるなめり。^{*}しのぶとも世にあることかくれなくて、内にきこしめ

ン

カクス

隠

内裏

されんことをはじめて、人の思ひいはん事、^{*}よからぬわらはべのく

世ノヒト

*

童

ちずさびになりぬべきなめり。^{*}ありありてをこがましき名をとるべ

口

号

タワケガマシキ

きかな、とおぼしめぐらす。^{*}からうじて惟光の朝臣まゐれり。よな

ヤウヤウノコトデ

夜中

かあかつきといはず、御心にしたがへるものの、こよひしもさぶら

暁

順

今夜ニカギリテ

侍

はで、めしにさへおこたりつるを、にくしとおもほすものから、め

召

マデ

怠

憎

△ハ

しいれて、のたまひ出んことのおへなきに、^{*}ふと物もいはれ給はず。

召

入

ハリアヒナキニ

チヨットニ

右近たいふのけはひきくに、はじめよりのこと、うち思ひ出られて

惟光

△来リシ

最初

なくを、君もえたへ給はで、われひとりさかしがりいだきもち給へ

泣

*

甲

カシコガリ△右近ヲ

りけるに、^{*}この人にいきをのべ給ひてぞ、かなしきこともおぼされ

惟光

息

伸

ける。とばかりいといたくえもとどめずなき給ふ。ややためらひて、

◎シバラクハ

留

泣

猶

予

ここにいとあやしき事のあるを、あさましといふにもあまりてなん

キモノツフレタト

余

ある。かかるとみの事には、^{*}ずきやうなどをこそはすなれとて、そ

ニハカ

為

のこどもせさせせん。ぐわんなどもたてさせんとて、あざりものせ

誦経ナドノコト也

立

阿闍梨

ヨベヨ

よといひやりつるは、とのたまふに、きのふ山へまかりのぼりにけ

△イカニ

*惟光詞

比叡山也

り。まづいとめづらかなることにも侍るかな。^{*}かねてれいならず御

△ソ△

珍

奇

*

例

おのれもよとなきぬ

〔**新**〕源氏君の泣給ふを見奉り感じて、惟光も、よにいはゆるもらひ泣をするさま也。

〔**河**〕君によりよよよよよとよよよとねをのみぞなくよよよよと六帖

さいへど云々

〔**新**〕万葉に「もどせに老舌出てよむども」とよみて、なく時の口つき也。〔**新**〕「さいへど」は「たのもしかりけれ」へ係る意にて、「云々の人こそ、かかるものをりふしは、さいへどたのもしかりけれ」といふ意にて、例の文法也。玉小櫛に「必しも上にうくる事なくともいふ詞也」とあるは、ひがこと也。上を受る事なくて「さいへど」とはいふべくもなし。とある事も

〔**玉補**〕「かかる事も」といふを略きたるなり。

しほじみぬる人こそ

〔**新**〕「塩じむ」は、度々事に出あひて功者なる事也。塩の物に染シムをもてたとへたり。

くゑんぞく

〔**余**〕涅槃経云、「我及眷族」。史記譬喻伝、「大臣誅諸呂須婁属」、索隱曰、婁音眷」。

〔**新**〕從類の事也。

山寺こそ

〔**新**〕或抄云、山寺には死人をあつかふ事多ければ、まきれんと也。

思ひまはして

〔**新**〕惟光のしばらく思案するさま也。いと委し。

むかし見給へし女房の

〔**新**〕此詞、惟光があひたる女のごとく聞ゆれども、下文のさまさはあらず。故、見知タルと訳せり。「尼にて侍る」は、尼になりたるが住て侍るといふ意也。

ちちの朝臣のめのとに侍りしもの

〔**新**〕惟光が父の乳母なりし女の、年よりて尼になりて住たる也。

みつはぐみて

〔**河**〕年ふればわが黒髪もしら川のみつはぐむまでおいにけるかな後撰

〔**巴**〕此詞、青表紙になしと云々。

〔**新**〕今昔物語旧本十三増賀法師の事いふ条に云、「美豆波ミヅハ左須ハサスやそぢあまりのおいのなみくらげのほねにあふぞうれしき」。かくもあれば、「三齒ミツハさす」ともいふ也。老て齒のまばらに落て、上のは下のはと、三ツさし合ひくみあふやうなるをいへり。三輪と覚えていふ説は、皆誤なり。右にも「美豆波」とこそ書たれ。かの檜垣の姫がよめる事も同じ云々。

〔**新**〕新釈の説も、なほいかがあらん。此詞、とにかくに知れがたし。ただ年老たるさまとのみ心得であるべし。諸説は余釈にいへり。さて、ひがき女が集には、此歌初句「老はてて」、二句「髪は」、末句「なりにけるかな」と有。やまと物語には、初句「うば玉の」とあり。

かこかに

〔**万**〕かこかことしたるといふ心也。

〔**河**〕四明ともいふ。かこめる心也。

〔**湖**〕師シ今俗に、かんごりとしたるといふ心也。

うはむしろにおしくみて

〔**湖**〕惟光夕顔を直すにいだくは、恐ある故に筵にてつつみたる也。

〔**孟**〕弘仁八年八月、從三位橘朝臣常子薨、以ヲ席蓑ツ屍ツ。

〔**新**〕「上席」は、うへにしくむしろ也。

ささやか

〔**新**〕「ささ」とは惣てちひさきことをいふ。「小竹葉ササハ」「小波ササナミ」などの類多し。

したたかにしもえせねば
〔**新**〕源氏君はえいだき給ふまじければ、惟光車にいだきのせたるものから、なほ力なくて思ひのままにえとりつくろはぬを、「したたかにしもえせず」とはいへる也。さばかりの人の、事におりたれたるさまを、いとよくうつしかかれたり。

心ちの物せさせ給ふことや侍りつらん。源詞

さることもなかりつ、とて

なき給ふさま、いとをかしげにらうたく、見奉る人もいとかなしく泣

て、おのれもよとなきぬ。さいへど年うちねび、世中ノのとあるこ惟光

ともしほじみぬる人こそ、もののをりふしはたのもしかりけれ。い源

づれもいづれもわかきどちにて、いはんかたもなければ、この院も氏毛惟光モ右近モノ意也 若 ドウシ イハウヤウモセウヤウモ

りなどにきかせんことは、いとびん+なかるべし。この人ひとりこそフツガフナル 院守 一人

むつまじうもあらめ。おのづから物いひもらしつべき、くゑん*ぞく*属源氏二

もたちまじりたらん。まづこの院をいでおはしましねといふ。さて交 先 マセヨ 源詞

これより人ずくななる所は、いかでかあらんとの給ふ。げにさぞ侍惟光詞

らん。かのふるさとは、女房などのかなしひにたへず、なきまどひ細夕顔ノ宿也 少 ドウシテ ウ 堪 泣 惑

侍らんに、となりしげくどがむるさと人おほく侍らんに、おのづか隣 家 繁 智 里

らきこえ侍らんを、山でらこそ、なほかやうのことおのづからゆき△世間二 マダシモ 葬ノ事也 自 然 行

まじり、ものまぎるる事侍らめ、と思ひまはして、むかし見給へし雑 紛 母 シバラク思案シテ也惟光 休也 昔 ミシリタル

女房の尼にて侍る、ひんがし山のへんに、うつし奉らん。惟光がち△住テ 邊 △夕顔ヲ 拙者ガ父

ちの朝臣のめのとに侍りしものの、みづはくみてすみ侍るなり。乳 母 トシヨリテ 住

あたりは人しげきやうに侍れど、いとかこかに侍りと聞えて、あけイカこやか

はなるるほどのまぎれに御車よす。この人をえいだき給ふまじけれジブン 寄 夕顔 △源ハ 抱

ば、うはむしろにおしくみて、惟光のせ奉る。いとささやかにて、上 席 ツツミ △車二 細 小

うとましげもなくらうたげなり。したたかにしもえせねば、かみは疎 アイラシゲ シツカリトモ 髪

こぼれ出たるも、めくれまどひてあさまじうかなしとおぼせば、な△車ノ外△ 目クラミ メツサウニ 葬

はや御馬にて云々

〔**釈**語脈、点のごとし。

右近をそへてのすれば

〔**玉**此「れば」といふ詞、下にかかる所なし。 いかが。

〔**釈**げに誤脱あるべく見えたり。 ればの二もじ、しばらく仮に省きつ。

此所一本に、「かちより、君に馬は奉りて、くくり引あげなどして、か

つは云々」とあり。 いづれにしてもみだれたるなるべし。

くくりひきあげ

〔**釈**さしぬきの裾スズのくくりといへるかた、よろし。

御けしきのいみじきを

〔**釈**源氏君の御なげきのいみじきを見奉れば、いとほしくて、我身をす

ててならはぬおくりつかうまつるさま也。

御帳

〔**釈**和名抄「釈名云、帳マツ、猪高反此間音長、張也。施張於床上也云。

などてのりそひてゆかざりつらん云々

〔**釈**同車にてゆくべかりしものを、などてゆかざりつらん、もし生かへりたらば、心ざしの浅かりしと思はん、と思ひ給ふを、「いかなる心ちせん」といへるなり。これを夕顔の心と見たる注はわろし。「見すてていきわかれにけり、とつらくや思はん」とあるが、夕顔の心を思ひやり給へるなり。

御ぐしもいたく云々

〔**湖**頭痛熱気など、夕顔の愁傷のみならず、もののけの心もあるにや。

〔**釈**下に物のけのなごりにて煩ひ給ふ事をいはんとて、ここに先ツかく打いでておく也。事をにはかにせぬ筆つかひ思ふべし。

おほいとの君たちあまた

〔**玉補**此上にとてといふ詞あるべし。 おちたるならん。

〔**釈**さもあるべし。

〔**玉**これすなはち、内よりの御使に参り給へる也。 下に「さらばさるよしをこそ奏し侍らめ」とあるにてしらる。

たちながらこなたに

〔**釈**穢にふれ給へる故に、人を座せしめず立せながら簾スリごしにものの給ふ也。この下に「けがらひありとのたまひて、まゐる人々も、みなたちながらまマづれば」とあるにて知られたり。

りはてんさまを見んとおぼせど、はや御馬にて二条院へおはしまさリりリ竟ルサマ也② ＊惟光詞

なん。 人さわがしくなり侍らぬほどに、とて右近をそへてのす。＊ ウチ △夕顔二 乗

△夜アケテ

れば君に馬は奉りて、われはかちよりくくりひきあげなどして出イを ＊ 惟光 歩行 指貫ノ括也 引上

たつ。 かつはいとあやしくおぼえぬおくりなれど、御けしきのいみ＊ 半分ハ オモヒガケナキノベオクリ △源ノ オキノ

じきを見奉れば、身をすててゆくに、君はものもおぼえ給はず、わウ ドクナ

れかのさまにておはしつきたり。 人々いつこよりおはしますにか、湖 二条院の人々也 △二条院へ 着 カヘリ

ツツトモナキ

なやましげに見えさせ給ふなどいへど、御帳のうちにいり給ひて、＊ 源心 △源ノ

御不例サウニ

むねをおさへて、思ふにいとみじければ、などてのりそひてゆかイ ＊ 源心 △源ノ ナニトテ△車二 △ハ往

胸 押

ざりつらん。 いきかへりたらむ時、いかなるこちせん。 見すてて△夕顔ノ 誕生

いきわかれにけり、とつらくや思はん、とこころまどひの中にもお往 別 ナサケナク

ぼすに、御むねせきあぐるこちし給ふ。 御ぐしもいたく、身もあイ給て ＊ 胸 コミアゲル 頭 痛

つき心ちして、いとくるしくまどはれ給へば、かくはかなくて、わ熱 苦 惑 乱 ワヅラヒ

れもいたづらになりぬるなめり、とおぼす『日たかくなれど、おきムナシク ン ＊ 起

あがり給はねば、人々あやしがりて、御かゆなどそそのかし聞ゆれ上 ＊ フシギ 粥 ススメ

ど、くるしくて、いと心ぼそくおぼさるるに、内より御つかひあり。禁裏 使

きのふもえたづね出奉らざりしより、おぼつかながらせ給ふ。 おほ昨日 玉補とて＊ △帝ノ 左大

い殿の君たちあまたまあり給へど、頭中将ばかりを、たちながらこイあまたナシ ＊ 立 此

なたに入給へとのたまひて、みすのうちながらの給ふ。 めのどにて方 御簾 内 源詞 乳母

侍るものの、この五月ころほひより、おもくわづらひ侍りしが、かサツキ 重病

しらそりいむことうけなどして、そのしるしにやよみがへりたりし頭 刺 戒 受 験 蘇 生

えいであへで

〔孟〕家内を出さずして也。

〔釈〕案に、一本に「いきあへで」とあるかたよろし。

おちはばかりて

〔湖〕源氏のゐ給ふにより、それをばかりて日を暮して遅く出したる、と也。

聞つけ侍しかば

〔湖〕源の聞給はぬは大事なけれども、聞つけ給ふ故穢れたり、と也。

〔釈〕「大事なけれども」といへるはよろし。聞ぬはせんすべなきにこそあれ。神事なる比は

〔花〕夕顔上のうせ侍る事は、八月十六日の事也。九月は齋月にて、一日より御神事なり。三千ヶ日の穢にふれ給ふによりて、参内かなふまじき事也。

しはぶきやみ

余和名抄「病源論云、嗽嗽、之波不岐、肺寒則成也」。

〔河〕遊仙窟十「娘曰、兄近来患嗽、声音不徹」。

〔釈〕今いふ風邪の事也。

いとむらいにて

〔細〕簾をへだてて申は無礼と頭中将に会釈をし給ふ也。

かしこくもとめ奉らせ給ひて

〔玉〕或抄に「かたじけなく也」といへる、よろし。

〔釈〕恐多くといふ意也。

たちかへり

〔湖〕師是頭中将勅使に来ての心入、尤なり。源の内へ参らぬよしをの給ふ其由は天子へ申さん、といひて立て、さて立かへりてわがざれごとはの給ふ也。

いきぶれ

〔万〕行ふれ也。何としたるけからはしき事に行あひ給ふぞや、と也。

〔釈〕行触、体言也。行ぶれの穢といふ意なり。故に「かからせ」といへり。むね打つぶれ給ひて

〔釈〕いひあてられて、はつと肝の潰れたるさまなり。かくこまかにはあらで云々

〔釈〕中将にいひあてられ給へる故に、しかこまかにいひても中々にわろかめりとおぼしていひ直し給ふさまを、いとよくかかれたり。心を付て見るべし。

いどこそたいだいしく

〔釈〕此詞は上にも見えたり。怠々の音といへる説、まづはよろし。ここは緩怠らしくとのたまふ意にて、委しくは帝へ対して却て緩怠らしく聞えんとの心なるべし。旧注たしかなる説どもなし。

つれなく

〔釈〕さりげなく也。

蔵人の弁を

〔釈〕頭中将は疑ひ戯れて実ともし給はねば、ただ大かたを奏し給へといひて、さてもろともに来給へる蔵人の弁を召て、かさねて委しく勅答し給ふさまなり。情景、いといとくはしくめでたし。「まめやか」といふ詞に心をつくべし。

おほい殿などにも云々

〔評〕しかあるべき情景、いといとくはし。

かかるけがらひありとの給ひて

〔評〕惟光と密に事を語り給はん料に、先ッ人少きよしをことわりおく也。かへすがへすくはし。

を、このごろ又おこりて、よわくなんなりにたる。今ひとたびとぶ

らひ見よと申たりしかば、いときなきよりなづさひしものの、いま

はのきざみにつらしと思はん、と思ひ給へてまかれりしに、その

家なりけるしも人のやまひしけるが、にはかにえいきあへで、なく

なりにけるを、おぢはばかりて、日をくらしてなんとり出侍りける

を、ききつけ侍りしかば、神事なる比は、いとふびんなることと思

ひ給へかしこまりて、えまゐらぬなり。このあかつきより、しはぶ

きやみにや侍らん、かしらいといたくてくるしく侍れば、いとむら

いにて聞ゆることなどの給ふ。中将さらばさるよしをこそ奏し侍ら

め。よべも御あそびに、かしこくもとめ奉らせ給ひて、御けしきあ

しく侍りき、と聞え給ひて、たちかへり、いかなるいきぶれにかか

らせ給ふぞや。のべやらせ給ふ事こそ、まこととも思ひ給へられね、

といふに、むねうちつぶれ給ひて、かくこまかにはあらで、ただお

ぼえぬけがらひにふれたるよしをそうし給へ。いどこそたいだいし

く侍れ、とつれなくの給へど、心のうちには、いふかひなくかなし

きことをおぼすに、御心ちもなやましなければ、人にめも見あはせ給

はず。蔵人の弁をめしよせて、まめやかにかかるよしをそうせさせ

給ふ。大殿などにも、かかる事ありてえ参らぬ御せうそなど聞え

給ふ『日くれて惟光まゐれり。かかるけがらひありとのたまひて、

参る人々も、みなたちながらまかつれば、人しげからず。めしよせ

今はと見はてつや

湖もはや蘇生あらじと見はてたるかと也。

ながながとこもり侍らんも

〔釈〕「こもり」とは、ひんがしの尼が住所に夕顔の屍をこめておく事也。長くこもりあらんも便なければ、明日葬をせんといふ也。日よろしく侍れば

〔釈〕日からも相応なれば、と也。葬、日の吉凶をいひし事、そのかみはやくありしと見えたり。陰陽師などの説なるべし。

とかくの事

〔釈〕ともしかくもする葬礼の事也。「とかく」などまぎらはしていふは、葬といふ事を忘てるべし。

あひしりて

〔釈〕惟光と相識て也。

けさは谷にもおち入ぬべく

〔花〕右近、かなしみのあまりに谷に身をもなげんの心也。

〔河〕世中のうきたびごとに身をなげばふかき谷こそあさくなりなめ古今俳諧

かのふるさとの人に

〔細〕右近は彼宿へも此よしを告やらんと申す也。

〔釈〕一本のものなし。

このさま思ひめぐらして

〔釈〕右近は告やらんといふを、しばらく思ひしづまれよ、事のさまをよくよく思案して告やるべしと、惟光がこしらへおきたり、といふ也。さるは、ありのままにいひやらば、彼女房などの悲しみまどひ疑ひて、源氏君の御ためによからぬ事も出来んかとの用意なるべし。

こしらへ

拾 諭日本紀

いかなるべきにか

湖御命もあやふきと也。

なにかさらに云々

〔釈〕今更に何かさほどに思しめし給ふべき、これも然るべき前世の宿因にこそ侍らめ、といふ意也。『さるべき』とは、然あるべき宿因といふ事なること、前後に例多し。さて『給ふ』の下にべきの辞、脱たるか。かくても聞ゆれど、少しいかにぞや聞ゆ。語脈は点のごとし。

人にももらさじと云々

〔釈〕此事を人に聞せじと思へば、惟光みづから葬の事をとりて万事をとりまかなひ侍る、といふ也。

さかしさみな思ひなせど

〔釈〕「さかし」は「然かし」にて、かしは辞なり。「さみな思ひなす」とは、「さるべきにこそ、万の事侍らめ」といへるをうけて、さやうに万事は皆宿因ぞとおもひなせど、といふ意也。うかびたる心のすさびに

〔釈〕「うかび」は、おもおもしろからずしてかろく浮てただよはしき意也。俗に「うはうはしたり」などいはんがごとし。さて、しかうかびたる心のすさびに人をむなしくし給へりなど、人のかごとをおはんがからき、と也。「かごと」は、物によそへて恨をのぶることにて、彼夕顔のやどの女房をはじめて、此尼君などのいさめまでにわたりて聞えたり。さらぬ法師ばらなどにも云々

〔釈〕「少将の命婦などにも云々」との給ふをうけて、それは勿論の事也、さはあらぬ葬所の法師ばらなどにも、みなありさまを異にいひなして、源氏君の御名をたてぬやうにはからひたり、といふ意也。「法師ばら」のばらは、「殿ばら」などいふばらにひとしく、群たる意の言と聞ゆ。かり給へる

細 ながさむ心なり。

〔巴〕霜がれの草のどぎしのさびしさも霞にかかる春の山ざと。定家卿の歌也。此「かかる」といへる、同じ心なり。

新 それによりかかりて有をいふ。「子にかかり人にかかりて」などいふも是なり。

〔釈〕右の説の中に、新釈は少しいかが。これは拘はる義也。上に「いかなるべきにかとなおぼゆる」との給ひしを結びてかやうに申すにかかはりて命をとりとめ給ふ、といふ意なるべし。

て、いかにぞいまはと見はてつや、との給ふままに、袖を御顔にお

しあててなき給ふ。これみつもなくな、今はかぎりニコそは物し

給ふめれ。ながながとこもり侍らんもびんなきを、あすなん日よろ

しく侍れば、とかくの事、いとたふとき老僧のあひしりて侍るに、

いひかたらひつけ侍りぬると聞ゆ。そひたりつる女はいかに、との

給へば、それなんまたえいくまじう侍るめる。われもおくれじとま

どひ侍りて、けさは谷にもおちいりぬべくなん見給へつる。かのふ

るさとの人に、つげやらんと申せど、しばし思ひしづめよ。事のさ

ま思ひめぐらして、となんこしらへおき侍りつる、とかたり聞ゆる

ままに、いといみじとおぼして、われもいと心ちなやましく、いか

なるべきにかとなおぼゆる、とのたまふ。なにか、さらにおもほ

し物をさせ給ふ。さるべきにこそ、よろづのこと侍らめ。人にもも

らさじと思ひ給ふれば、惟光おりたちて、よろづはものし侍るなど

申す。さかし。さみな思ひなせど、うかびたる心のすさびに、人を

いたづらになしつる、かごとおひぬべきがいとからきなり。少将の

命婦などにもきかすな。尼君ましてかやうのことなどいさめらるる

を、はづかしくなんおぼゆべき、とくちがため給ふ。さらぬほうし

ばらなどにも、みないひなすさまことに侍り、と聞ゆるにぞかかり

給へる。ほのきく女房など、あやしく何事ならん。けがらひのよし

の給ひて、内にも参り給はず。またかくささめきなげき給ふ、とほ

大とこ

〔河〕肅宗、制、天下名山置大徳七人。

〔潮〕行功のつもりたるをいふ也。

涙のこりなく

〔釈〕所のさまのいとあはれなるに、たふとげなる声に経よみたるを聞給ひて、かなしきの心に感じて涙の多く出る也。

火とりそむけて

〔釈〕或抄云、死人の方へは灯をむけずして、そむくるもの也。

〔玉〕「源氏の御出によりて」といふ注はいかが。

うこんは屏風へだてて

〔細〕夕顔上と屏風へだてて也。

むかしのちぎり

〔釈〕昔の世の契といふ意にて、かの宿縁の事也。

たれとはしらぬに

〔釈〕「源氏君をも夕顔上をも誰とはしらぬに」といふ注、よろし。誰とはしらず、あやしとは思へど、事がらのあはれなる故にみなみなもらひなきをしたる也。

かなしき事をばさる物にて
〔玉〕かなしき事はいふもさらなれば、それはそれにて、といふ意也。すべて「さるものにて」といふ詞は皆しかり。
人にいひさわがれ侍らんが
〔潮〕右近がしわざといはん、と也。
けふりにたぐひて
〔釈〕火葬の煙にたぐひて右近も夕顔をしたひゆかん、といふ也。
さなん世中はある

〔玉〕世中といふ物は、さやうに頼みに思ふ人に思ひかけず俄に別るるやうの事、つねにおほくあるならひぞ、と也。そもそも此所の源氏君の語はすべて、右近が、夕顔上のはかに非業なるがごとくにてうせられたる事を、殊にふかくなげくを、なぐさめんとてのたまへるなれば、其心を得て解べき也。
わかれといふものの

〔玉〕たとへば年老て後、よのつねのごと病て死ぬるわかれなどにも、かなしきは同じ事にて、すべて別れにかなしからざるわかれはなければ、夕顔の事をもさのみ殊にと思ひそ、と也云々。
とあるもかかるも

〔玉〕よのつねのやうに病して死るなども、又夕顔のごとく思ひかけぬ事にて俄に死るも、その別れのやうはさまざまかはれども、いづれもみな定まれる命のかぎりある物にて別るるなれば、畢竟は同じことぞ、と也。
われをたのめ

〔釈〕我をたのみにして仕へよ、との意也。
かくいふわが身こそは云々

〔評〕上よりいとせちなるかなしひのさまをつくして、つひに右近がうへに及び、それをなぐさめ給ふとて源氏君の喩へ給ふ事をいひて結び終りたるを、又まきほぐしてこの二三句を書添られたる、さらにかなしきのわき出たるこちして、いはんかたなき余情あり。かへすがへすもいみじき文かきなるかな。
これみつ云々

〔評〕上に「よふけぬさきにはやかへらせおはしませ」と有。

おほく見えて、人のけはひもしげかりける。このあまぎみのこなる

大とこの、こゑたふとくて経うちよみたるに、涙のこりなくおぼさ

る。いり給へれば、火とりそむけて、右近は屏風へだててふしたり。

いかにわびしからんと見給ふ。おそろしきけもおぼえず、いとらう

たげなるさまして、まだいささかかはりたるところなし。てをとら

へて、我に今一たびこゑをだにきかせ給へ。いかなるむかしの契に

かありけん。しばしのほどに心をつくして、あはれにおもほえしを、

うちすててまどはし給ふがいみじきこと、と声をしまずなきたま

ふ事かぎりなし。大とこたちも誰とはしらぬに、あやしと思ひて、

みな涙おとしけり。うこんをば、いぎ二条院へとの給へど、年ごろ

をさなく侍りしより、かたとき立はなれ奉らず、なれ聞えつる人に、

にはかにわかれ奉りて、いづこにかかへり侍らん。いかになり給ひ

にきとか人にもいひ侍らん。かなしき事をばさるものにて、人にい

ひさわがれ侍らんがいみじきこと、といひて、なきまどひて、煙に

たぐひてしたひまゐりなんといふ。ことわりなれど、さなん世中は

ある。わかれといふもののかなしからぬはなし。とあるもかかるも、

おなじいのちのかぎりあるものになんある。思ひなぐさめてわれを

たのめ、との給ひこしらへても、かくいふ我身こそは、いきとまる

まじきこちすれ、との給ふもたのもしげなしや。惟光、夜はあけ

がたになり侍ぬらん。はやかへらせ給ひなんと聞ゆれば、かへり見

いとどしき朝ぎり

湖師 たださへ心まどひの折ふしに、いとど霧に途方を失ふこちし給ふ也。

ありながら

釈 夕顔の屍の在世のままにて打ふしたりつるを思ひ出給ふ也。うちかはし給へりし

玉 すべて「かはす」とは、たがひに相交ふるをいひて、衣を打かはすは、寝たる時男女たがひにうちかけまじへきる也。さればこは、河原院にて夕顔と寝給ひたりし時、たがひにまじへ給へりし源氏君の御衣の、夕顔の死骸の方につきて、そのままにてあるを見給へる也。「きられたりつる」といふも、たしかに着たるにはあらず、おのづから死骸にまつはれて、着たるやうにてある也。

評 この事がら、いといとかなしくして、虎狼もなきつべし。

つみのほごにて

拾兼輔を堤の中納言といひ、大和物語に「監命婦のつつみなる家をうりて」とあり。所の名なり。

かかる道の空にてはぶれぬべき

釈 「道のそら」は、途中といはんがごとし。「空」は、かかる所なきものなれば、此方へも彼方へもつかぬ間の事を「空」といへるなり。「はぶれ」は、溢と同じ言にて、在所を放れてただよひゆく事にいへり。水の溢るといふも、堤をこえて他へゆくにて思ふべし。こは、源氏君かなしひの余りに、途中にてゆくへなくあぶるるやうにおぼえ給ふ意也。諸注くだくだしくして、げにと覺ゆるもなし。

わがはかばかしくは

釈 湖月抄の頭書に引たる文には「わが身」とありて、細流にも「わが身はかばかしくは、此御出をも諫め申てとどむべき物を、と惟光が後悔也」と有。然らば、もとは「わが身」とありけんを、写しおとせるなるべし。「身」もじなくてはいかが也。

さのたまふとも

釈 今一たび屍を見にゆかんとしたまふとも、也。

川の水にて手をあらひて

釈 観音を念ずるとて手を洗ひ清めたる也。諸抄に古き文ども引れたれど、いたづら也。さて「清水の観音」は、其頃靈験いちじるくいへるに、けふ其縁日なればとり出たる也。上に「清水のかたぞ、光おほく見えて」といへる脈に心をつくべし。

人々見るしきわざかな

釈 「人々」は、二条院の女房たちなどなるべし。「見るしき」は、見て苦しとするかたにて、笑止などいふに近し。

きのふの御けしきの

釈 きのふ悩ましくし給ひし御けしきなりしに、かくしのびありきし給ふはいかなる事ぞとなげきあへる也。

まことにふし給ひぬるまに

湖師 昨日まではさのみわづらひ給ふ事はなし、物思ひ又はけがらひにふれ給へるをまぎらさんとの御わづらひなりしが、けふは真実になづらひ給ふ、と也。

釈 「わづらひ給ふ事はなし」といへるはわろし。きのふもなやましくし給ひし事、上に見えたり。其外は此説のごとし。

玉 「まことに」は、「くるしがり給ふ」へかかる意也。

よわるやうに

釈 すべて「よわる」といふ詞は、衰弱して頼ずくなくなるやうの意につかひたる例也。上下同じ。

まつりはらへ

玉 此ごろ病のいのりなどに「祭祓」といふことおほく見えたるは、陰陽家のおこなふわざ也。

のみせられて、むねもつとふたがりて出給ふ。みちいと露けきに、

いとどしき朝霧に、いづこともなくまどふこちし給ふ。ありしな

がらうちふしたりつるさま、うちかはし給へりし、わがくれなゐの

御そのきられたりつるなど、いかなりけんちぎりにか、と道すがら

おぼさる。御馬にもはかばかしくのり給ふまじき御さまなれば、ま

た惟光そひたすけて、おはしまさするに、つつみのほどにて、馬よ

りすべりおりて、いみじく御こちまどひければ、かかるみちの空

にてはぶれぬべきにやあらん。さらにえいきつくまじき心ちなんす

る、との給ふに、これみつもこちまどひて、わが身はかばかし

くは、さの給ふとも、かかる道にゐて出奉るべきかは、とおもふに、

いと心あわたたしければ、川の水にて手をあらひて、清水の観音を

ねんじ奉りても、すべなく思ひまどふ。君もしひて御心をおこして、

心のうちに仏をねんじ給ひて、又とかくたすけられ給ひてなん、二

条院へかへり給ひける。あやしう夜ふかき御ありきを、人々みぐる

しきわざかな。このごろ例よりも、しづかなき御しのびありきのう

ちしきるなにも、きのふの御けしきの、いとなやましうおぼした

りしには、いかでかくたどりありき給ふらん、となげきあへり。ま

ことにふし給ひぬるまに、いといたうくるしがり給ひて、二三日

になりぬるに、むげによわるやうにし給ふ。内にもきこしめしなげ

くことかぎりなし。御いのりかたがたにひまなくののしる。まつり

六五

世にたぐひなく云々

〔**釈**〕源氏君、世にたぐひなく何事もめでたくおはします故に、却て短命にやあらんと、天下の人のをしみさわぐこと也。あまりにたらひたる人は命短きもの也と、今の諺にもいふこと也。

くるしき御心ちにも云々

〔**釈**〕苦しき御こころの中にも、夕顔のかたみとおぼして右近をめしよせて、局を給ひて御座近くさしおき給ふなり。

惟光こちもさわきまどへど云々

〔**釈**〕これみつ、源氏の御病にこちも騒きまどへど、右近がたつきなきを助けてありつかするなり。

まじらひつきたり

〔**釈**〕右近、二条院の人々に交りて、をり合たる意也。

ぶくいとくろうして

〔**細**〕服衣の色深き也。説々あり。不可用之歟。

〔**釈**〕夕顔上のために、右近凶服をきたる也。凶服を着てはえなきうへに、かたちもよからねど、見ぐるしからぬ若人也、といふ意也。

としごろのたのみうしなひて云々

〔**釈**〕右近夕顔上を年ごろたのみてつかへしを、其頼とする人を失ひて、さぞ心細く思ふらん、其なぐさめに、われもしながらへば、万事につけて汝を養育せんと思ひしを、ほどもなく我も夕顔と共に死ぬべく思ふが

くちをし、といふ意也。「たちそひぬべき」とは、火葬の煙にたちそふべきと云意をはぶきていへる也。上に右近が「煙にたぐひて」といへるに同じ。かく省きてもしか聞ゆるは、此頃常にいひならへる詞なる故なるべし。

いふかひなき事をばおきて

〔**釈**〕旧注に「夕顔の上の事をば置いて」といへるはたがへり。これは「よろづにはぐくまん」との給へるをうけて、はぐくむ人なくなつたのみがひなき事をばさしおきて、まのあたり源氏君のむなしくなり給はん事を惜く思ふ、といふ意也。「なき給へば」とあるばもじをあぢはふべし。

あしをそらにて

〔**釈**〕俗言に「足をさかしにして」といふにあたりて、奔走にいとまなきたとへの語也。拾遺に万葉集の歌どもを挙て類例としたるは、「心の」空なる例にて、ここにはいかが。

あめのあしよりもげにしけし

〔**拾**〕兼盛集に、君を思ふ数にしとらばをやみなくふりそふ雨のあしはものかは。文章にも、しげき事には「雨のごとし」「林のごとし」などいへり。

〔**河**〕しげき事をば「如「雨脚」と詩にも作れり。

〔**釈**〕「けに」は「異に」也。旧注に「まさりて也」といへり。

つよくおほしなる

〔**釈**〕しひて心づよく思ひかへして、みづからつとめ給ふ也。

けいめいし給ひて

〔**玉**〕経営也。俗言にていはば「きつう御せわをし給ふ」といふこと也云々。さまざまの事を

〔**湖**〕祈祷修法など也。

ことなるなり

〔**釈**〕「ことなる」は、例に異なるにて、即異例也。「なごり」は、其病の余波也。「おこたり」は、病の怠るにて、快氣の事也。

けがらひいみ給ひしも云々

〔**釈**〕死穢を忘給ひしも、快氣し給ふ日も、ひとつに満竟たる夜なれば、といふ意也。湖月に「夕顔の死給ふは八月十六日なり。然ばこは九月十六日か十七日の比なるべし」といへり。

〔**玉**〕「よ」は「夜」也。「内の御とのる所に参り給ふ」といふへかけていへる也。「世」と心得たるはひがこと也。

はらへずほうなど、いひつくすべくもあらず。世にたぐひなくゆゆ〔**修**〕法

しき御ありさまなれば、世になかくおはしますまじきにや、とあめ〔**天**〕

のしたの人のさわきなり〔**水**〕源くるしき御心ちにも、かの右近をめしよ〔**下**〕

せて、つばねなどちかく給はりてさふらはせ給ふ。惟光こちもさ〔**局**〕

わきまどへど、思ひのどめて、この人のたつきなしと思ひたるを、〔**騒**〕惑

もてなしたすけつつさふらはす。君はいささか隙ありておぼさるる〔**マ**〕カナヒ〔**ナ**〕グサメ〔**助**〕侍

時は、めしいでてつかひなどし給へば、ほどもなくまじらひつきたり。〔**使**〕

ぶくいとくろうして、かたちなどよからねど、かたはに見ぐるしか〔**服**〕

らぬわかうどなり。あやしうみじかかりける御契にひかされて、我〔**源**〕詞

も世にえあるまじきなめり。年ごろのたのみうしなひて、心ぼそく〔**在**〕

思ふらん。なぐさめにも、もしながらへば、よろづにはぐくまんと〔**命**〕

こそ思ひしか。ほどもなくまたたちそひぬべきが、くちをしくもあ〔**問**〕

るべきかな、としのびやかにの給ひて、よわげになき給へば、いふ〔**弱**〕

かひなきことをばおきて、いみじうをしとおもひきこゆ〔**殿**〕とのう〔**サ**〕シオキテ

ちの人、あしをそらにておもひまどふ。うちより御つかひ雨のあし〔**足**〕

よりもけにしげし。おぼしなげきおはしますをきき給ふに、いとか〔**帝**〕

たじけなくて、せめてつよくおぼしなる。大殿もいみじくけいめい〔**シ**〕ヒテ

し給ひて、日々にわたり給ひつつ、さまざまの事をせさせ給ふしる〔**二**〕条院

しにや、二十日あまりいとおもくわづらひ給へれど、ことなるなご〔**イ**〕二十日

りのこらず、おこたりざまに見え給ふ。けがらひいみ給ひしも、ひ〔**ガ**〕タ

わが御車にて

〔孟〕内より致仕大臣の同車也。

〔細〕葵上の御方にとどめ置奉らるる也。

御物いみなやかやと

〔評〕舅君の情を見るがごとくうつされたり。「むつかしう」といへる、殊にめでたし。こは若き源氏君の心になりていへるなり。

おこたりはて

〔釈〕全快し給ふ也。

ながめがちに

〔釈〕夕顔の事を思しいでて、物おもはしく空をながめがちに、しのびしのびなき給ふさま也。

御物のけなめり

〔釈〕「もののけ」とは、鬼物の氣キの人の身に入て、さまざま怪アヤしき事いふ類ひの事をいへり。他にしらせずひとりねをなき給ふを見て、御もののけならんと人々の評する也。

あまの子なりとも

〔孟〕これは前に「蟹の子なれば」といひし事を思ひ出給ふ也。

〔湖師〕たとひまことにあまの子にて、宿もさだめず賤しき人なりとも、也。さばかり思ふをしらず

〔玉〕「しらで」は、俗言に、とんちやくせずかまはぬ、といふ意也。すべて雅言には「しらず」といふに、其意なるおほし。心得おくべし。つねにいふ「しらず」の意にしては、聞えぬ所おほきぞかし。

いつのほどにてかは

〔湖〕いつの間にかさやうの俗姓などまで顕はし給はんずるぞ、と也。なにならぬ

〔釈〕何ばかりにもあらぬいやしき名を告ツ給はん、といふ意也。源氏君に對して、おのが主のうへを卑下したる詞也。

あやしうおぼえぬさま

〔釈〕はじめより名をも告ずして逢参らせたるがあやしき也。うつつともおぼえず夢のやうなり、との意也。

御名がくしも云々

〔湖師〕此「御名がくし」とは、源の事をいふなり云々。

〔玉〕「聞え給ひながら」は、夕顔のおしはかりて、源氏君ならん、それゆゑにかかる小屋に通ひ給ふ事をつましくおぼして、名をば顕し給はぬにこそあらめと、詞には申給ひながらも、心の内にはうきことにおぼしたりし、と語る也。

〔釈〕「なほざりに」は、夕顔をなほざりにおぼす故に、名をあらはさずまぎらはし給ふ、といふ意也。猶余釈に云。

心くらへ

〔釈〕互に名をあらはさじとしたる事を、「心くらへ」とはの給へる也。「心くらへ」は、心に思ふすぢをたてあひて、まけじとするをいへり。

人にゆるされぬふるまひ

〔細〕しのびありきの事也。

ならはぬ事なる

〔釈〕此下にに・をなどのもじおちたるか。

ところせつ

〔釈〕源氏君の御身の重き故に、他よりも重々しくとりなして、軽々しき御ふるまひのなりがたきを「所狭トコロセ」といへる也。

とつにみちぬるよなれば、おぼつかながらせ給ふ御心わりなくて、

満

夜

△帝ノ

ヨギナク

内の御とのみどころに参り給ひなです。大殿わが御くるまにて、む

宿直所

車

迎

かへ奉り給ひて、御物いみなにやかやと、むつかしうつつしませ奉

*

ワヅラハシウ

令

慎

り給ふ。われにもあらず、あらぬよにかへりたるやうに、しばしは

ワガココロデモナク

世

△イ主

おぼえ給ふ。九月二十日のほどにぞおこたりはて給ひて、いといた

ナガツキ

□*

うおもやせ給へれど、なかなかいみじうなまめかしうて、ながめが

面

瘦

カヘツテ

*

モノオモヒ

ちにねをのみなき給ふ。見奉りとがむる人もありて、御もののけな

哭

泣

答

怪

めりなどいふもあり『右近をめしいでて、のどやかなる夕ぐれに、

細ここよりは
二茶院にての事也

ココロシツカ

物がたりなどし給ひて、猶いとなんあやしき。などてその人としら

ナニトテナニビトトモ

れじとは、かくい給へりしぞ。まことにあまのこなりとも、さば

イセ

マイ

隠

実

*

アレホ

かりに思ふをしらずで、へだて給ひしかばなんつらかりし、との給へ

ドマデニ

隔心シ

ば、などてかふかくくし聞え給ふことは侍らん。いつのほどにて

右近詞

隠

*

ジブン

かは、なにならぬ御なのりを聞え給はん。はじめよりあやしうおぼ

*

ナンデモナイ

名告

最初

フシギニ

思ヒガ

えぬさまなりし御ことなれば、うつつともおぼえずなんある、との

ケモノイ

現

給ひて、御名がくしもさばかりにこそは、と聞え給ひながら、なほ

隠

源ホドノ人

△アラセ

ざりにこそまぎらはし給ふらめ、となんうき事におぼしたりし、と

△思ヒテ

ツライ

聞ゆれば、あいなかりける心くらべどもかな。われはしかへだつる

源詞

□*

競

サヤウニ

こころもなかりき。ただかやうに人にゆるされぬふるまひをなん、

*

免

行跡

まだならはぬことなる。うちにいさめの給はするをはじめ、つつむ

シナレヌ

内裡

禁

△ソノホカ

包

事おほかる身にて、はかなく人にたはぶれごとをいふも、ところせ

ツイチヨット

戯

言

*

タイサウニ

はかなかりしゆふへ

〔**釈**〕かの夕顔をりつる夕より逢そめて、後の事までをかねいふ也。

あはれになん又打かへし云々

〔**釈**〕あはれにおぼゆる中に、又打かへしつらくも覺ゆ、といふ意也。語脈、点のごとし。よく味はふべし。

あはれとおぼえ給ひけん

〔**玉**〕これはみづからの事なれば、「給ひ」といふ言いかがるごとく聞ゆれども、然らず。すべて「おぼえ」は「思はれ」といふ言にて、其中に人に思はるる意なるあり。こゝもそれにて、夕顔の我にあはれと思はれ給ひけん、といふ意なる故に、「給ひ」は夕顔へかかれり。

七日七日の仏かかせても

〔**湖師**〕これ十三仏を七日の間にあてて書て、亡者の為に供養する事也。

〔**釈**〕或抄に、「忘仏とて、七日七日の本尊を絵にかき、又は木像に作りて供養する事也」といへり。

心のうちにも

〔**評**〕夕顔の事は、密事にてあらはにする事ならねば「心の中にも」といへるにて、俗にいふ、かゆき所へ手のとどくといふべき文勢也。

おやたちは

〔**細**〕こゝより語り出す也。

わが身のほどの云々

〔**湖師**〕夕顔をいとはしく思ひ給ひて、よき縁にもと思ひ給へりしかど、位のほどのあさき故心のままならぬをおぼしたる其上に、命さへはかなくなり給ひし、と也。

〔**釈**〕「心もとなさ」は、身の分限のはかばかしからぬ故に、行末のおぼつかなき意也。

三とせばかり

〔**新**〕頭中将三年かよひ給ふ。二年めに玉かづらの君生れ、三年めにうき事ありて外へかくれ、四年めに源のかよひ給へり。此次の年、玉かづらの四つなるを筑紫へゐてゆく。

こそ秋の比

〔**細**〕「嵐ふきそふ秋もきにけり」の歌のころ也。

右のおほい殿

〔**釈**〕頭中将の北方、四君の御父なり。物のたよりにつけておとし給へる事、帚木にも見えたり。

御めのとの

〔**細**〕揚名介が妻也。

ことしより

〔**釈**〕よに三年塞りなどいふ方なるべし。「今年より」といふにてしか聞ゆ。

たがふとて

〔**細**〕方違への為に此五条なる家へ出給ふなり。

おほしなげくめりし

〔**玉**〕「めりし」といふ、てにをは調はず。かならず誤有べし。

うとりなし、うるさき身のありさまになんあるを、[＊]はかなかりしゆ

メイワクナ

フトシタコトノ

ふべより、あやしう心にかかりて、あながちに見奉りしも、[＊]かかる

フシギニ

ムリヤリニアヒ

如此有

べき契にこそはものし給ひけめ、とおもふもあはれになん、[＊]またう

宿縁

タ

ちかへしつらうおぼゆる。[＊]かうながかるまじきにては、[＊]なごさしも

チカヘリツレナウ

長

心にしみて、あはれとおぼえ給ひけん。[＊]なほくはしうかたれ。今は

△ワラ

染

オモハレ

マタモ

語

なにごとをかくすべきぞ。七日七日の仏かかせても、[＊]たがためとか

△ワラ

染

オモハレ

マタモ

語

心のうちにもおもはん、との給へば、[＊]なにかはへだて聞えさせ侍ら

△ワラ

染

オモハレ

マタモ

語

ん。みづからしのびすぐし給ひし事を、[＊]なき御うしろにくちさがな

△夕顔

カクシ

過

亡

ノチ

口

アツカマ

くやは、と思ひ給ふるばかりになん。[＊]おやたちはやううせ給ひにき。

シク

△アラハサ

マデ

亡

三位中将となん聞えし、[＊]いとらうたきものにおもひ聞え給へりしか

湖夕顔の父也

△ガ

カハユキ

△夕顔ヲ

ど、我身のほどの心もとなさをおぼすめりしに、いのちさへたへ給

分限

オボツカナサ

マデ

コラヘ

タモチ

はずなりにし後、はかなき物のたよりにて、[＊]頭中将まだ少将にもの

フトシタコト

ビンギ

し給ひし時、見そめ奉らせ給ひて、[＊]三年ばかりはこころざしあるさ

△夕顔ヲ

まにかよひ給ひしを、[＊]こそ秋の頃、かの右の大殿より、いとおそ

＊イ右大臣殿イ

ろしきことの聞えまうでこしに、物おぢをわりなくし給ひし御心に、[＊]

＊

オツレ

メツタニ

せんかたなうおぼしおぢて、にしの京に、[＊]御めのとのすみ侍る所に

オツレ

西

乳

母

住

なん、はひかくれ給へりし。[＊]それもいと見ぐるしきにすみわび給ひ

ヒツカニ

住

て、山里にうつろひなんとおぼしたりしを、[＊]ことしよりはふたがり

移

今年

塞

たるかたに侍りければ、[＊]たがふとて、あやしき所に物し給ひしを、

方

違

五条ノ宿也

ヤドリ

見あらはされ奉りぬること、とおぼしなげくめりし。よの人にならず、[＊]

△源二

給ふめりしかと

〔玉〕「しか」といふ詞、上にこそといふ言なくていかが。かもじけづるべきか。もししかといはば、上を「つれなくのみもてなしてこそ」と有べし。

〔釈案に、かもじをけづりたりとも、上になんの辞なくては、しもじにかなひがたし。されば、決くこそのおちたるなるべし。此説に依て、今は補へ試みつ。まどはし

〔釈〕追まどはしの意にて、失ひたる事也。

我にえさせよ

〔評〕此一段、遠く玉かつらの巻を書出べき伏案なり。玉かつらを尋ね出し給はん料に、右近を二条院へのこしとどめ、さてそれにかたらひあつらへ給ふ事を先いひて、後に初瀬にて右近が玉かつらにあひし事の不都合ならぬやうにかまへられたる筆つき、いとたくみなり。見ん人、心をとどめおくべし。

かの中将にも伝ふべけれど云々

〔新〕頭中将にしらせば、かの隠れたるも源のわざ也とかごとおひなん。そも世にある人故ならばさてもありなんを、かかる後にはいよいよいかひなき恨をうけんものと也。されど、さる事のいひわけにも、又女君の霊の思はん所につけてもてふを、左につけ右につけ、とはの給ふ也。

〔玉〕「とざまかうざまにつけて」は、夕顔の形見にもあり、又頭中将の子にて葵上の姪にてもあれば、いづれにつけても外ならねば、と也。

〔釈〕「とざまかうざま」の解は、小櫛まさらんか。旧説どもはひがこと多し。そのあらめのなどにも云々

〔釈〕その今幼き人につきてある乳母などにも、何とか異やうにいひなしと、と也。さるは、源氏君の名をつつみ給ふ故なり。

はかばかしくあつかふ人なしとて

〔湖〕夕顔の方にては、たれもしつかりとぞだつる人なしとて、西京にてやしなふ、と也。

夕ぐれのしづかなるに云々

〔評〕例のけしきをかかれたる筆つき、いとめでたし。秋の末のありさまを二三句につくされたり。さてこのけしきのいみじきにあはれを催し、且源氏君の御かたちのいみじきに感じて、右近が思ふ心をうごかし、次に鳩の事をとり出て、源氏君のかなしびを動かしたる、例のいといみじき筆なり。けしきのいたづらならぬをあちはふべし。

竹の中にいへばといふ鳥の

〔河〕和名抄「本草云、鶺鴒、伊倍八止、頸短、灰色也」。

〔釈案に、鶺鴒は家にすむ故の名と聞えたれば、つねの鳩なるべし。これは「竹の中になく」とあれば、山鳩と聞えたり。作者たまたま考へそこねられたるか。和名抄云、「野王按、鳩、音丘、和名夜万八止、此鳥種類甚多、鳩其惣名也」とあり。

かのありし院に此鳥の鳴しを

〔新〕かの六条わたりの院などの如き、大きにて人少なる家には、必此はどのすむ物なるを以て、かくいへり。先にはかかで今かくいふも、又文の一ツ也。

おもほし出らるれば

〔新〕「おもほし出れば」とは、恋しくかなしく思ひ給ふ故に、くり返し尋ね給ふなり。

物づつみをし給ひて、人に物を思ふけしきを見えんを、はづかしき

ものにし給ひて、つれなくのみもてなして〔こそ〕、御らんぜられ奉

り給ふめりしか、とかたり出るに、さればよ、とおぼしあはせて、

いよいよあはれもまさりぬ。をさなき人まどはしたり、と中将のう

れへしは、さる人や、とどひ給ふ。しか。をどしの春ぞものし給

へりし。女にていとらうたげになんと聞ゆ。さていづこにぞ。人に

さとはしらせで、我にえさせよ。あとはかなくいみじと思ふ御かた

みに、いとうれしかるべくなん、との給ふ。かの中将にもつたふべ

けれど、いふかひなきかごとおひなん。とざまかうざまにつけて、

はぐくまんにとがあるまじきを、そのあらむめのとなどにも、こと

ざまにいひなしでものせよかし、などかたらひ給ふ。さらばいとう

れしくなん侍るべき。かのにしの京にておひいで給はんは、心ぐる

しうなん。はかばかしくあつかふ人なしとて、かしこになんと聞ゆ。

夕暮のしづかなるに、そらのけしきいとあはれに、おまへの前裁か

れがれに、むしのねもなきかれて、もみぢのやうやう色づくほど、

糸にかきたるやうにおもしろきを見わたして、心よりほかにをかし

きまじらひかなと、かの夕がほのやどりを思ひ出るもはづかし。竹

の中にいへばといふ鳥の、ふつつかになくをきき給ひて、かのあ

りし院に、このとりのなきしを、いとおそろしと思ひたりしさまの、

おもかげにらうたくおもほしいでらるれば、年はいくつにかものし

カハユク

源詞

幾箇

あゑかに

〔雅訳〕いとわかくて物はかなくよわき意也。

いかでか世に侍らんとすらん

〔釈〕此語まぎらはし。案に、云々の御恩を思ひ出れば、夕顔と共に死ぬべき事なるを、かくおくれながらへてあるはつれなき命也、いかでか共に死ずして世にながらへんとはすらん、といひて歎きたるなるべし。「すらん」とある辞を、よくよく味はふべし。

いとしも人に

〔孟〕思ふどていとしも人になれざらんしかならひてぞ見ねば恋しき

〔湖師〕異本「人にむつれけん」と有。

〔拾〕孟津に引れたるは拾遺恋四の歌にて、今の本には「いとこそ人になれざらめ」と有。「糸による物ならなくに」を「物とはなしに」と引れたるたぐひなるべし。

〔釈〕「いとしも人に」といへるがごとく、初よりなれざらばさてあるべきを、かく御恩を蒙りて忝きは、今となりては却て悔し、といふ意也。

物はかなげにものし給ひし人の

〔釈〕物はかなげなる夕顔の心を、年来たのもしき人として打たのみなれ来りたるがはかなき、との意也。「しかならひてぞ」といふ引歌の句を、ならひといふ詞にあらはしたり。

はかなびたるこそ

〔孟〕右近が前の詞に「物はかなげにものし給ひし人」といひし詞に付て、女ははかなびたるこそよけれと源の宣ふ也。

さすがに物つつみし

〔玉〕孟津に「わが男にはしたがひ、世上には物つつみし」とあるは、たがへり。「物つつみし」は、すべてのやうをいへるなれば、夫に對して

も同じ事也。「見ん人の心には」といへるには、世上の人に對へていふ詞にはあらず。

このかたの御好みには

〔釈〕今この源氏の仰せらるる方の御好みには、夕顔はもてはなれず御好のままなりし、と思ひ出るにも残念也、といひてなく也。

空の打くもりて云々

〔評〕くれゆく秋の夕のけしき、いとあはれ也。上に「もみぢやうやう色づくほど」とありし脈をつぎて、歌のあはれを催す筆づかひ、いとめでたし。

見し人の云々

〔玉〕二の句「けふりと雲を」といはでは事たがへるやうなれど、然らず。けふりをあの雲ぞと思ひてながむれば、也。結句「むつかしきかな」とある本は誤也。

〔玉補〕「けふりと雲を」といはでかくいへる、をかし。えさしいらへも聞えず

〔釈〕右近が分をあらはしたる詞。かやうにておはせましかば

〔湖師〕只今右近が源にちかく馴るやうにして、夕顔の源とおはしまさばうれしからんと思ふに、かなしき也。

みみかしがましかりしきぬたの音を

〔釈〕上に「白たへの衣うつきぬたの音も、かすかにこなたかなた聞わたされ」とありし脈なり。

まさにながき夜

〔河〕八月九月正長夜、千声万声無止時〔白氏文集

かのいよの家の小君

〔評〕こより二たび空蟬の事を引出て、さきの脈をつぎたり。さてつひに空蟬は国へ下り、夕顔はために仏事をいとなみ給ふにて、しばらく共にかきはてられたり。此下に「すぎにしもけふわかるるも二道に」といへる歌、其どちめ也。心得おくべし。

給ひし。あやしうよの人に^世に^似ず、あゑかに見え給ひしも、かくなが^長

かるまじくてなりけりとの給ふ。十九にやなり給ひけん。右近はな^{ワタクシ}

くなりける御めのとの、すておきて侍りければ、三位の君のらう^{カハ}

たがり給ひて、かの御あたりさらず、おふしたて給ひしを思ひ給へ^{ユガリ}

いづれば、いかでか世に侍らむとすらん。いとしも人にとくやし^出

うなん。物^{*}はかなげにものし給ひし人の御心を、たのもしき人にて、^{△思ひ玉フル} ^{シカトモナゲニ} ^{夕顔} ^悪 ^{主君也}

としごろならひ侍りけること、と聞ゆ。はかなびたるこそ女はらう^年 ^来 ^馴 ^{△カチ} ^{＊源詞} ^{シカトセヌフウ} ^{アイ}

たけれ。かしこく人になびかぬ、いと心づきなきわざなり。みづか^{ラシ} ^賢 ^{△オシシ} ^{シタガハヌ△ハ} ^{キニクハヌ} ^{細源の自也}

らはかばかしくすぐよかならぬころならひに、女はただやはらか^シ ^{カシカ} ^{シヤツキリトセヌ} ^{△思フ} ^{二ハ} ^{柔和}

にて、とりはづしては人にあざむかれぬべきが、さすがにものづつ^{ヒヨットシテハ} ^{ダマサレルクラキナルガ} ^{モノハチ}

みし、見ん人の心には^{衍ナルベシ} ^{イしたがはなん} ^{細夫の心のままに也}

にとりなほしてみんに、なつかしくおぼゆべきなどのたまへば、こ^直 ^{カハユラシウ} ^{＊右近}

のかたの御このみには、もてはなれ給はざりけり、と思ひ給ふるに^詞 ^方 ^好 ^{△夕顔△}

も、くちをしく侍るわざかな、とてなく。そらのうちくもりて、風^{ザンネンニ} ^{コト} ^泣 ^空 ^曇

ひやかなるに、いといたくながめ給ひて、^冷 ^{△空ヲ}

見し人のけふりを雲とながむればゆふべの空もむつまじきかな、^{＊源} ^{夕顔} ^{△舞△} ^{△ア△カ} ^睦

とひとりごち給へど、えさしいらへも聞えず。かやうにておはせま[＊] ^{△右近ハ} ^答 ^{△夕顔△}

しかば、と思ふにも、むねのみふたがりて、おぼゆ。みみかしがま[＊] ^{△ウレシカラマシ} ^塞 ^{＊源心} ^{耳ヤカマ}

しかりしきぬたの音を、おぼし出るさへ恋しくて、まさにながき夜^シ ^帖 ^{マデガ}

とうちずじてふし給へり〔かのいよの家のこぎみまぬるをりあれど、[＊] ^誦 ^臥 ^{伊与} ^{小君} ^{△源ハ}

ことにありしやうなる

〔細〕今は空蟬に音信^レ給ふ事もなき也。

うけ給はりなやむを

〔釈〕此詞約^{フツマ}やかにして、味ひあり。源氏君のなやみ給ふを、空蟬の方にいひうつして「承りなやむ」といへる也。

〔孟〕「ここに出てはえこそとはぬ」と、歌へかけて見るべし。とはぬをも云々

〔細〕源のなやみ給ふをも空蟬はばかりて問奉らぬを、源も又などかとも音信給はで程ふるを思ひみだるる、と也。ますだは

〔河〕ぬぬなはのくるしかるらん君よりもわれぞますだのいけるかひなき余拾遺恋四に有。益田の他は大和国高市郡にあり。

〔釈〕「われぞますだの云々」といへるは実^{マコト}にて侍りけり、といふ意也。上の文の詞の初よりここに至るまで、皆源氏の御なやみを我身にうつしていへる、いとたくみ也。心を付べし。

めづらしきにこれも

〔玉〕ただ今はひたすら夕顔の事をおぼすころなる故に、「これも」といふ也。いけるかひなきや

〔釈〕案に、湖月抄頭注に秘訣を引たる所の文に、「いけるかひなきやいかに」としるせり。これはさる本の有しを引たるが、本文には脱^{ツマ}しなるべし。かくて意明らかなる故に、今いかにといふ語を補ひつ。玉小櫛補遺に、「物をよび出す詞にて、よに同じきや也」としていへる説あれど、さてもなほおだやかならず。さて意は、いけるかひなしといひおこせしは何事ぞ、と咎めたるにて、俗言にヘン何ノコトジヤヤラといふ意也。「たがいはましごとにか」とは、そは誰がいふべき事にかあらん、こなたよりこそいふべきことなれ、といふ意也。

うつせみの云々

〔釈〕初句は枕詞ながら、猶かのもぬけを含めるなるべし。さて世はうき物としりはてしを、再びかやうにとはるるにつけて、其言のはに命をかけたどめたるは、といふ意なり。玉小櫛補遺に、「言のは」のはは「蟬の羽の縁の語也」といへり。さも有べし。

はかなしや

〔釈〕さる言のはにかかりて生^イとまりたる命もはかなし、と歌よりつづけたる歎息の詞也。

御手も打わななるるに

〔釈〕御手のわななるるにみだれかき給へるさま、かへりてうつくしといへる也。これかの源氏君をほめたる例の文なり。

かのもぬけをわすれ給はぬを

〔細〕此歌に「空蟬の」とよみ給ふは、猶かのもぬけの事を忘れ給はぬよと思ふ也。

あやしやいかに思ふらんと

〔玉〕軒端^{マシラヒ}狄の、すでに男女の交をなしたる事を、少将のあやしと思ふべし、とおぼす也。さてそれは我ぞといふ事を、少将にもしらせがてらの心にて、此文はつかはす也。下に「我なりけりと思ひあはせば、さりとも云々」とあるにて心得べし。「思ひあはせば」は、男女の交をなしたるは源氏君にてありけりと、此文にて思ひ合すなり。ただ注のままにては、思ひあはすといふこと聞えず。よく味はふべし。

〔玉補〕「あやし」とは、様あしく見ぐるしきやうなる事をいふ詞にて、此女の破瓜の事をさしての給へり。さてそれを少将のいかにいふかしく思ふらんと、と思しめす意也。小櫛のときかたにては、此文意いまだ明らかならず。

〔釈〕小櫛も補遺も、「あやしや」といふ詞を、少将のあやしと思ふさまにとかれたるは、たがへり。もし其意ならば、「あやしういかに思ふらん」などぞいふべきを、やといへるは、さる意ならざる事論なし。少将をかよはすと聞しめして、源氏君の「あやしや」とおもほすよし也。「いかに思ふらん」とあるが、破瓜の事也。

しにかへり思ふ心は

〔玉〕「かへり」は、其事をつよくいふ詞也。「きえかへる」「わきかへる」などのことし。今世の言にもいふこと也。

〔釈〕この比病にわづらひ給ひし事を、軒端狄のゆゑなるやうにいひなし給ふ也。

＊
ことにありしやうなることづてもし給はねば、
細 空蟬の心也
うしとおぼしはてに
殊 已前ノヤウ 言 伝 ツライ 竟

けるを、いとほしと思ふに、かくわづらひ給ふをききて、さすがに
煩 遠 △伊予△下 △方テヲ △御違例ヲ 言

うちなげきけり。とほくくだりなんとするを、さすがに心ぼそけれ
二 △ナニトナウ

ば、おぼしわすれぬるかところみに、うけ給はりなやむを、こと
△モハヤ △忘 △方テヲ △御違例ヲ 言

にいでてはえこそ。
出

＊◆空セミとはぬをもなどかとはでほどふるにいかばかりかは思ひみだる
間 経

る。＊△侍ルますだはまことになん、と聞えたり。めづらしきに、これも
珍 空セミ

あはれわすれ給はず。＊文の詞いけるかひなきや①②③に、たがいはまし
△ヲ 補 誰 イハウ

ごとにか。
言 △アルラン

＊源うつせみの世はうき物としりにしをまたことのはにかかるいのち
ツライ 復 言 端 カカリテイキトマル

よ。＊はかなしや、＊御手も打わななるるに、みだれかき給へる、
フルハレル 乱

いとどうつくしげなり。＊空蟬心猶かのもぬけをわすれ給はぬを、いとほし
ヒトシホ 美 マダ

うもをかしうもおもひけり。＊地かやうにくからずはきこえかはせど、
憎 オモシロウ

けぢかくとは思ひよらず。＊サウハイフモノノ ナンデモナイモノナラズトハミラレ
気 近 △アヒ奉ラン

やみなん、と思ふなりけり。＊細 軒はの狄也 カタッホウノ人ハかのかたつかたは、蔵人の少将をなん
止

かよはす、ときき給ふ。＊◆シヤウシヤ ドノヤウニ デアラウあやしや、いかに思ふらん、と少将の心の

うちもいとほしく、またかの人のけしきもゆかしければ、小君して、
軒端狄 キキタ

しにかへり思ふ心はしり給へりや、といひつかはす。
文の詞 △イカニ

ほのかにも云々

〔**釈**〕「ほのか」は、「かすか」といはながごとし。「軒ばのをぎ」は、軒近く植たる萩の事、「結ぶ」は、物のさはりにならぬやうに引結ぶ事也。さて其「結ぶ」に契を結び給ひし事をかねて、かの碁打つる夜、かすかにも契をむすばずは、露ばかりのうらみをも何が故にかくべきぞ、といふ意也。さてそのかごとをかくるは、少将のかよふといふことをかこつ意なり。諸注にこれを源氏君の病をとほぬをかこち給ふ意にとかれたるは、いみじきひがこと也。病をとほぬばかりを、さしもかこつべき事は。「しにかへり思ふ」とあるも、皆少将の事なるをや。

〔**玉**〕「露の」は、「萩」又「むすばずは」の縁にて、意は「いささかの」といふ意也。「かごと」は、いひぐさなり。

たかやかなるをぎにつけて

〔**箋**〕人目をはばからざるよし也。よのつねの義にあらず。

〔**釈**〕此説のごとし。わざと少将に見られんとてのわざ也。これにつけても、「かごと」は少将の事なるを知るべし。

我なりけりと思ひあはせば云々

〔**釈**〕軒端萩の、すでに男女の交したるは、源氏君なりけり、と思ひあはせば、たとひ破瓜の後なりともその罪はゆるすべし、と也。さるは、源氏君の御勢ひつよく、何事も世にゆるされ給ふ故なるべし。さる故に、「御心おこりぞあいなかりける」と評じたる也。

少将のなきをりに見すれば

〔**釈**〕源氏君は少将にも見せまく思ひ給へども、小君とり伝へて少将の居ぬ時に見せし也。

こころつしとおもへど

〔**玉**〕源氏君のつれなきを心うくはおもへど也。

さすがにて

〔**釈**〕さすがにすて置がたくて也。

かごとにて

いひぐさにて也。歌はわろけれども、早く出来たるばかりを申わけにして、といふ意也。申わけは、即其事をいひぐさにする也。

ほのめかす云々

〔**新**〕忘れぬ物ながら、君は専ら絶給ふと思ひをるに、又かくおどろかさせ給ふにつけては、有し御契をすてはて給はぬにやと、猶なかば思ひた

のまれて物思ひのそひ侍る、されどあらはれて色に出べきならねば、下に「むすばほる」といふなるべし。且女はもとよりわすれぬを、「風につけても」のものと辞にしらせたり。

〔**釈**〕歌のおもては、ほのめきて吹くる風の寒きにつけても、萩の下葉のなかばは露に結ばれゆくといへるにて、折からやうやう寒くなりて、露もおき萩葉も枯ゆくによせたる也。初句は上の歌に「ほのかにも」とあるをうけて転したる也。「下萩」は、萩の下葉といふ意なり。

〔**玉**〕「なかばは」とは、うれしくもあり又思ひむすばほれする意なるべし。うちとけで

これは空蟬の事にて、うちとけずして向ひゐたる也。軒端萩の其時の顔をおぼし出るにつけて、向ひゐたりし空蟬の事をもふとおぼし出て、思ひくらべ給ふ也。これを軒端萩の事としては、「人は」といへる詞かなはず云々。〔**拾新**〕同意。

なにの心ばせありげにもなく云々

〔**釈**〕こころより軒端萩の事也。かく二人の事をむかへてとりどりにいへるは、空蟬巻よりの文の体也。

〔**新**〕「さうどき」は、空蟬巻に「きはきはさうどけば」とありしこと也。

なほこりすまに

〔**拾**〕「ま」は、そへたる調也。万葉第十五に「あはずまにして」とよめるも、

〔**河**〕こりすまにまたもなき名はたちぬべし人にくからぬ世にすまへば古今集

〔**釈**〕「なき名」を「あだ名」とかへられたる、例の筆つき也。「にくからず」も、此歌の詞より出たる也。「こりすまに」は、夕顔・空蟬などに懲給ふべきに、なほ懲すに也。

四十九日

〔**釈**〕ふるく「なななぬか」とよまれたるを、拾遺に音によむべきよいへるに従ふべし。前後の例也。

ひえの法華堂にて

〔**河**〕在止観院西。

〔**細**〕李部王記云、「天慶六正六、藤寛子卒。当三七日、於叡山東法華堂、修諷誦云々」。

さうぞくよりはじめて云々

〔**釈**〕法師に布施する装束より始めて、然るべき物、金銀諸具を省略せず沙汰してつかはし給ふ也。「経仏のかざり」は、経巻の軸、表紙、仏像の荘厳などをいふなるべし。

惟光が兄のあざり

〔**釈**〕前に見えたる人にて、其縁なり。

〔**源**〕*ほのかにも軒端の萩をむすばずは露のかごとをなににかけまし。
チラト デモ トウシテ ヤウソ

*たかやかなる萩につけて、しのびてとのたまへれど、とりあやまち
高 △御フミヲ ヒソカニ△ワタセ △小君ガ

て、少将も見つけて、われなりけりと思ひあはせば、さりともつみ
△御フミヲ 源 ヒソカニ△ワタセ 罪

ゆるしてん、とおもふ御心おこりぞあいなかりける。少将のなきを
免 ジマン ラチモナイコトナリ ヲラヌ

りに見すれば、心うしとおもへど、かくおぼし出たるもさすがにて、
*軒端心 ココロツライ

御かへりくちときばかりをかごとにてとらす。
ヘンジ ロ ハヤキ △小君ニ

ほのめかす風につけても下をぎのなかばは霜にむすばほれつつ。
*軒端萩 源ノ音信 自身ニ比フ 半

てはあしげなるを、まぎらはしざればみてかいたるさま、しななし。
書 患 シヤレコバエ 書 ヒンガナイ

ほかげに見しかほおぼしいでらる。うちとけでむかひゐたる人は、
火 影 顔 △カノ 向 居 空蟬

えうとみはつまじきさまもしたりしかな。なにの心ばせありげもな
疎 寛 ラレヌ 顔 △ヲ *軒端のさまなり キドリ

く、さうどきほこりたりしよ、とおぼし出るにくからず。なほこ
ザワツキ △マンザラ *地 ヤハリ

りすまに、又もあだ名はたちぬべき御心のすさびなめり『かの人の
懃 フルジャレ 夕顔

*四十九日、しのびてひえの法華堂にて、ことそがず、さうぞくより
ヒソカニ比叡 ① 事 省 *装 束

はじめてさるべきものども、こまかに、ず経などせさせ給ふ。経仏
然 巨 細 ②

のかざりまでおろかならず、惟光があにのあざり、いとたふとき人
莊 嚴 ソリヤク 兄 阿闍梨 行徳アル也

文章博士

〔箋〕文章生の輩、学業を経て後、博士になる也。
願文つくらせ給ふ

〔玉補〕草稿をかきて見せ給ひて、此趣にてさりぬべく取つくろひしたたむべきよし仰せらるるをいふ也。下に「ただかくながら云々」と有にてしるべし。

すぐせのたかさよ

〔釈〕その人とは知れねど、源氏君のかくまでに思しめすは、しあはせのよき人也、といふ意也。

さうぞくのはかまを

〔釈〕前に見えたる布施物の装束也。これを取よせて歌をかきつけ給ふなるべし。さて歌のさまを思ふに、「袴」は下袴と聞えたり。

なくなくも云々

〔釈〕いにしへは、男女相かたらひて又人にあふまじき誓に、下袴の紐を結かはして他人には解すまじく口がためたりと聞ゆ。この歌なるも、さる意をそへたり。今日なきながら我ゆひかたむるこの下紐を、いつの時、何れの世にか再びときて夕顔を打見るべき、といふ意なるを、「どく」に「打とけて」といふ意をかねたるゆゑに、「とけて」とはいへる也。「今日は」のはもじはぞとあらまほしげなれど、「今日はなくなくも」といふ意なれば、かくてもよろし。

〔玉〕「とけて見るべき」は、打とけて逢見るべき也。注に解脱の義といへるは、かなはず。

このほどまでは云々

〔箋〕四十九日の間は中有にただよふ義也。然れば其識の生処、六道の輪廻いまだ定まらず。仍て造物造経等の善根を修して、善果を得せしめんと也。中陰経の説なり。

〔巴〕今日の作善に生処定らんと也。

〔釈〕六道の中、いづれの道に定まりて夕顔の魂はおもふくらん、とおもほしやる也。

かのなでしこの

〔評〕玉かづらの君のおひたち給ふ事を頭中将に聞せ給はぬよしを、ここにことわりおく伏案、いとめでたし。かくて後にたいめんし給ふ処にかかれたる事を見るべし。おのづからあちはひふかし。

かの夕顔のやどりに

〔孟〕五条の宿には夕がほのいづかたへ行つらんと思ふ也。

〔釈〕「其ままに」は、源氏君と書給へるままに也。

〔評〕夕顔の事はすでに竟たるを、なほ此一段をあらはして玉葛卷の伏案をのこせる也。玉かづらの巻の始に「年月へだたりぬれど、あかざりし夕がほをつゆわすれ給はず」と書出られたるは、此巻を受継たる詞なることはいふもさらなり。〔其御めのものをどこ、少弐になりていきければ、くだりにけり、かのわか君の四つになる年ぞ、つくしへはいきける、とある所よりは、此段の脈をつぎたるなり。又「惟光をかちければ」とあるは、上に「惟光云々、いみじくたばかりまどひありきつつ、しひておはしまさせそめてけり云々、とあるよりこなたの首尾をあはせて結びたる也。そこにもいへる如く、源氏君を夕顔の宿へみちびくはいといと難きわざなる故に、其子細をばはぶきて、ただ惟光のたばかり事にしなしたる也。さるからに、ここにも又「いとかけはなれ云々」といひて、つひにたばかりてかちごとを通れたる意として終りたり。作りぬしの用意をふかく思ふべきなり。

さばかりにやとささめきしかば

〔箋〕源といふ事を大かたは知る也。

〔孟〕「ささめきし」は、「ささやきし」也。

これみつをかちけれど

〔湖〕源氏へ媒せしは惟光なれば、其ゆくへをしらんどかこつ也。

なほ同じことすきありきければ

〔湖〕師惟光も、もとよりいひよりしにかはらず、私のけさうをする也。しらぬさまを見せんためなり。

もしすりやうの子どもの

〔細〕自然愛顔の子供など夕顔をとりて、頭中将におぢ憚りて国へあて下りたるか、など思ふ也。

〔評〕この事ゆくりなきやうなれど、玉葛卷に大夫監を出すべき端をあらはせるなるべし。「この家あるじぞ云々」とあるは、乳母のむすめが玉かづらの事におりたつべき結構なるべし。

にてになうしけり。御文の師にてむつましくおぼす。もんざうはか

せめて、願文つくらせ給ふ。その人となくて、あはれと思ひし人の、

はかなきさまになりたるを、あみだ仏にゆづり聞ゆるよし、あは

れげにかきいで給へれば、ただかくながらくはふべきこと侍らざめ

りと申す。しのび給へれど、御なみだもこぼれて、いみじくおぼし

たれば、なに人ならん。その人とは聞えもなくて、かうおぼしなげ

かすばかりなりけん、すぐせのたかさよといひけり。しのびててう

ぜさせ給へりける、さうぞくのはかまを、とりよせ給ひて、

なくなくもけふは我ゆふしたひもをいづれの世にかとけて見るべ

き。このほどまではただよふなるを、いづれの道にさだまりておも

ふくらん、とおもほしやりつつ、ねんずをいとあはれにし給ふ。頭

中将を見給ふにも、あいなくむねさわぎて、かのなでしこのおひた

つありさま、きかせまほしけれど、かごとにおぢてうち出給はず

かの夕がほのやどりに、いづかたに、と思ひまどへど、そのまま

にえたづね聞えず。右近をだにおとづれねば、あやしとおもひなげ

きあへり。たしかならねど、けはひをさばかりにやとささめきしか

ば、惟光をかちけれど、いとかけはなれけしきなくいひなして、

なほおなじことすきありきければ、いとどゆめのここちして、もし

ずりやうの子どものすきずきしきが、頭の君におぢ聞えて、やがて

みてくだりけるにや、とぞ思ひよりける。この家あるじぞ、にしの

めのとのむすめ

〔細〕揚名介の妻は嫡女也。一人はつくしに住つきたり。一人は玉かづらに付てのぼりき。玉葛巻に見えたり。

三人その子はあるて

〔湖〕めのどの子也。

〔釈〕案に、「その」とさしたるは、めのとのむすめをいへるごとく聞えたり。さらば、乳母のむすめの揚名介が妻の子三人あり、といふにや。されど、次々に用意あるを思へば、猶めのどの子か。考ふべし。

うこんはこと人なりければ

〔細〕前にいふがごとく、右近は別のめのどの子なり。

わか君のうへをだにえきかず云々

〔評〕これは玉葛巻に、〔かの西の京にとまりしわか君をだにゆくへもしらず、ひとへに物を思ひつつみ、又、今さらにかひなき事によりて我名もらすな、とくちがため給ひしをはばかり聞えて、たづねてもおとづれ聞えざりしほどに云々、とある所へかけて書とどめられたる也。文の詞によくよく心とどめてあちはふべし。皆彼巻の伏案なり。

ゆくへなくて

〔玉〕玉かづらのいかになり給へるもしられぬ也。

君はゆめにだに云々

〔評〕此一段は、上の変化の段の結びなる中に、妖物の故を注釈したる也。此段の詞をもても、諸抄に御息所の霊といへる説の妄なるを知るべし。さて夕顔を夢に見んとおもほしたるに、変化の女をさへ見給へりとかかれたる、いとめでたし。かの段にも夢のうちに見給ひたるを、ここにもまた夢に見給ひて、その妖物のしかりし故をさとり給へるやうにかかれたる所、露のあやまちなくしていといとめでたし。

かの有し院ながら云々

〔釈〕ありし院にて見給ひし夢の中に、夕顔に添りし変化の女の同じかたちにて見えたる也。女の、とよみきりて、さまざま云々、と読べし。此詞どもにては、夕顔をもひとつに見給ひしと聞ゆ。さて「法事し給ひて又の夜」といへるは、法力によりてさる妖物も退きたる事をにほはせたるなるべし。

われに見いれけんたよりに

〔釈〕妖物の見入るといふこと、今俗もいふ詞なり。さて源氏君は、太刀を抜などしてふせぎ給ひし故に、転じて夕顔に祟りたるさまにかきなしたる也。

いよのすけ神無月の云々

〔釈〕「ついたち比」は、上の十日をひろくさして云例也。

〔評〕この一段は、関屋巻へかけてとどむる結構也。かの巻の初に、〔いよの介といひしは、故院かくれさせ給ひて又の年、ひたちになりてくだりしかば、かのはきはき木もいぎなはれにけり、とあるは、ここの脈を継たるなり。心得おくべし。

女房の下らんにとて

〔新〕介の往反は常なるを、此度は女房具して下らんにはとて、ぬさ、料の物など、いとねもころによくし給ふ也。「錢を『たむけ』といふ」といへる説は強たり。別には、ぬさ袋にぬさ、其外、扇・きぬなど多くとり添ると、おちくぼなどにも委し。それをここにはすべて「たむけ」といひたる也。さて是は、男のかたへ也。女方へのは、大かた委しく書たり。此女方の同じさまなる物贈り給ふを、文をゆづり合せて書たるのみ。

〔釈〕「たむけ」を「餞別の贈物也」といふ旧注も、強たるにはあらず。

もとは道祖神の祭物のぬさより出たるが、転りて贈物の名となれりしなり。

くし扇

〔巴〕「櫛」は、もののごどこほりをとく故なり。「扇」は、「あふ」といふ心なり。いづれも祝したる心也。

ぬさ

〔万〕祓麻、旅にて道祖神に手向る故に、是を旅人の贈物に古来しけるなり。かのこうちきもつかはず

〔細〕前のもぬけを返し給ふなり。

〔評〕此段、空蟬の事をしばらくとどむる所なる故に、此こうちきをかへして首尾をととのへられたる法、いといとめでたし。あふまでの云々

〔箋〕さりとて逢ふ事もやど、それまでの形見にとどめしうす衣の袖くつるまで、我思ひのいたづらになりけるよ、と也。

〔釈〕袖の朽るに、涙の故なるよしをおもはせたるなるべし。

こまやかなる事どもあれど

〔玉〕源氏君の御文に也。

御つかひは

〔湖〕伊与介へのおもてむきの使はかへりたる也。

京のめのとのむすめなりける、三人その子はあるて、右近はこと人

なりければ、思ひへだてて、御ありさまをきかせぬなりけり、とな

きこひけり。右近はたかしがましくいひさわがれんを思ひて、君も

いまさらにもらさじ、としのび給へば、わかぎみのうへをだにえき

かず、あさましくゆくへなくてすぎゆく◎君は夢にだに見ばや、と

おぼしわたるに、このほうじし給ひて又の夜、ほのかにかのありし

院ながら、そひたりし女の、さまもおなじやうにて見えければ、あ

れたりしところにすみけんものの、われに見いれけんたよりに、か

くなりぬることとおぼしいづるにも、ゆゆしくなんいよのすけ神

無月のついたちごろにくだる。女房のくだらんにとて、たむけ心こ

とにせさせ給ふ。またうちうちにもわざとし給ひて、こまやかにを

かしきさまなる、くし、あふぎ、おほくして、ぬさなどいとわざと

がましくて、かのこうちきもつかはず。

あふまでのかたみばかりと見しほどにひたすら神のくちにけるか

な。こまやかなることどもあれど、うるさければかかず。御使かへ

りにけれど、こ君してこうちきの御かへりばかり聞えさせたり。

せみのはも云々

〔細〕もぬけは夏の衣なり。今は冬の衣なる故也。
〔釈〕蟬の羽のごとく薄かりし衣も、今は裁かへて冬となりたるに、今さら夏衣をかへすを見るにつけても音に泣るる、といふ也。「たちかへて」といふ中に月日のたちたることをこめ、かつ源氏君の御心のかはりたるをにははせたるにも有べし。さてせめて形見とも見給ふべきに返し給ふは、思ひ絶給ふなるべければ、さすがにかなし、といふ意也。「かへす」は衣の縁、「ねなく」は蟬の縁なることは、いふも更なり。
新十月更衣の日にはあらねど、今は冬ちかくなりてけの衣などは歌のとはことなれば、かくよめるにや。

思へど

〔箋〕思へども思へども也。深く思ふ時の詞也。

〔釈〕案に、どはばの誤にや。此もじ互に相誤れる事多し。どにては穩ならず。ふりはなれぬるかな

〔玉〕万水一露に「伊与へ下向の事也」といへる、よろし。

〔釈〕俗言に「ふり切てしまうた」といふ意也。

ながめくらし給ひて

〔釈〕もの思ひに一日空をながめて日を暮し給ふ也。すぎにしも云々

〔細〕「過にし」は夕顔上、「けふわかるる」は空蟬也云々。

〔玉補〕これは空蟬と夕顔とをいふはもとよりながら、詞の面は、九月尽に暮にし秋を「過にし」といひ、けふ立冬にてくれぬる秋を「けふ別るる」といひたる也。さらでは立冬の事をいへるよしなし。此歌は十月になりての事なり云々。

〔釈〕下の句は、夕顔の過ゆくと空蟬のたちてゆくとを、秋のくれゆくにいひよせたる也。さて意は、過にしとけふ別るるとは二道にゆけど、共に行方をしらぬ秋の末かな、といふ意にて、みな目に見えず成ぬるをふかく歎き給へるなり。巧にして余情かぎりなき歌也。

猶かく人しれぬ事は云々

〔湖〕空蟬の事も夕顔の事も、みな人しれぬこと也。

〔釈〕上の空蟬と夕顔との事を、一つにすべて結びたる詞也。「くるしかりけり」と「おぼし知ぬらん」とは、心しらひの多くて苦しき事と、これらによりて知給ふべしと、地より評じたる也。いといと余情あり。

＊◆^{空せみ}せみのはもたちかへてけるなつごろもかへすを見てもねはなかれ

けり。おもへど、あやしう人ににぬ心づよさにても、ふりはなれぬ

るかな、と思ひつづけ給ふ。けふぞ冬たつ日なりけるもしるく、う

ちしぐれて、空のけしきいとあはれなり。ながめくらし給ひて、

＊◆^源すぎにしもけふわかるるもふた道にゆくかたしらぬ秋の暮かな。

＊^地猶かく人しれぬ事はくるしかりけり、とおぼししりぬらんかし』

＊^{草子地}かやうのくだくだしき事は、あながちにかくろへしのび給ひしも、

いとほしくて、みなもらしとどめたるを、などみかどの御子ならん

＊[◆]からに、見ん人さへかたほならず物ほめがちなる、とつくり事めき

＊[◆]とどりなす人、ものし給ひければなん。あまりものいひさがなきつ

み、さりどころなく。

たる跋文のごときもの也。さればいたづらに見過すべきにあらず。なほそのよしを委くいふべし。先ツかの帚木巻に「光る源氏云々、いとどかかるすき事どもを、末の世にも聞伝へて、かるびたる名をやながさん、としのび給ひけるかくろへ事をさへ、かたりつたへけん」といへるは、ここに「かやうのくだくだしき事は、あながちにかくろへしのび給ひしも、いとほしくて」といふに当り、「人の物いひさがなさよ」といへるは、「あまり物いひさがなき罪、さり所なく」といふにあたれり。但し、かれは世人の口さがなきをいへるを、これはそれを記す人の口さがなきと転して結びたり。其次に「さるはいといたく世をはばかり、まめだち給ひけるほどに、なよびかにをかしき事はなくて云々」といひ、又「さしもあだめきめなれたる、打つけのすきずきしさなどは、このましからぬ御本上にて」などいへるは、ここに「かたはならず物ほめがちなる」と難じたる事にて、源氏君の本性のまめやかなるにあたれり。又「まれにはあながちにひきたがへ、心づくしなる事を、御心におぼしとどむるくせん、あやにくにて、さるまじきふるまひも打まりじける」といへるは、「いとほしくて、みなもらしとどめたるを」といへる事にあたれり。然れば、かの序を結びたる跋なる事は、更に論なし。これを一部にわたるといふ故は、此物語は、先達もいはれしごとく、女のさかしだてするをふかく慎みたるものにて、物のことわりをしたたかにいふをいとへるからに、いはまほしき事どもをも皆何となく物語の中に挿みて、きはやかならぬをむねとせられたり。さればここにもただ源氏君のかくろへ事をするすばかりのやうにいひなしたるにはあれど、巻中にいへるおもふきは、其世にみづから見聞して、心にあまる事どもをにははせしるしたるなれば、よき人のよく見て深く考へあちははば、世のたすけともなるべき意を含めたるをほのめかさんどて、「つくりごときでとりなす人、ものし給ひければ」と、難をまうてかかれたるなるべし。さるは、この物語はもとより作り事なれば、作り事といはんになでふことかあるべきを、作り事也ととりなす人のありし故に、のこりのわるき事をも皆しるしたり、といへるに、おのづからさる意とはしられたれば也。然れば、源氏君の「あながちにかくろへしのび給ひし」といふ事は、うつせみ・夕がほの類のみならず、藤壺宮・朧月夜君などの事をはじめて、さまざまの事どもをもとりすべていへるものなるべくおぼゆ。されど、そはみな作りぬしの、世に見え

かやうのくだくだしき事は

〔細〕夕顔の上の事、空蟬の事などなり。皆此事をばしるすまじく思ひたれども、と也。

〔湖師〕かやうの事は、源もあながちにしひて隠ししのび給ひしかば、源のためいとほしくてみなもらしかざりしを、と也云々。

〔釈〕外へもらして記すことを止めたるを、といふ意也。

みかどの御子ならんからに

〔玉〕いかに帝の御子なればとて、といふ意の詞也。

見ん人さへかたほならず

〔玉〕源氏君のふるまひをかたはらより見る人にて、すなはち見て物語をかきたる人をいふ也。

〔釈〕「かたほならず」は、「まほにとりなして」といふ意にて、あしき事をとりつくるふを云。

とりなす人ものし給ひければなん

〔釈〕作り事のやうにいひなす人ありければ、やむ事を得ずのこりなくみなしるしつきたり、といふ意也。

あまりものいひさがなきつまさり所なく

〔釈〕のこりなく記しつけたるものから、余りにもいひさがなき罪は記者のうへに避ん所もなくおぼゆる、と也。見ん人さるかたにゆるし給へ、などの意をふくめたり。「さり所」は、さけ所といふがごとし。

〔評〕「かやうのくだくだしき事」とは、上に「かく人しれぬ事は」とあるをうけてかかれたれば、細流に注し給へるごとく、空蟬夕顔の事をさしたること、論なし。然れども、ここは一部の凡例めきたる処なれば、箋にいはれたるごとく、源氏一部の好色の事にもなべてわたる事也。そは次の文に「みなもらしとどめたるを」とある皆といふ詞にて、しか聞えたり。さてこのすべての意は、「かやうの事は、源氏君のあながちにかくし給ひし事なれば、いとほしくてみな漏し省きて筆を止めたリしを、或人の見て、『いかに帝の御子なればとて、傍より見ん人までも共にわろき事をかくして、かたほならず物ほめがちにはしるしたるぞ。あしき事はあしきにてあらはすが、私なきにはあらずや。さればこれは、偽りまうけたる作り事也』とやうにとりなしひければ、せんかたなくて、のこりなく記したる也。されど余りに口さがなき罪はさり所もなく皆記者の身におふべし。見ん人さるかたにゆるさるよ」といふ意なり。これを細流また湖月抄師説などに、帚木巻の発端にいへることの首尾なるべくいはれたるは、まことにさるることにて、かの小序のごとき文を結び

しらがへるさまをほのかにあらはしたるなれば、罪はまことにさり所なけれども、しるしおきて見ん人の心にまかす、といふ意を含めて結びたるなるべし。さるは、わざと詞をかすめて「とりなす人、ものし給ひければなん」といひのこし、「さりどころなく」とふくめてどぢめなどして、余情をおもはせられたるにて、殊にさる意とは知れたり。「さりどころなく」と、くもじにてとどめられたるは殊更にめでたく、いといと心ふかき書ざまといふべし。さればこの物語は諷諭なりといふ説も、むげに見しらぬ説にてはあらざるべし。されば此意を一部のうへにおしわたして、作りぬしの底のころをよくよくふかく考へ味はふべき事也。さて帚木巻よりここまでは一つづきの事なるを、巻を分ちてさらぬやうにとりなし、つひにここにて上文の意をとりすべて結ばれたるは、かへすがへすもいみじき事、上に所々いへるがごとし。

嘉永六年癸丑新刻

鹿鳴草舎蔵板